

Mirage in Blue I



神原 涼

Mirage in Blue - 庭そうじ

「バイバーイ！」

学校の門のところで友だちに手をふって、
ランドセル、カタカタ鳴らして走る帰り道。

「あ、かわいい！」

途中の道の、知らないお家の玄関先の庭。

赤やピンクや白やいろんな花が咲いてる。

よいっしょ！って、しゃがもうとしたら、

「あっあっああっ」

ドスン！ 背中のランドセルが重くてひっくり返った！

もうっ！ ランドセルってキラーイ！

一年生ならいいけどさあ、もう五年生なのにランドセル

なんてガキっぽいよお。

パンパンってお尻についた泥をはらって立ち上がる。

早く帰らなきゃ。寄り道してると叱られるんだもん。

吉田さん、すぐママに言いつけるんだから！

でもなあ、急いで帰ったって吉田さんと二人きりだからつまんな〜い。

でも... 帰ろ。

木の塀に囲まれた白い壁の家が私の家。

「ミラちゃんの家ってアメリカのなんでしょ？」

ゆう子ちゃんに聞かれて「うん」って言ったけど、

ほんとはよくわかんない。だって、アメリカなんて行ったことないもん。

ママはいつでもアメリカに行くんだよね。私はい〜っつもお留守番。

つまんな〜い。

「ただいまあ」

ドアを開けると、奥から吉田さんが出てきた。

「ミラちゃん、遅いじゃないの！ 今日バレエの日でしょ！ 早くしたくしてちょうだいよ！」

」

吉田さんが手にレオタード持ってイライラして言った。

「また私が奥様に叱られるんだから」

「今日は先生が東京に行っててお休みだよ。先週そう言ったじゃーん！」

「あら、そうだった？」

もうっ、いつでも私の言うこと忘れるんだからあっ！

「早く手を洗っておやつ食べて宿題してね」

吉田さんはそう言ってバタバタって奥に引っ込んだ。

吉田さんって、いつもバタバタセカセカしてる。

「そのわりに仕事がのろいのよ！」

ママはいつもイライラしてそう言ってるよ。

手を洗ってキッチンに行くと、テーブルの上にケーキがポンって置いてある。

「これ、どこのケーキ？」

「ルーブルですよ。奥様が買ってらしたのよ」

「え〜っ、ルーブルのって、お酒いっぱい入っててミラきらいってママに言ったのにい」

「そんなこと言われたって、奥様が買ってらしたんだから、私は知りませんよ」

吉田さんはイライラしたみたいにそう言うと、またバタバタって奥の方に行っちゃった。

いや、ケーキ食べないで、ミルクティーにお砂糖いっぱい入れて飲むもーん。

ミルクティーのカップ持って、リビングの窓から庭を見た。

あ〜あ、つままない庭！ 芝生と木ばっか！

もっとさあ、さっきの家みたいにお花とかいっぱい植えればいいのになあ。

ママがきれいなんだよね。お花植えると虫とかチョウチョが来るからって。

なんでだろ？ チョウチョかわいいじゃん？って...

あれ？ な、なんだろ？ 木の下のところに...

なんか、だれか、いる...！

「よ、吉田さーん、あ、あそこ、だれかいるよ？」

大声で吉田さんと呼ぶと、めんどくさそうに顔だけ出して、窓の方に目をやった。

「ああ、あれは庭掃除の人ですよ」

「庭そうじ？」

窓に顔を近づけてよ〜く見ると、おじいさんみたいな人が木の下にしゃがんで葉っぱを集めてる。

「シルバー人材って行ってね、年寄りが暇つぶしにああやって掃除とかするらしいのよ」

「へえ」

「安いですって。植木屋だとちょっと仕事しただけで何万も取られるからねえ。

奥様もしっかりしてるよ」

吉田さんはそう言ってフンて鼻で笑った。

あんなに年取っても働くんだあ、すごいなあ...って、見てたら、

べつの木のかげから、もう一人出てきた。

でも... おじいさんじゃないよ？

「吉田さん、あの人は？」

私が指差した方を見て、

「あれはあのおじいさんの孫ですってさ。手伝いに連れてきたみたいよ。」

やっぱり年寄り一人じゃムリなんだろうね。やれやれ、二人分のお茶出さないとならないよ」
吉田さんは顔をしかめてそう言った。

あれ？ あのもう一人の方... おとなじゃないよ？

すごい背は高いけど...中学生かなあ？

でも、なんか、すごい汚れちゃって、てか、なんかあのトレーナー、
衿のところがデロ〜ンて伸びちゃってて、ひじのところに穴が開いてる。

それに、すごい汚い黒のゴム長...！

それに、あのジャージのズボン... 泥だらけでひざのところにツギしてあって、

でも... どっかで見たことあるんだけど... あっ！ あれって、うちの学校のジャージじゃない？

そうだよ！ えっ、じゃ、あの子、うちの小学校？ 小学生？

「ミラちゃん」

ビクツとして振り向くと吉田さんがお盆持って立ってた。

「あの人たちにお茶持っててくれない？」

「エ〜、ミラがあ？」

「私はちょっと手が離せないからさ、お願いね」

吉田さんてさあ、ママがいないと私に用事頼むんだよね。

いいけどさあ。渡されたお盆の上、お茶がふたつとおせんべい。

「吉田さーん、ケーキは出さないの？」

「ルーブルのなんて、もったいない！」

「でも、このおせんべい、ずっと前からあるやつだよ」

「ああいう人たちにはそれでたくさんですよ」

吉田さんは今度は奥の洗濯干し場にバタバタ出てった。

なんでよお？ いっぱいあるんだからいいじゃん！

どうせママだって食べないし、私はぜーったい食べないし、結局吉田さんが持って帰って、
あとののは固くなっちゃって捨てちゃうじゃん。

チラッと洗濯干し場の方を見て、テーブルの上の私の分のケーキをお盆に乗せて、
冷蔵庫からルーブルの箱出して、ほらあ、こーんなにあるじゃーん。

もひとつお皿に乗せて、ポーチのドアから庭に出た。

おじいさんと男の子は私に気づかないで仕事続けてる。

「あ、あのお！」

かがんでたおじいさんと、枝を束にしてた男の子がこっちを見た。

「お茶ですけどお」

「ああ、そりゃどうも、すいませんねえ」
おじいさんがペコペコ頭を下げた。
チラッと男の子を見ると、胸のところに名札...！
あっ、あれって、六年生のだ！ 台布が紺色だもん。
私は五年だから緑だけど。思わず顔を見ると、
男の子も前髪の間から私のこと見てて、目が合っちゃった！
なんかちょっと恥かしくなって、あわてて家の中に入った。
そっかあ、六年生なのかあ。見たことなかったなあ。
やっぱいっこ上だからかなあ。

リビングの窓からそ〜っと覗くと、おじいさんと六年生は、ポーチのコンクリートのところに座って、
六年生がトレーナーを脱いだ。わっ... トレーナーの下のTシャツ、汗びっしょり！
なんか薄くなって穴が開いてる。
あれって、白...だったのかなあ。まだらにばっちくなってるけど。
どうしてあんなの着てるのかなあ。捨てた方がいいんじゃない？ ママならすぐ捨てるよ？
あっ、ケーキ、手でつかんで食べてる！ ゴーカイ！
あっ、手についたクリームなめてる！ 泥だらけだよ？
なんかさあ、髪の毛、茶っぽくない？ チャパツ？
まさかあ！ でも、裾のとことかクルンてしてて、
パーマかけてんのかなあ。なわけないよね？
なんか...ちょっと、かっこいいかも？ でも、なんか前髪が長すぎて、顔がよくわかんないなあ。

窓にギュー〜って顔を近づけた途端、六年生が顔を上げた。
ヤバッ...！ パツと窓から離れてカーテンの陰に隠れちゃった。
へ、ヘンなヤツとか思われたかなあ。
カーテンの陰から、そ〜っと...
「ミラちゃん、宿題は？」
ドッキーン！ あわてて振り向くと吉田さん！
「さっさと宿題やってちょうだいね」
「え、あ、う、うん」
「ミラちゃんが宿題やってないと、私が奥さまに叱られるんだからね！」
もーっ、うるさいなあ。
ランドセルから宿題のプリントと筆箱出して、リビングのテーブルの上に置いた。
「あらら、ミラちゃん、自分の部屋でやらないと」
「いいの！ すぐ終わるから」
だってさ... なんか気になるんだもん、窓の外。

「いいけど、ちゃんとやってくださいよ！」

吉田さんて、ホントにうるさいよねえ。

いっつも「ミラちゃんがちゃんとやらないと、私が奥さまに叱られるんだから！」って言うんだよ。

ママは吉田さんのこと「ちっともまともに仕事できないんだから！」ってイライラして言うし。

ていうか、ママはいっつもイライラしてる。

あんまり家にいないけどね。ママは美容院をいくつも持ってるから忙しいんだって。

パパも東京に会社があって、社長だから東京にいなきゃダメなんだって。

私が三年生くらいから、ずーっと東京にいる。一ヶ月に一回くらいしか帰ってこない。

だから、パパがいないのが「ふつう」になっちゃった。

な〜んかなあって思うときもあるけど、「仕事だからしかたない」ってパパもママも言うからさ。

でもねえ、家族みんなで旅行に行ったとか友だちが言ってるの聞くといいなあって思っちゃうよ。

「ミラちゃんはしあわせですよ。こんなお金持ちの家に生まれて」って、吉田さんは言うんだよね。

そうかもだけど、やっぱりパパやママともっと一緒にいたらいいなあって思っちゃう。

「あのお、終わりましたあ」

ポーチからおじいさんの声がした。

「はいはいはい」

吉田さんがバタバタとポーチに走っていった。

吉田さんの後ろからそ〜っと覗くと、吉田さんがおじいさんに茶色の封筒を渡してた。

「こりゃどうもすみませんねえ」

おじいさんがペコペコと頭を下げた。

「ちょっとお、あのゴミ袋置いてっちゃうの？」

吉田さんは不満そうな声でおじいさんに言ってる。

「私ひとりじゃあんな大きな運べないよ」

いっつもあれくらいの運んでるじゃん！

「明日の朝、この子に捨てに来させますんで」

おじいさんは後ろに立ってる六年生を指差した。

「あ、そっ。それならいいわ」

ふうん、明日の朝、また来るんだ。

吉田さんの後ろから六年生の方を見ると、六年生も前髪の間から私の方見たから、また目が合っちゃって、あわてて吉田さんの背中に隠れちゃった。

「またよろしくお願いします」

おじいさんはペコペコ頭を下げて、吉田さんは「はいはい」なんて言ってドアを閉めた。

「ふう、やれやれ。朝から今までかかるんじゃないね、やっぱり年寄りには仕事が遅いね」

「朝から？」

「そうなのよ、奥様が出かけた後から今までかかっているんだからノンキなもんだね」

「あの六年生も朝から来てたの？」

「六年生？ ああ、あの子、六年生なの？」

「うん、ミラの学校の名札してたよ」

「へえ、ずいぶん背が高いんだねえ、中学生くらいかと思ってたよ」

「今日学校あったのに、休んだのかなあ」

「さあね」

吉田さんは興味なさそうにそう言って時計を見た。四時五十分。

「ミラちゃん、私、そろそろ帰りまからね」

「うん」

「奥様は遅くなるから先にご飯食べてなさいって。」

「冷蔵庫に入れときましたから、チンしてくださいよ」

吉田さんはそう言いながらエプロン外してバタバタと裏口から出ていった。

ホントは吉田さんの仕事は、九時から五時までなんだよね。

でも、ママがいないと五時十分前には帰っちゃう。言いつけないけどさあ。

誰もいない家の中、宿題のプリントをランドセルに入れて、明日の時間割りの教科書入れて。

あとは、テレビでも見よっかな。

テレビつけて、冷蔵庫開けて、ゲッ！ お肉とピーマン炒めたヤツだ。

お肉もピーマンもきらい。やーめた！

お茶漬け食べよっと！ ママが遅く帰るときは、いつもお茶漬けにしちゃうんだ。

だってキレイなものばっかなんだもん。

私は好き嫌いが多くって、いつもママに叱られる。お肉もお魚も野菜もきらい。

友だちみんなが好きっていうカレーライスもきらい。お肉ゴロンゴロン、

お野菜ゴロンゴロンで、すごい辛いんだもん。

お茶漬けがいちばんおいしいからいいの！

サラサラサラ〜で、ごちそうさまあ。

お風呂に入って、髪の毛乾かして、またテレビ見て、

時計を見ると、もう九時だよ？

ママ遅いなあ。この頃いつも遅いよね。

朝は私が学校行くときにはまだ寝てるから、もうずっと

ママの顔見てないよ。ファ～…ねむい。寝よっかな。

ベッドの中でトロトロトン…玄関のドアが開く音も…もう夢の中…。

帰り道

目覚ましの音で...ねむいよお... 薄目あけて時計を見ると七時。

あ〜んもう起きなきゃ... ヨッコラショって起き上がって、

フラフラって洗面所に行った。

あ、今日体育がある。やだなあ。体育きら〜い。

キッチンに行ってトースト作って、お砂糖いっぱい入れたミルクティーに浸して食べてると、窓の外でなんかが動いてる。あっ、あの六年生だ！

そっかあ、ゴミ捨てに来るって言ってたもんね。

なんていう名前なのかなあ。名札、ここからじゃ見えないよね。

昨日とおんなじかっこう。洗濯しなかったの？

泥だらけのまんまだよ？ ゴミ捨てたら着替えるのな？

あっ、こっち向いた！ さっと窓から離れて、カーテンのかけから目だけ出して外を見ると、ゴミ袋抱えて門から出ていく後ろ姿が見えた。

今日、学校で会うかなあ。

どうしよう、廊下とかで会ったら、「こんにちは」とか言った方がいいかなあ。

でも、六年生の教室は二階で五年生は三階だから、きっと会わないかもね、会ったことないし。

あっ！ もうこんな時間！ 遅刻しちゃう！

あわてて玄関で靴はいて、チラッと階段を見上げた。ママ、まだ寝てるよね。

「いってきまーす」

シーン。いつもだけどね。そっと玄関のドア閉めた。

次は体育の時間。体育館に行くから階段降りて、ちょっとだけ...

六年生の教室の方を覗いてみたりして。

あれ？ なんか... すごい静か。休み時間なのに？

いちばん階段に近い教室覗くと、誰もいない。なんで？

「ミラちゃん、なにやってんの？」

同じクラスのゆう子ちゃんが走ってきた。

「ゆう子ちゃん、六年生が誰もいないの」

「修学旅行だもん」

「えっ？」

「六年生は昨日から明日まで修学旅行じゃん」

「あっ、そっかあ！ 忘れてた」

エッ？ アレ？ それじゃ、あの六年生、なんでいるの？

「ゆう子ちゃん、修学旅行って、みんな行くよね？」

「あたりまえじゃーん。病気とかじゃなきゃ行くよ」
病気？ あの六年生、病気なのかなあ？ 元気そうだったけどなあ。
「ミラちゃん、早く行こうよ、叱られちゃうよ」
「あ、うん」
ゆう子ちゃんと一緒に急いで階段駆け下りた。

あーんもうっ！ 急がないと塾に遅れちゃうよお。
掃除当番、男子がふざけてるから先生に叱られたんだよ！
やり直しさせられちゃったじゃない！
男子が悪いのに女子までやらなきゃいけなくなっちゃってさ！
もう男子ってイヤ！ プリプリして走ってたら、
ガツッ！
「キャッ」
バタッ！ ドスン！ ザザッ！

頭、まっしろ。目をあけると地面が目の前。
顔を上げると、ランドセルから飛びだした教科書がちらばってる。
や...だあっ、転んじやった...。
なんとか起き上がると、ズッキーン！
「痛った〜いっ」
あっ、ひざの皮がベロンってめくれてるうっ！
どーしよおお、血がいっぱい出てきちゃったよお。
「ヒッ... ヒック...」
な、涙が出てきちゃったあ。やだあああ、もう、
「ヒック... い...痛いよお... ヒック」
バ、バカみたい、五年生なのに泣くなんて。でも、痛いんだも〜〜ん。
「フェ〜ン」
「あ、あの、だ、大丈夫？」
エッ？ 顔を上げると、
「あっ！」
あの六年生！
「だ、大丈夫？」
心配そうな顔で私を見てた。
「う、うん」
私と目が合うと、六年生はあわてて下向いて、
「あ...」って、散らばってた私の教科書見つけて拾い集めてくれた。

「あ、ありがとう」

「エ... あ... う、うん...」

下向いたままそう言って私の背中の中のランドセルに入れてくれた。

「た、立てる？」

「う、うん」

立ち上がろうとしたけど、あーっ、まだいっぱい血が出てるううっ。

「あ... ひ、ひざ」

六年生が私のひざをそっと触った。

「イタッ！」

「あっ、ご、ごめん」

あわてて手を引っ込めて、困った顔して、それから、

トレーナーの下からTシャツの裾を引っ張り出して、

ビリビリッ！ エッ？ ウソ！ 破いちゃった！

ポッカーンって口あけて見てる私のひざを、細長く切ったTシャツの布でクルクル巻いた。

「あ... あの、えっと、ありがとう」

「あ... う、うん」

「Tシャツ破いちゃって...お母さんに叱られない？」

「え？ あ... う、うん、あ、あの、た、立てる？」

「う、うん」

ヨイショッて、立とうとしたら、六年生が腕を引っ張ってくれた。

「あ、ありがとう」

「え... あ...」

六年生はまた困ったみたいに下向いた。

ひざを見ると、白っぽいTシャツ...だった布がジワッて赤くなっていく。

「やだああ、血が止まんないよおお」

私、また半ベソ。

「あ、あの、お、俺ん家、す、すぐそばだから」

六年生が下向いたまま、

「く、薬、ぬ、塗ってやるよ」

「え？」

ポッカーンってしてると、

「も、持って...やるよ」

六年生が私の背中からランドセルをはずした。

「あ... うん、ありがとう」

「あ、歩ける？」

「う...ん、たぶん」

「す、すぐそこ...だから」

六年生が道路の角の方を指差した。

「あ、あそこ曲がったところ...だから」

「う、うん」

ピョコタン、ピョコタンって歩いて、

「あっ」って転びそうになったら、六年生があわてて身体をささえてくれた。

「だ、大丈夫？」

「う、うん」

「つ、つかまってるよ」

そう言って右手に私のランドセル持って、左手で私の身体をグイッと抱きかかえるようにした。
なんか...さ、ちょっと恥かしいな。

六年生にピタッてくっついたままピョコタン歩いた。

下向いて、ふと六年生の足元見ると、きったな〜くて、おっきな穴のあいたズック！

穴から親指出てるよ？

なんか... なんだろ？ へんな臭い... 六年生の？

このトレーナーかなあ？ そうかも... 昨日あんなに汗かいてたもんね。着替えないのかなあ？

チラッチラッて六年生の顔見て、六年生は下向いたままで、二人で歩いた。

アカチンとビー玉

「こ、ここ」

そう言って六年生が立ち止まった。顔を上げると、
うっ...わあっ！ きっちゃん〜い板の壁に、サビサビのトタン板でツギハギしてあるうっ。
ツギハギのお家ってのはじめて見たよお。
わっ、屋根もボコボコのサビサビ！ なんか、すごいボロい！

「ちょ、ちょっと、ま、待ってて」

六年生は私から手を離すとボロボロの木の引き戸をガタガタ揺らして、
ガツン！って蹴飛ばして開けた。

「い、いいよ」

「あ、うん」

玄関の横の煤けた表札。桜...井...桜井くんかあ。
暗ら〜い玄関に入ると、すぐ横に台所...だよね、ここ。流しとガス台あるもん。

「おじゃましまーす」

「だ、誰もいねえよ」

六年生がズック脱いで上がった。足の裏、真っ黒だよ！

「じっちゃん仕事行ってっから」

私も靴を脱いで上がると、なんか足の裏がジメツとした。

「こ、こっち、座って」

六年生は奥の小さな畳の部屋に私のランドセルを置いた。
ランドセルの横に座ると、今度はお尻がジメツとした。

「あ、あの、あ、脚、出して」

六年生が箱を持ってきて私のそばに座った。

「あ、うん」

グイッてケガした方の脚を前に伸ばすと、六年生がクルクルってさっきの布を取った。
ウッ... 血だらけ...！
思わず顔そむけちゃったよお。

六年生が箱の中から茶色の瓶を出して、脱脂綿を瓶の中に突っ込んだ。わっ、真っ赤！

「それ、なあに？」

「ア、赤チン」

「アカチンってなあに？」

「ケ、ケガしたときに、ぬ、塗るやつ」

「マキロンみたいなの？」

「マ、マキロン？」

「ほら、消毒するお薬。シュッシュツて」

「わ、わかんねえ、お、俺ん家、ア、赤チンっきゃねえから」

「ふうん」

六年生は、私のひざに顔を近づけて、真っ赤になった脱脂綿をチョン。

「ヒェ〜ッ！」

「し、しみる？」

私は涙目になりながら「うんうん」ってうなずいた。

「も、もうちょっとだから」

そう言ってそ〜っと脱脂綿でひざにチョンチョン。

「あ、あと、ほ、包帯すっから」

片目を開けてひざを見ると、真っ赤！

「まだ血がついてるう」

「え、あ、こ、これは、赤チンの…」

「赤くなっちゃうの？」

「う、うん」

「一生取れない？」

「と、取れるよ」

ホッ！ 一生真っ赤なひざなんて困っちゃうもん。

六年生は、今度は箱から包帯を出して私のひざにクルクルって巻いた。

「で、できたよ」

六年生は包帯のはじっこをキュッて中に差し込んだ。

「わあ、上手！」

パチパチなんて手をたたいたら、

「イタッ」

手のひらを見ると、泥だらけで少し血が滲んでるう。

「て、手え、洗った方がいいかしんねえ」

「うん」

六年生が立ち上がって、私の腕を持ってヨイッショッて立ち上げてくれた。

「ありがとう」

「あ…う、うん」

下向いて、台所の流しに連れてってくれた。

「て、手え、だ、出して」

両手を蛇口の下に出すと、水を出して片方ずつそ〜っと洗ってくれた。

すごーい優しい！ お兄ちゃんって、こんなカンジかなあ。

でも、クラスのカナちゃん、お兄ちゃんはイジワルで大キライって言ってたけど。

この六年生はイジワルじゃないよ？って顔見ると、見上げちゃうくらい背が高い。

「すごい身長高いね」

「え、あ、う、うん」

「何センチ？」

「ひゃ、百七十」

「すごい！ 六年生の中でいちばん大きいでしょ？」

「う、うん」

六年生は下向いたままキュッと蛇口を閉めると、
窓のところに掛けてあったタオルで私の手を拭いた。

手のひらがすり傷だらけだよ。

「て、手も塗った方がいいかしねえ」

「でも、手が真っ赤になったら、顔洗ったとき、顔も真っ赤になったりしない？」

「し、しねえよ」

下向いたまま、六年生がちょっとだけクスッと笑った。

また畳にペタンと座って、手のひらに赤チン塗ってもらいながら六年生の胸の名札を見ていた。

「さくら...い... なんていうの？」

「え？」

六年生が顔あげた。目が合うとまた下向いちゃったけど。

「名前、桜井、なに君？」

「ひ、ひとし」

「ヒトシくんっていうの？」

「う、うん」

「どんな字書くの？」

「え... あ、あの、こ、こういう...」

ヒトシくんが畳の上に指で「仁」っていう字を書いてみせた。

「これってジンっても読むよね？」

うちのクラスに仁保くんっているもん。ジンボのジンってこの字だよ」

「う、うん」

「私はミラ、吉崎ミラっていうの。ミラはカタカナ」

「う...うん...知ってる...」

「え？」

「あ、あの、な、なんか、の、飲む？」

ヒトシくんが立ち上がって台所のすみの冷蔵庫を開けた。

冷蔵庫小さ〜い。うちのなんて天井まであるよ？

それでも足りないってママは言ってるけど。

「吉田さんが整理しないからよ」っていつも怒ってる。

「こ、これ」

ヒトシくんが私の前に緑のガラス瓶を差し出した。

「わあ、ラムネ！」

「う、うん」

「私、ラムネって飲んだことないの」

「マ、マジ？」

「うん、ママが百パーのジュースじゃないとダメって。一回飲んでみたかったんだあ」
ヒトシくんが渡してくれた瓶を覗くと、

「きれい...！」

中のビー玉がゆっくり動いてる。

「これ、どうやって開けるの？」

ヒトシくんが瓶を渡すと、上についてたフタを押して、ポン！ シュワワ〜ッ。

「あ、あ、あ」

ヒトシくんがあわてて手にたれてくる泡をチューッと吸ってから、私に差し出した。

「いただきまーす」

クピッて飲むと、ちょっとシュワッてして甘い！

「おいしい！」

そう言ってヒトシくんを見ると、ヒトシくんの口元も微笑んでた。

クピッて飲むたびにカラカランて中のビー玉が転がる。

「このビー玉って取れないの？」

「と、取れるよ」

「取ったことある？」

「うん、こ、こういうプラスチックのはすぐ取れんだ。

　　ガ、ガラスのは割んねえと取れねえけど、店に持ってくと5円返してくれっから」

「お金返してくれるの？」

「う、うん」

「へえ、知らなかったあ」

ヒトシくんは恥ずかしそうに下向いた。

「ヒトシくんは飲まないの？」

「い、一本っきゃ、ね、ねえんだ」

「それじゃ半分こする？」

「えっ？」

ヒトシくんはビックリしたみたいに顔あげた。

「半分こしようよ。私、半分飲むから待っててね」

瓶の半分のところに指をあてて、クピッて飲んで、あと一センチで、またクピッて飲んで、ちょうど半分！

「はい、ヒトシくんの番！」

「サ、サン...キュ」

ヒトシくんは照れたようにそう言って瓶を受け取ると、クピクピクピッていっきに飲んだ。

カラカラカラ〜ンって、空の瓶の中でビー玉が動いてる。

ヒトシくんは殻の瓶の口をキュッてひねって、中からビー玉を取り出して私に渡した。

「きれい...！」

ぼんやりした光が差し込む窓の方に向けて見ると、薄緑色に透けてみえる。

「宝石みた〜い」

「ビ、ビー玉... も、持ってねえの？」

「うん」

「お、俺のビー玉、み、見してやっか？」

「うん！ 見せて見せて！」

ヒトシくんは押し入れの戸を開けて、中から小さな箱を出してフタを開けると私の前に置いた。

「わあ！」

薄緑色のラムネのビー玉や、真ん中に赤や黄色や青い色が入ってる透明のビー玉がいっぱい！

「これ、きれい！」

中に青い色が入ってるビー玉を光に透かしてみた。

「どこで買ったの？」

「ひ、拾った」

「え？ どこで？」

「こ、公園とか、ゴミ捨て場のすみっことかに、と、ときどき落ちてんだ」

「へえ！ 今度探してみよっかなあ」

「や、やるよ」

「え？」

「す、好きなの、取っていいよ」

「いいの？」

「う、うん、俺、また拾うから」

「ホント？ うれしい！ ありがとう！」

「あ... う、うん」

ヒトシくんは照れたようにポリポリ頭を掻いた。

「どれにしよっかなあ」

青いのがきれい！ 2個あるけど、どっちがいいかなあ。

「ねえ、この青いの、どっちがいいと思う？」

ヒトシくんは2個を右手と左手に持って、窓から入ってくる光にかざした。

「どっちかが...ちょっと傷入ってんだ」

あ...れ...？ 鼻までかかった前髪の間隙から見えるヒトシくんの目... 青い？

「ヒトシくん、目が青いよ？」

「エッ」

ギョツとした顔で私を見て、すぐ下向いちゃった。

「ねえ、ちょっとこっち見て」

ヒトシくんは困ったようにもっと下向いたから、

「なんかね、青く見えたの」

そう言って私が下から覗き込むと、ヒトシくんの身体がビクッと動いた。

「あれえ？ やっぱり黒いかなあ、でもね、さっきは ホントに青く見えたの」

「こ、こっち、き、傷ついてねえ方」

ヒトシくんは右手に持ってた方のビー玉を私にくれた。

「ありがとう」

短パンのポケットからハンカチ出してビー玉を包んだ。

「大切にするね」

「う、うん」

ヒトシくんの口元がちょっとだけ微笑んだ。

「あっ！ 今、何時？」

「え... んっと」

ヒトシくんが畳のすみにあった目覚ましを見た。

「よ、四時半」

「ア————ッ！ 塾があったんだあああッ」

「え？」

「四時からなのお。ま～た吉田さんに叱られちゃうよお」

「よ、よしださん？」

「お手伝いさん、昨日いたでしょ？ ちょっと太った人」

「あ、あの人、お母さんじゃねえの？」

「やったあ、ちがうよお、お手伝いさんだよお。」

うちのママ美容院やって忙しいから、私が小さい頃からずーっとお手伝いさんがいるの」

ヒトシくんがポカンて口あけて聞いてた。

「ヒトシくんのお母さんも仕事してるの？」

「か、かあちゃん、いねえんだ」

「えっ、し、死んじゃっ...た...の？」

「し、死んでねえと思うけど、で、出てった」

「エ————ッ？ いつ？」

「わ、わかんねえ、俺が小っちえころだって」

「それじゃ、ヒトシくんとお父さんとおじいさんだけ？」

「と、とうちゃんもいねえんだ」

「お父さんも出てっちゃったの？」

「さ、最初っから、いねえんだ」

「最初って??」

「う、生まれたときから」

「どーゆーこと？」

「かあちゃん、結婚してなかったんだって、じっちゃんが言った」

「結婚しなくても子どもって生まれるの？」

「わ、わかんねえ...けど」

ヒトシくんが首をひねりながら言った。

「ふうん」

あ、それより早く帰らないと叱られちゃう！

「私、帰るね」

ランドセルしょって立ち上がると、ヒトシくんも一緒に立ち上がった。

「あ〜あ、塾やだなあ。ヒトシくんは塾行ってる？」

「う、ううん」

「いいなあ。私、バレエは好きだけど塾はきら〜い」

「バ、バレエって、バ、バレエボール？」

「ちがうよお、踊るバレエだよお」

「お、踊る...？」

「うん、火曜日と木曜日がバレエなの。水曜日が塾。

塾はママが行けっていうから行ってるけどさあ」

私はしゃべりながら玄関にいて靴を履いた。

「それじゃ、ありがとう。んっと、赤チンと包帯と、ラムネとビー玉」

そう言ってニコって笑ったら、ヒトシくんが照れたみたいに頭をポリポリ掻いた。

「それじゃ、バイバイ」って、玄関の戸、えっ、ちょっ、こ、これっ、あ、開かないっ。

ヒトシくんがサンダル履いて、戸をガツンって蹴飛ばしたら、やっと開いたよ。

「ありがとう。じゃーね」って、玄関出たけど、

「あ... どっちにいけばいいんだろ？」

「お、俺、送ってく」

ヒトシくんが私と一緒に道路に出た。

「遠い？」

「す、すぐだよ、お、俺ん家と、近いんだ」

二人で一緒に歩く道の両側には古い木造の家が並んでる。

「ここ、まっすぐいくと、み、見えるよ」

角を曲がったところで、ヒトシくんが通りを指差した。

「あっ、ホントだ！ こんなに近かったんだあ」

「うん」

「知らなかったあ、いつも表通りしか通ったことなかったもん」

「ほ、ほんとは、俺ん家の方通ると学校近いんだ」

「そうだよね、明日からそうしようっと！ ヒトシくんはいつも友だちと学校に行くの？」

「ひ、一人」

「私もなの。つまんないよねえ」

「う、うん」

「あっ！ ねえ、一緒に行かない？」

「え？」

「明日、一緒に学校行こうよ」

「マ、マジ？」

「うん！ ダメ？」

「ダ、ダメじゃ...ねえよ」

「ワーイ、そしたら明日迎えに行くね」

「う、うん」

ヒトシくんは照れくさそうに頭をボリボリ掻いた。

「えっとね、七時四十分くらいでいい？」

「あっ！」

「どうしたの？」

「お、俺、明日は学校ねえんだ」

「え？」

「み、みんな、りよ、旅行行ってっから...」

「あっ、そっか！ 六年生は修学旅行だもんね」

「う、うん」

「なんだあ、そしたら一緒に行けないね」

「う、うん... ご、ごめん」

「どうして修学旅行行かなかったの？」

「え...」

「病気になっちゃったの？」

「か、金... ね、ねえから」

「え？」

「しゅ、修学旅行... 行く...金ねえんだ」

ヒトシくんはそう言って恥ずかしそうに下向いた。

そんなことってあるの？ 修学旅行行くお金がないなんて、

お金がないから修学旅行いけないなんて、あるの？

ヒトシくんは下向いたまま歩いている。

「行きたかった？」

「え...」

「ホントは行きたかった？」

「い...行っても...」

ヒトシくんの口元が少し歪んで、

「べ、べつに、行きたくねえから」

ヒトシくんはそう言って頭をボリボリ掻いた。

前髪がちょっとだけ上がって、あっ、ウソ、なんかすごい美形っぽくない？

「キャッ！　ウフッ」

「え、あ、な、なに？」

「ヒトシくんてさ、ジャニーズ系って言われたい？」

「へ...？」

「なんか、カッコいい、ウフッ」

ヒトシくんは真っ赤になって下向いちゃった。

「前髪もっと短くすればいいのに」

ヒトシくんは前髪の間から私の方をチラッと見て、また下向いた。

「うちのクラスの山野くんなんてさ、かっこつけちゃってお兄さんのムースで前髪ツンツンにしてるの。」

「でもさあ、ぜーんぜんかっこよくないの、眉毛太っとくて下がってんだもん。こ～んなカンジ」

指で八の形にして見せたら、ヒトシくんもクスッと笑った。

なんて話してたら、あ～あ、もう家に着いちゃった。

「今日はありがとう。すごーい楽しかった」

「う、うん、お、俺も」

ヒトシくんは下向いたまま、そう言った。

「それじゃ、またね！」

「う、うん」

バイバイって手をふると、ヒトシくんも恥ずかしそうに手をふった。

ママと夕食

ミラちゃん！ どこに行ってたの？」

ドアを開けると、吉田さんがこわ～い顔して立っていた。

「塾があるってのに帰ってこないで！ 奥様に叱られますよ！」

「ごめんなさい」

「学校に電話しても、もう帰ったっていうし！」

「えっ、学校に電話したの？」

「そうですよ！ 何かあったら私のせいにされるんですから！ 奥様になんて言えばいいの
かね！」

「ママに言うの？」

「あたりまえですよ！ 塾に行かせなかったって叱られるのは私なんだから！」

「だってケガしたんだもん！ ほら！」

私はひざの包帯と手のひらを吉田さんの前に突き出した。

「あら、ほんとだ」

「男子がふざけてそうじするからやり直しさせられたんだよ。だから走って帰ってきたら転ん
だの」

「もっと気をつけてくださいよ。奥様がいなくてケガなんかしたら私が叱られるんだから」

「わかってるよお」

「それじゃ、私は帰りますからね」

「ママは遅いの？」

「今日は何も言ってなかったけどね」

吉田さんはそう言いながらさっさと裏口の方に行っちゃった。

時計を見ると、五時二分钟前。

いつもより八分遅い。

ママまだかなあ？ 七時十分。ギョルル～って、おなか鳴ってるよお。

カチャッて玄関のドアが開く音。

「おかえりなさいーい」

ママはちょっと驚いたみたいな顔して、「ただいま」って言うと、キッチンの方に入っていった
。

「ママのこと待ってたらおなかすいちゃってギョルギョル鳴ってたよ、アハハ」

ママの後ろをついて、私もキッチンに入った。

「先に食べてればいいでしょ！」

ママがちょっといらついた声で言った。

「だって今日はママ早く帰ってくるって思ったから」

「いいから六時になったらさっさと食べなさい」

「あ... うん」

ママはいらいらした様子で冷蔵庫から吉田さんが作った料理を取り出した。

「またこれなの？ あの、ほんとにレパートリーが少ないんだから！ ミラ、これ温めて」
ママが差し出したお皿を受け取ろうと手を出すと、ママが私の手をつかんで手のひらを見た。

「どうしたのよ、これ」

「転んだの」

「五年生にもなって何やってるのよ」

ママがまたイライラしたみたいに言った。

「吉田さんも何してるのかしら、ケガなんかさせて！」

「ち、ちがうの、学校の帰りに走ってて転んだの」

吉田さんのせいになっちゃうと、塾に行けなかったこと、ママに告げ口されちゃうかも...だからね。

「落ち着きがないからそうなるのよ」

「は...い」

「保健室にでも行ったの？」

「ううん、友だちがやってくれたの。すごく上手なんだよ、包帯も巻いてくれたの、ほら」
私は包帯巻いた方の脚を上げて見せた。

ママはチラッと横目を見て、テーブルの上に温めたお皿をドンと置いた。

「食べたらさっさとお風呂に入るのよ」

「うん」

ママと一緒にごはん食べるなんて久しぶり～♪

今日は話したいことい～っぱいあるしね！

「あのね、包帯巻いてくれた友だちってね」

「しゃべってないで食べなさい」

「あ... うん」

でもお... このおかず、きら～い。

白菜とニンジンとホタテとエビとイカがグチャグチャに煮てあるの。

ママがいるからお茶漬けにできないしなあ。おハシでつついて食べてるふり。

「食べないの？」

ギクッ...！

「これ、きれいなんだも～ん」

「ほんとに好き嫌い多いんだから！」

「だ～ってえ」

「何作っても食べないから困るって吉田さんが言ってたわよ。

ルーブルのケーキも食べないんですって？」

「だってルールのはお酒が入ってるからキレイって言ったじゃ〜ん」

「忙しい中買ってきたのに文句言わないで！」

「は...い...」

ママはイライラして立ち上がると、食べかけをザザッと流しに捨ててお皿を食器洗い機に入れた。

「食べ終わったら、あんたのも入れて回すのよ」

「うん」

ママは疲れたように肩をもみながら二階に上がっていった。

お茶漬けにしちゃおっと！

お風呂から上がって部屋に入った。

机の上の宝石箱をパカッと開けてみた。

ホントはママのお友だちがくれたチョコレートが入ってた缶なの。

バレリーナの絵がついてて、すごくきれいなんだあ！

ママは「そんなもの捨てなさい！」って言ったけど、こっそり持ってきちゃった。

これは私の宝物を入れる箱！

って言っても、入ってるのは幼稚園の卒園式でもらったマリア様のペンダントだけけど。

マリア様が好きなんじゃないくて、この青い色が好きなの。ほら、とってもきれいなんだもん。

この中にヒトシくんからもらったビー玉も入れよう。ウッフ、きれい...！

宝物が一個増えちゃった♪

宝石箱をパタンって閉じて電気を消した。

イジメ

七時に起きて、顔洗って、ミルクティーとトーストの朝ごはん食べて家を飛び出した。

ランドセル、カタカタいわせて裏通りを走る。

ここの角を曲がるとヒトシくんの家...だよね？

「あ... れ？」

ヒトシくんの家の前、ヒトシくんが立ってる...？

「ヒトシくん！」

手をふりながら走っていくと、ヒトシくんが顔あげた。

「どうしたの？ 今日学校行かないんだよね？」

「う、うん、あ、あの、と、通る...かなって」

「エーッ、わざわざ待っててくれたの？」

「う、うん」

ヒトシくんは照れくさそうに下向いて、ボリボリ頭を掻いた。

やっだあ、やっさしいっ！ ムフッ。

「明日は一緒に行けるよね？」

「う、うん」

ヒトシくんは照れくさそうに微笑んだ。

「私、遅刻しちゃうからもう行くね」

「う、うん」

「いってきまーす！」

「あ... い、いってらっしゃい」

「エッ？」

思わずふりむいちゃった。ヒトシくんが驚いた顔した。

「ウフッ、もっかい言って」

「えっ、な、なに？」

「いってらっしゃーいって」

「え、あ、う、うん、い、いって...らっしゃい」

「ウフフ、いってきまーす！」

ルンルン♪ いってきまーすって言って、いってらっしゃいって言ってもらうのって始めて！

...じゃないけど。塾とバレエ行くとき吉田さんがめんどくさそうに言うけどさあ。

学校行くときは、はじめてだよお。ウフフ♪

ルンルン♪スキップしながら学校に行ったら遅刻しそうになっちゃった！

帰りの会の途中、窓の外でバスが止まる音がした。

チラッと窓を覗くと校庭のまわりにバスがいっぱい！

六年生が帰ってきたんだ！

ホントはヒトシくんもあれに乗ってたはずなんだよね...なんて思いながら外を見てたら「吉崎さん、よそみしないの」って先生に叱られちゃったよ。

昨日先生に叱られたから、今日は男子もまじめにそうじした。いっつもそうしてよねっ！

そうじが終わって急いで玄関を出た。今日はバレエの日。

バレエは好きだから、寄り道しないで帰るんだあ♪

校門ぬけて角を曲がると、あれ？ なあに？ 男子たちがいっぱいいる。

みんなリュック背負ってるから六年生かな？ 何してんだろ？

「こじき！ なんで来たんだよっ！」

「おまえなんか学校来んな！ くせえんだよっ！」

な、なにやってんの？ いじめ？ や、やだな....

「くせえくせえ！ おまえいなかったからバスん中 くさくなくてサッパリしてたのによ！」

ど、どうしよう、あそこ通らないと表通りも裏通りも行けないのにい。

早くどっか行ってくれないかなあ。

「修学旅行行けなかったくせに！ みやげだけもらいに来たのかよ！ 貧乏人！ こじき！」
え？

「こじきこじき！ くっせえこじき！ 桜井じゃなくて、さ・くさいだ！ ギャハハ」
えっ、桜井？

「さ・くさい、さ・くさい~い」

ヒ、ヒトシくんだ！ な、なんで？ なんで？

「なんだその顔は！ 文句あんのか、サ・クサイ！」

一人がそう言ってヒトシくん（だよね）を蹴飛ばした。

ど、どうしよう、どうしよう、どうしよう。

「いいか、明日も学校来んなよ！」

「永久に来んな！ おまえが来るとくさくなんだよ！」

そう言いながら次々と蹴飛ばしたりなぐったりしてる。

ど、どうしよう、助けなきゃ、わ、私が？ こ、こわいよお、ヒ、ヒトシくんも何でやり返さないのお？

みんなヒトシくんより小さいじゃん、やっちゃえばいいのにい、どうしよう。あっ、そ、そうだ！

私はサササッと建物の陰に隠れた。

「せ... せ、先生っ！ 六年生がいじめてまーす！」

思いっきり大きな声で叫んでから、ピタッと建物の壁に身体をくっつけてジッとした。

バタバタバタって逃げる足音。 シーン

そっと目だけ出して覗いてみると、誰もいない。

てか、道路にしゃがみこんでるヒトシくんだけ。

ウソ、やっ...たあっ！

「ヒトシくーん！」

ヒトシくんのところに走ると、ヒトシくんはしゃがんだままビックリした顔で私を見上げた。

「ヒトシくん、大丈夫？」

「い、今の...」

「私、私！ エヘヘッ」

ヒトシくんはチラッと私を見ると立ち上がった。

「あっ、ヒトシくん、血が出てるよ？」

私はヒトシくんの切れたくちびるに指をあてた。

「痛い？」

「え... う、ううん」

ヒトシくんは下向いて手の甲でくちびるの血をぬぐった。

「いじめるなんてサイテーだよな」

ヒトシくんは泥だらけになった前髪の間からチラッと私を見て、また下向いちゃった。

「あれ？ これなんだろう？」

ヒトシくんの足元につぶれた箱が落ちていた。

「これ、ヒトシくんの？」

「え... あ... み、みやげ、せ、先生の...」

「先生がおみやげ買ってきたくれたの？」

「う、うん、そ、そんで、取りに... 来いって」

「そうなんだあ」

ヒトシくんはつぶれた箱をかかえて歩き出した。

「あ、待って、私も一緒に帰る」

私は早足でヒトシくんについていった。

服も顔も手も泥だらけになっちゃってるよ。

「こんなことするなんてひどいよね」

ヒトシくんは聞こえてないみたいに下向いたまま歩いている。

「先生に言った方がいいんじゃない？」

ヒトシくんがチラッとだけ私を見た。

「これっていじめだよ、言った方がいいよ」

ヒトシくんは下向いたまま首をふった。

「こんなにされたんだから言った方がいいよ」

「な、慣れてっから」

「えっ、前にもあるの？」

「う、うん」

「なにそれえっ？ やっぱ先生に言おうよ」

「い、言いつけっと、も、もっと、やられっから」

「ウツソーツ！ ひっどーい！」

「し、しかたねえよ」

「しかたなくないよお！ ひどいじゃーん！」

「お、俺、び、貧乏、だから」

「え？」

「く、くせえの、わ、わかってんだ、あ、あんま、風呂入れねえし、ふ、服も、き、汚ねえし」

「なんでそんなことでいじめられなきゃいけないの？」

ヒトシくんは下向いたままボリボリ頭を掻いた。

「だって、ヒトシくん、すごい優しいじゃん！

私のこと助けてくれたし、赤チン塗ってくれて、ラムネ飲ませてくれて、ビー玉くれて、今朝だって 待っててくれたしさ！ 他の男子なんてイジワルで乱暴で大っきらいだけど、ヒトシくんなら友だちになりたいって思うもん」

「えっ」

ヒトシくんが驚いた顔で私を見た。

「ホントだよ？ ていうか、もう、友だち、だよね？」

「え、あ、う、うん」

ヒトシくんはバツリバリ頭を掻いた。

ヒトシくんが頭を掻くと前髪が上にあがって顔がハッキリ見えるんだよね。

泥だらけになっちゃって、あちこち血がにじんでるけど、やっぱし、ほら、ジャニーズ系！

ムフフフッ♪なんて喜んでる間にヒトシくんの家の前。

「あ、あの、は、入る？」

「今日はバレエなのお、早く帰らないと」

「そ、そっか」

「あっ、ねえねえ、明日の朝、一緒に学校行く？」

「え？」

「明日から、ず〜っと一緒に学校行こうよ」

「う、うん」

泥と血がこびりついたヒトシくんのくちびるが嬉しそうにほころんだ。

「それじゃ明日ね！ バイバ〜イ」

ヒトシくんに手をふって家まで走った。

どうして？

朝になって、今日からヒトシくんと一緒に学校に行くんだよん♪
あっ、今日から運動会の練習が始まるからジャージ着ていかなきゃ。
やったなあ、ジャージもだけど、運動会の練習、走るのきら～い。

今年はママ来てくれるかなあ。
運動会のお知らせテーブルの上に出しといて、帰ってきたらなかったから見てるもんね。
それで何も言ってなかったから来てくれるよね。
去年はお弁当のときだけ来て帰っちゃったから、今年は見たいなあ。
運動会ってきらいだけど、給食じゃなくてお弁当だから、それだけはいいなって思うよ。
あっ、早く行かなきゃ！

角を曲がるとヒトシくんが立っていた。

「ごめんね、遅くなっちゃった」

「あ、う、うん」

「明日は、あっ、明日は土曜日だから、月曜日はもうちょっと早く来るね」

「う、うん」

ちょっとニコツとしたヒトシくんのくちびるのハジが赤黒く腫れてる。

「まだ痛い？」

ヒトシくんのくちびるを指でそっと触ると、ヒトシくんは「う、うん」って首ふった。

「おじいさんになんか言われなかった？」

「じ、じっちゃん、目え悪いから、気いつかねえんだ」

そう言ってちょっと笑うとヒトシくんの腫れたくちびるが盛り上がり、まだ痛そうだよ？

並んで歩くヒトシくん、昨日と同じ服、まだ泥がついてるよ？

昨日と...っていうか、はじめて会った日からずっと同じ服。

「貧乏だから」って言ってたけど、

でもさあ、そんなことでいじめるなんてサイテーだよな！

ヒトシくんのランドセルって、あちこち擦り切れて白っぽくなってて、

肩もとフタのところにガムテープがいっぱいついてる。

「なんでガムテープいっぱいつけてるの？」

「え？ あ、き、切れてっから、くっつけてんだ」

「そうだね、六年生だしね、新しいの買ったってしょうがないもんね、アハハ」

「え、あ、う、うん」

「でも、ランドセルってダッサイよねえ。

高学年になったら手提げでもいいってことにしてくれればいいのにね。

もう五年生なのに一年生とおんなじ格好なんて カッコ悪る～い」

「ハ...ハハハ」

ヒトシくんがはじめて声だして笑った。

「ヒトシくんの笑い声はじめて聞いたあ！」

「え、あ、」

ヒトシくんは照れくさそうに下向いた。

「だってヒトシくん、あんまりしゃべらないんだもん。私なんてヒトシくんといるとおしゃべりになっちゃう。

いっつもこんなにしゃべるわけじゃないんだよ？ホント、ホント！

吉田さんはいっつも忙しそうにしてるし、ママは私がおしゃべりするとイヤがるの。

しゃべってないで食べなさいって言われちゃう」

フツツて笑うとヒトシくんもフツツて笑った。

「ねえ、私うるさい？ おしゃべりだと思う？」

「う、ううん」

「ホント？ うるさかったら言ってね」

「う、うるさく、ねえよ、ぜ、ぜんぜん」

「よかったあ」

ニコツツて笑うとヒトシくんもニコツツて笑った。

「ヒトシくんと一緒に行くことにしてよかったあ」

「マ、マジ？」

「うん！ 楽しいもん！ ヒトシくんは？ 楽しい？」

「う、うん、た、楽しい」

ウフフツツて笑うとヒトシくんも嬉しそうに笑った。

校門を通過して玄関に入って五年生と六年生の下駄箱に別れて、階段のところでまた一緒になった

ヒトシくんの上履きにも大きな穴があいてる。かかをつぶしてペタンペタンて歩いてるよ？

「かかをつぶして歩きにくくない？」

「ち、小っちゃんだ」

「足、何センチあるの？」

「二、二十六」

「デッカーイ！ おとなみたーい！」

ヒトシくんは照れくさそうに下向いた。

二階について、ここでお別れ。

「ねえ、ヒトシくんはそうじ当番？」

「う、うん」

「私もなの！ それじゃ一緒に帰ろうよ」

「う、うん」

「下駄箱に集合ね」

「う、うん」

ヒトシくんの手をふってルンルン♪って階段上った。

エヘヘ、今日はすごく早くそうじ終わったよん♪

早くヒトシくんと帰りたいから、ふざけてる男子をギロツてにらんだら「怖えっ」って言われたけど、

ふざけてる方が悪いんじゃーん、フンっだ。

ヒトシくんはまだ終わってないかなあ。階段おりて六年生の教室が並んでる廊下を歩いた。

仁くんて何組？

あ... 廊下の突き当たりにヒトシがいた！

「ヒトシくーん！」

ヒトシくんが顔あげた、次の瞬間、バシッ！

教室から何か飛んできてヒトシくんの顔に当たった。

あっ、雑巾！

「こじき！」

教室から三人の男子が出てきて、ヒトシくんを囲んだ。

「俺たち帰るからさ、おまえ一人でやれ！」

せ、先生呼んでこようか、でも、言いつけたらまたやられるってヒトシくん言ってたよね。どうしよう。

「俺たち修学旅行で疲れてんだよ。どうせおまえは家でゴロゴロしてたんだろ」

ち、ちがうもん、おじいさんの手伝いしてたもん！

「ほら、やれよ」

一人が床に落ちてた雑巾をヒトシくんの顔に押しつけた。

や、やめてよ！

「こいつ雑巾いらねえじゃん。雑巾着てんだからさ」

「そうだよ、そのまま転がれば雑巾がけできるじゃん」

「ギャハハハ」

ひ...ひっどーい、ひどー———いっ！

「や、やめなさいよ——っ！」

六年生がみんなこっち向いた。 あ、言っちゃった。

「なんだ、おまえ」

「こいつ五年生じゃん」

「五年生がなんで六年のところにいるんだよ」

ジワジワと六年生が私の方に近寄ってくるうううっ。

こ、こ、こわいよおお。

「なにしに来たんだって聞いてんだろ！」

「え、ヒ、ヒ、ヒトシ、くんと」

「ヒトシ？ だれだよ、ああ！ サ・クサイか！」

「ギャハハ」

「おまえ、こじきになんの用だよ」

一人がジリッて私の前に来たあああ。

「お、俺！」

ヒトシくんの声でみんながヒトシくんの方を振り向いた。

「お、俺、ぜ、全部やっから、か、帰って、い、いいよ」

「ったりめーじゃん！ バーカ！」

六年生たちはサーッと私から離れて、教室からランドセルを取ると、走って階段を下りていった。

ホッ ヒトシくんの方を見ると、ヒトシくんは顔をそむけて教室に入っていた。

「ヒトシくん、私も手伝うよ」

声をかけても、ヒトシくんは背中を向けたまま教室の床をモップで拭いていた。

「ヒトシくん？」

「か、帰って...くれよ」

「いいよ、手伝うよ」

「か、帰れよ」

「一緒に帰ろうよ」

「帰れよ！」

ヒトシくんは背をむけたままイライラした声で言った。

なんで？

わけがわかんなくて、ヒトシくんがなんで怒ってるのかわかんなくて、私は教室を飛び出した。

出てきちゃったけど、このまま帰りたくない。

だってわかんないんだもん。なんであんなに怒ったの？

校門の前でヒトシくんを待っていると、あっ、来た！

「ヒトシくん」

ヒトシくんがビクッとして立ち止まった。

「あの、ねえ、一緒に帰ろうよ」

ヒトシくんは黙ったまま、また歩き出した。

「ねえ、私、何かした？」

早足でヒトシくんについて歩きながら聞いても、な～んにも言ってくれない。

「怒ってるの？」

「……」

「なにか言ってよ」

「……」

「私のこと、きらいになったの？」

ヒトシくんがやっと私の方を見た。

前髪の間隙から見える目は、暗くて、よくわかんない。

「お、俺の、そば、来ねえほうがいいよ」

「え？」

「お、俺、もう、おまえと会わねえ」

ヒトシくんはそのまま全速力で走っていった。

「えっ？」

なんで？ どうして？ ウソ、どうして――？

土曜日も日曜日も雨。

土日は吉田さんが休みで、ママはお昼頃起きてくる。

テレビ見たり、部屋でマンガ読んだり、つまんない。

でも、これがいつもなんだよね。みんな休みの日はお母さんやお父さんと出かけてるんだろうなあ。

ゆう子ちゃんはおばあちゃんの家に行くって言ってた。

カナちゃんはお兄ちゃんのサッカーの応援だって。

ヒトシくんは？ どうしてるのかなあ？

もう会えないのかなあ、せっかく友だちになったのに、家も近くだし、遊びに行ってみる？

でも、もう会わないって言われちゃったしなあ。なんでなの？

わかんない。わかんないから、月曜日、聞いてみよう。

朝迎えに行こう！ もしかしたら、もう怒ってないかもしれないじゃん？

そうかなあ、わかんない。でもさ！

月曜日の朝。いつもより早く家を出た。

ヒトシくんの家の前、ヒトシんは立ってなかった。

まだ早いから家にいるのかなあ。

玄関の戸の曇りガラス、ひびが入ってガムテープでくっつけてある。

コンコンって叩いても返事がない。

「ごめんくださーい」

「はいはい」

中から声がして、おじいさんがガッタガタって戸をあけて、ちょっと驚いた顔して私を見た。

「あのお、ヒトシくんは？」

「学校いったよ」

「え？ あ、そ、そうですか」

もう行っちゃったの？

「ヒトシの友だちかい？」

「あ、は、はい」

「そうかい」

おじいさんがニッコリ笑った。

「仲良くしてやってくれや」

「は、はい、あの、さようなら」

クルッとおじいさんに背を向けて学校に向かって走った。

友だちって言ってよかったのかなあ、もう友だちじゃないのかなあ。

ヒトシくん、先に行っちゃってた。

私、ホントにきらわれちゃったのかも。

なんだか胸の真ん中がスーシューする。

スーシューして、すごく、悲しくなった。

運動会

明日はいよいよ運動会。

昨日の総練習、百メートル走障害走もビリ。いつものことだけどね。

でも明日はちょっとがんばらないと！

ママが見にくるから、一位はぜーったいムリだけどビリにはならないようにしなきゃ！

総練習のとき、ヒトシくんのこと見かけたけど、あれからぜんぜん口きいてない。

学校もまた表通り通って行ってるし。いいや、もう。きらわれちゃったんだもん。

ママ遅いなあ。早く帰ってこないかなあ。もう十時だよ？

明日八時半からなんだから、いつもみたいに寝坊してたら間に合わないよ？

お弁当だって作らなきゃだし。

カチャッてドアが開く音。ママだ！

「おかえりなさいーい」

「まだ起きてたの？」

「う、うん、ママ、ごはんチンしよっか？」

「いいから、あんたは早く寝なさい」

「う、うん」

ママも早くごはん食べて早く寝てほしいなあ。

「いくら明日が休みだからって、こんな遅くまで起きてるんじゃないの！」

「明日休みじゃないよ、運動会じゃん」

「え？ あら、そうなの」

「ウソー！ 忘れたの？」

「しかたないでしょ！ 忙しいんだから！」

「う、うん、でも、見にきてくれるよね？」

「明日も仕事よ」

「ウッソー！」

「しかたないでしょ！」

「だってだって運動会だよお？」

「ニューヨークから大切なお客様が来るのよ！ そんなことでキャンセルできないわよ！」

「で...も、お弁当は？」

ママは横目でギロツと私をにらむとバッグから携帯を取り出した。

ピッピッピッ。どこにかけてるの？

「もしもし、吉崎です。吉田さん、明日来てくれない？」

ゲッ！ 吉田さん？ やだあ、運動会にお手伝いさんが来るなんてえ。

「ミラの運動会なのよ。お弁当がいるの。え？ ああ、そう、わかったわ」ピッ。

「まったく、肝心なときに役に立たないわね」

ホッ よかったあ。

ピッピッピッ。今度はどこ？

「もしもし、吉崎と申しますけど、支配人いらっしゃいます？」

支配人って、だれ？

「あ、もしもし、急で申し訳ないんですけど、明日の朝お弁当を一人分届けていただけます？」

えっ？ だれにたのんでるの？

「そうですわねえ」

ママが私の方を向いた。

「何時に始まるの？」

「え？ あ、は、八時半」

「それじゃ七時半くらいに、ええ、お願いします」ピッ。

ママは無表情に携帯をバッグにしまった。

「明日の朝、七時半にホテル・モンドの人がお弁当届けてくれるから、それ持っていきなさい」

「エ～ッ、ホテルのお弁当なんてやだあ」

「わがまま言わないでよ！ しかたないでしょ！ イヤなら持っていかなくたっていいわよ！」

ママが怖い顔でバンッとテーブルを叩いた。

「だいたい、あんたは何作ったって食べないんだから、誰が作ったって同じでしょ！

文句言わないでモンドのお弁当持っていきなさい！」

「は...い」

部屋に帰って、パタンとドアを閉めた。

明日... ママは来ない... お弁当は... ホテルの...

やだな... 運動会... どうせ... ビリだし...

電気消して真っ暗な部屋の中、フ～ってため息ついた。

ドーン！ 花火の音で目が覚めた。

ベッドから起きてジャージに着替えた。

洗面所に行って顔洗って、髪の毛三つ編みにして、

キッチンに行って、ミルクティーとトースト作った。

ミルクティー持っていこうかな。ポットにお砂糖いっぱい入れたミルクティーを入れた。

七時半きっかりにホテルのお弁当が届いた。

敷物どうする？ いいや、どうせ一人だもん。

教室で食べよう。お弁当とポットを手提げに突っ込んで、

「いってきま〜す」

小さな声でそう言って家を出た。

大歓声。クラス応援団のタイコの音。スピーカーから流れる音楽。スタートのピストルの音。

色とりどりの敷物がトラックのまわりに敷き詰められて校庭中が埋まってる。

お父さんたちお母さんたち、おじいさんおばあさん、小さい子どもたちもいっぱい。

競技がはじまるたびに、カメラやビデオを持ったお父さんたちがゴールのところに集まってくる

。

百メートル走が終わっても、みんななかなか席に戻ってこない。

家族のところに行って賞状とかメダル見せてるんだよ、きっと。

いいけど、べつに、ママも来てないし、どうせビリだったし。

「アッタマくる！」

カナちゃんがプンプンになって戻ってきた。

「お兄ちゃんが、ヘンな走り方って言うんだよ？ アヒルみたいって、ひどいよね！」

でも、見に来てくれたからいーじゃん。

カナちゃんのお兄ちゃん、カナちゃんが走ってたとき、大きな声で応援してくれてたじゃん。

私なんてさ、だ〜れも応援してくれる人いないんだよ。

走っても走らなくてもかわんないよ。一等でもビリでもかわんない。

誰も見てくれてないんだもん。

午前の部のいちばん最後の種目は、五年生の障害走。

六人ずつ並んで順番待っているとドキドキしてくる。

私は女子のいちばん最後の列だから、ほんとにいちばん最後ってこと。

やだなあ、待っているとどンドンドキドキしてきちゃうよお。

い、いよいよ、私の番！ ドキドキドキドキ

パーン！

スタートの合図で飛び出した。網をくぐって飛び出ると、

エッ？ い、いちばん？

思わず後ろを振り向くとみんなが網に引っかかっている。

ウ、ウソ、や、やった...なんて思いながら平均台へ。

これは得意なの！ バレエで鍛えてるもんね！

スイスイス〜イっと。

このまま走ったら、もしかしたら、もしかして、一位になるかもおおお！

ダーッシュ！

あっ、一人が追いついてきて、横に並んで、ドンッ。

「アッ！」

バタンッ！

気がつくのと、地面に這いつくばってた。

私の顔の横をみんなの足が砂ぼこり立てて走りすぎてく。

やだ、なに、こんなの、恥ずかしくて、泣きたくなくて、

どうせ、どうせ私が走っても... 走らなくなつて...

かわんない... 誰も見てない... 誰も... やだ...

もう... いや、走りたくない、走りたくない！

「ミラ！」

え...

「ミラ！ 立て！ 早く！」

だ、だれ？ 顔をあげると、トラックのすぐそばにヒトシくんがいた！

「ミラ！ 早く立て！」

え、あ、う、うん、なんだかよくわかんなくて、ヒトシくんの顔見ながらヨロヨロ立ち上がった。

「走れ！ 早く！ 走れ！」

う、うん、ヒトシくんにながづいて、走った。

もうみんな前に行っちゃって、みんなゴールしてたけど、私、走った。

トラックの横をヒトシくんも走ってた。

「ミラ！ がんばれ！ がんばれ！」

うん、うん、ヒトシくんにながづきながら走った。

「ミラ！ もう少しだぞ！ がんばれ！」、

うん、うんってうなづきながら走って、走って、ゴール！

拍手が聞こえた。校庭で見ていたみんなが拍手してた。

先生も、クラスみんなも、よそのおじさんもおばさんもみんな、私に拍手してくれた。

見ててくれてた。

私はそのまま体育館の裏まで走りつづけた。

涙が出て、このまま席に帰れないよ。

体育館の壁にもたれて声を出して泣いた。

私... 一人じゃなかった... 一人ぼっちじゃなかった...

応援してくれた... 見ててくれた... ヒトシくん...！

「ミラ」

顔をあげると、ヒトシくんが立っていた。

「ヒ...トシくん」

ヒトシくんの顔を見たら、もっともっと涙が出てきた。

「ヒトシ...くん、ヒトシくん、ヒトシくん、ウェ〜ン」

「すげえ、がんばったじゃん」

泣きじゃくる私の頭を、ヒトシくんが優しくなでた。

「ヒ、ヒトシ、くん、が、い、いた、から、ヒック」

私は泣きながらヒトシくんの体操着の裾をつかんだ。

「ヒトシくんが、立てって、走れって言ってくれたから」

私はぐしゃぐしゃになった顔をあげてヒトシくんを見た。

「ヒトシくん、ありがとう」

ヒトシくんは照れくさそうに微笑んで、自分の体操着で私の顔を拭いてくれた。

「あ、泥だらけになっちゃったよ？」

「い、いいよ、さいしょっから汚ねえから」

ヒトシくんはそう言って笑った。

「ヒトシくん、私、淋しかった」

そう言ったら、また涙が出てきちゃって、ヒトシくんがまた体操着の裾で拭いてくれた。

「もう会わないって言われて、淋しかったよ」

「ご...めん」

ヒトシくんが下を向いた。

「ホントに淋しかったの、ヒトシくんにきらわれたと思ったし、すごく、淋しかったの」

ヒトシくんが顔を上げて、前髪の隙間からまっすぐに私を見た。

「お、俺...も、す、すげえ、淋しかった」

「ほんと？」

ヒトシくんがコクンてうなづいた。

「もう会わないなんて言わない？」

「う、うん、もう、ぜってえ、言わねえ」

「ほんと？」

「うん」

私がつっこりすると、ヒトシくんもにつっこりした。

ウォーン！ サイレンが鳴った。

「昼食時間は一時までです。体育館を開放しますので...」

昼休みだ。

ヒトシくんの顔をチラッと見ると、ヒトシくんも私の顔をチラッと見た。

「そ、そんじゃ、な」

「あ、うん、ヒトシくん...は、おじいさんが来てるんだよね？」

ヒトシくんが首をふった。

「じっちゃん仕事なんだ」

「ほんと？ それじゃ、お昼は一人で食べるの？」

「うん」

「私もなの！ ママは仕事で来れなかったの」

「え、マ、マジ？」

「一緒にお弁当食べようよ！」

「う、うん」

ヒトシくんがうれしそうにニコツとした。

「お弁当持ってくるから待っててね！」

私は全速力でクラス席にお弁当を取りにいった。

お弁当

手提げを持って、さっきの体育館の裏に行くと、ヒトシくんが待っていてくれた。

「どこで食べる？ 校庭はいっぱいだし、体育館もいっぱいだよねえ」

「う、裏は？」

「え？」

ヒトシくんが連れてきてくれたのは、校舎の裏の花壇がいっぱいあるところ。

各学年の花壇には、いろいろな花が咲いている。

「わあ、お花見て食べるなんてお花見みたい！」

お花見なんてしたことないけどね。

「ヒトシくん、いい場所見つけたね」

「お、俺、運動会は、いつもここで食ってっから」

「いつも？ いつも一人なの？」

「うん」

「私もだよ？」

「マ、マジ？」

「一年生のときはパパが来たけど、あとは一人だったの。」

去年もママがお弁当届けに来ただけだったし。

なんだあ、もっと早く会ってたら、ずっと一緒に食べれたのにね」

そう言って笑ったら、ヒトシくんもニコツとした。

「どうしよう、私、敷物持ってこなかったよお」

「い、いらねえよ、ここに座れば」

ヒトシくんが校舎の入り口のコンクリートの階段を指差した。

「ヒトシくん、アッタマいい！」

ヒトシくんは照れくさそうに頭をバリバリ掻いた。

二人で階段に座って、でも...

やだなあ、お弁当出すの恥ずかしいなあ、ホテルの包み紙のなんてさあ。

「ヒトシくんのお弁当は...どんなの？」

「こ、これ」

ヒトシくんはジャージのお尻ポケットからパンを出した。

「あっ、メロンパンだ！」

「あ、うん」

「うわあ、いいなあ」

「え？」

「私、メロンパン大好きなの。ママは菓子パンなんてって、あんまり買ってくれないんだよね」

「く、食う？」

ヒトシくんがメロンパンを私に差し出した。

「でも、これ、ヒトシくんのお弁当でしょ？」

「や、やるよ」

「ホント？ わあっ！ あっ、それじゃ私のお弁当と 交換してくれる？」

「えっ？」

「あんまりおいしくないかもだけど、いい？」

「う、うん」

手提げから「ホテル・モンド」って書いてるお弁当を出すと、

ヒトシくんがビックリした顔で見てる。

な～んか恥ずかしいなあ、こんなの。

フタを開けると、レタスと玉ねぎとトマトがどっちらり入ったハンバーガー。ウエッ。

ホテル特製レッドペッパーフライドチキン。前に食べたとき、あんまり辛くて涙出ちゃったよ。

玉ねぎタ～ップリのポテトサラダ。ぜ～～ったい食べらんない！

「す、すげえ...！」

ヒトシくんが口をポカンとあけて見てた。

「悪いけど、これと交換してくれる？」

「わ、悪いって、こ、こんな、すげえ弁当、メロンパンなんかと換えて、い、いいの？」

「いいのいいの！ ぜ～んぜんいいの！ ていうか、メロンパンの方がずーっといいの！」

「マ、マジ？」

「マジマジマジ、おねがい」

「ほ、ほんとに、食って、いいの？」

「うんうんうん」

「そ、そんじゃ、あの、はい」

ヒトシくんがメロンパンをくれた。

「わーい！」

私はさっさとお弁当をヒトシくんのひざの上に置いた。

「あ、あの、ほんとに、俺、食っていいの？」

「いい、いい、いいから、おねがい」

ギュ～ッとお弁当をヒトシくんに押しつけた。

「サ、サンキュ」

ヒトシくんがチラチラ私の顔を見ながら、ハンバーガーをつかんで、パクッ。

「うっ、うっめえ！」

「え～、ほんとお？」

「こ、こんなうめえの、食ったことねえ」

そっかなあ～、でも、喜んでくれてるならいいや。

私は、メロンパンを、パクッ。

「ムフッ、おいひい」

「そ、そっか？」

「うん！ シアワセ～♪」

ヒトシくんはケチャップがついた口でにっこり笑うと、ハンバーガーをバクバク食べて、辛っら～いフライドチキンも、玉ねぎタ～ップリのポテトサラダもペロッと食べちゃった。

「うまかったあ！」

ヒトシくんは「ビックリしたあ！」って言うみたいにそう言った。

「ヒトシくんは好き嫌いないの？」

「うん」

「給食も食べられる？」

「うん」

「私、給食きら～い、な～んにも食べられないの」

「マ、マジ？」

「あ、一個だけ好きなのある！ イチゴゼリー！ ほら、たま～に出るでしょ？ あれは大好き！」

「お、俺も」

「ね、ね、おいしいよね」

「うん」

「ねえねえ、ミルクティー飲む？」

ゴソゴソ手提げからポットを出してヒトシくんに見せた。

「私が作ったの、飲んで飲んで」

カップにミルクティーを注いでヒトシくんに渡した。

ヒトシくんはチラッと私を見てから一口ゴクッて飲んだ。

「甘めえ！」

「まずい？」

「うめえ！」

ヒトシくんはそう言ってニッコリ笑った。

「ウフフ」

「あっ、そ、そこ、破れてる」

ヒトシくんが私のひざを指さした。

「あっ！」

ジャージのひざに穴があいてるうっ！

「さっき転んだからだあ、あ～あ、またママに叱られちゃうよお」

「お、俺、縫ってやるよ」

「えっ、ヒトシくん、縫えるの？」

「うん、こ、これも、自分で縫ったから」

そう言ってひざのツギを見せた。

「すごーい！ 縫って縫って！」

「か、帰りに、俺ん家で、縫ってやるよ」

「うん！ あ... 一緒に帰っちゃ... ダメ？」

ヒトシくんはチラッと私を見て照れくさそうに笑った。

「い、一緒に帰ろう」

「よかったあ！」

「あ、あの、ご、ごめんな」

「え？ なにが？」

「も、もう...会わねえとか、言って」

「ううん、いいの、だって、もう言わないって約束したもん、ネ？」

「うん」

ヒトシくんがホッとしたみたいに笑った。

ウォーンってサイレンの音。

「まもなくお昼休みが終わります」っていうお昼休み終了の校内放送が流れた。

「ヒトシくん、午後は何に出るの？」

「リレー」

「すごーい！ 学級対抗リレー？」

「うん」

「あれってクラスで早い人だけが出るんじゃーん！ 私なんて一回も出たことないもーん」

「お、俺、逃げ足速いんだ」

「え？」

「いっつもいじめられてっから、逃げんの得意なんだ」

ヒトシくんはそう言ってニヤッと笑った。

「やったあ！ ヒトシくん、おもしろーい！」

笑いながらヒトシくんの肩をペシペシたたくと、ヒトシくんも笑ってた。

「リレーの選手はスタート地点に集合してください」

「そ、そんじゃ、俺、行くよ」

「うん、がんばってね！」

ヒトシくんはニコッと笑って走っていった。

メダル

午後の部の開始のピストルが鳴って、一年生から学級対抗リレーが始まった。

小さい身体でみんな走る走る。

すご〜い、私、この一年生と競争したら負けるよお。

二年、三年、四年と終わって、五年生の部。うちのクラスは六組中五位。

あ〜あ、うちのクラスの男子って、ぜ〜んぜんたよりないんだからあ。

そして、いよいよプログラム最後の種目。

六年生の学級対抗リレー！

色とりどりのハチマキした選手がスタートラインに並んでる。

ヒトシくんはどこ？

向こうとこっちに並んでる選手たちの中、どこかなあ？

あっ、いた！ こっち側のラインのいちばん後ろ！

てことは、アンカー！ すっごーい！

アンカーって、いちばん速い人になるんだよ！ すごーい！

パーン！ 一斉にスタート！

ヒトシくんのハチマキは青だから、青ガンバレ！

あ、二番目... ま、いっか。次の走者にバトンを渡して、えっと、次の次の次がヒトシくんね。

あ、あ、あ、バトンタッチで三番目になっちゃった。

次の走者は... あっ！ あいつ、ヒトシくんをいじめてたボスみたいなヤツだよ！

エアマックスなんか履いちゃってさ！ でも、今は味方だから、ゆるすけどさ。

バトンがボスに渡された。たのむから、がんばってよ！

あっ！ バ、バカ〜ッ！ 抜かれちゃったじゃないよ！

なにさあ！ ヒトシくんのこといじめてたくせに〜っ！

四番目になっちゃったよお。

アンカーたちが次々にラインに立ち始めた。

あっ、ヒトシくんも立ち上がった。

な、なんか、ドキドキしちゃう！

あ、そ、そうだ、応援しなきゃ！

「ヒ、ヒトシくーん！ がんばってー！」

ヒトシくんが私の方を見て、ニコッと笑った。

ドッキーン！ ムフッ。

あっ、ボスが来た！

ヒトシくんが助走して、バトン受け取って、いっきに、走った！

すごい、すごい！ 速いよ？ 速っやーい！

あ、前髪が風になびいて、顔がはっきり見える。

うっわあっ、すごい美形！ かっこいいっ！

キャー——ッ！ ウッソー！ カッコイ——ッ！

なんて思ってる間にグングン差を縮めて、うそっ、抜いた！ 三番目！

またもう一人、抜いたあっ！ 二位だあっ！

あ、でも、もうすぐゴール... あ、あ、あ、ア——ッ！ ウッソー——ッ！

抜いたあっ！ 抜いたああああああっ！

「キャーキャーキャーッ！ ヒトシく——ん！」

ヒトシくんがテープを切って、 パーン！

「やったあっ！」

一位だよ——っ！

「キャーキャーキャー！ やったやったやったあっ！」

叫びまくり飛びまくり！

すごーい！ かっこいい！ ヒトシくん、かっこいい！

「かっこいいいいいいっ ウ、ウエ～ン 」

「ミ、ミラちゃん、ど、どうしたの？」

ゆう子ちゃんがビックリして私の顔を覗き込んだ。

「なんで泣いてるのお？」

「わかんないけどおお、かっこいいんだも～ん、ヒック」

「ハア？」

ヒトシく——ん、かっこいいよおおおお。ヒック。

「ミラ！」

振り向くと、ヒトシくんが後ろの方に立っていた。

「ヒトシく——ん！ おめでとう！」

急いで駆け寄ると、ヒトシくんはまだハアハアしてた。

「ヒトシくん、すごいカッコよかったよ！ 感動して涙出ちゃったよお！」

ヒトシくんは汗びっしょりの顔で照れくさそうに笑った。

前髪が汗で濡れて顔がハッキリ見える！ やっぱ美形！

あ... 目... 青... やっぱ青い、すごく深い青...だ！

ヒトシくんが首にかかってた一位のメダルを外した。

「これ、やる」

そう言って、メダルを私に差し出した。

「え？」

「ミラにやる」

「えっ？ だ、だって、これ一位のメダルだよ？」

「学級には賞状来るから。それは、俺んだから、やる」

「いいの？」

「ミラに、一位のメダルやりたかったんだ。 だから... 俺、マジでがんばった」

ヒトシくんはそう言ってチラッと私を見ると、照れくさそうに微笑んだ。

「わあ...！ ヒトシくん、ありがとう！」

ヒトシくんはバリバリ頭を掻きながら走っていった。

一位のメダル、ピカピカに光ってる！

“ミラに一位のメダルやりたかった”

私のためにがんばったなんてええええ、ウ・レ・シーツ！

「ムフフフウウ、デヘッ、デヘヘヘヘ〜」

「ミ、ミラちゃん、ど、どうしちゃったのお？」

今年の運動会はサイコーだあ————っ！

閉会式が終わって、椅子をかたづけて、下駄箱のところに行くと、ヒトシくんが待っていた。

「ヒトシく〜ん」

ヒトシくんが私の方に来ようとしたそのとき、グイッとヒトシくんの肩を誰かがつかんだ。

「こじき、一位になったからって、いい気になんなよな」

あっ、抜かれて四位になったボスだ！

ヒトシくんはチラッと私の方を見た。

ど、どうすればいい？ そばにいない方がいい？

「あ、五年のミラじゃん」

ボスがヒトシくんをドンと押しつけて私の前に来た。

な、な、なによ、こ、こわい...

「おまえ、超かっこ悪るっ！ すっ転んでやんの！ ドンケツじゃん、ドンケツドンケツ〜」

カーッと顔が真っ赤になった。

くやしくて、恥ずかしくて、泣きそうで、くちびるをギュッと噛んだ。

「鈴木！」

ヒトシくんが、グイッと、私を背中で隠すように、あいつと私の間に入った。

「おまえ、あんな遅せえやつに抜かれんなよな。」

おまえが抜かれっから、俺、たいへんだったんだぞ」

「なっ、なっ、なっ」

ボスがサルみたいに真っ赤な顔になった。

「ミラ、行こ」

ヒトシくんが私の手をつかんで玄関を飛び出した。

「こ、こじき〜っ！ お、おぼえてろよーっ！」

ボスの声が後ろから聞こえたけど、ヒトシくんは振り向きもしないで、私の手をにぎったまま全速力で走った。

「ま、ま、待って、は、速すぎるよおお」

足が宙に浮きそうだよおおお。

「あ、ご、ごめん」

「ヒ、ヒトシくん、は、速いんだから、ハァハァ、私、ついていけないよ、ゼーゼー」

「そんなじゃ、おぶってやるよ」

「えっ？ あっ？」という間に、ヒトシくんはヒョイト私をおんぶして、全速力で走り始めた。

「わ、あ、あ、あ」

「ちゃんとつかまってるよ」

「う、うん」

ギュウッてヒトシくんの首に腕をまわした。

ペタッて背中に顔をくっつけると、汗のにおい、私のためにがんばって走ってくれた汗のにおいだ。

ヒトシくんは、ビックリして見てるみんなの間をすり抜けて超スピードで走りつづけた。

ツギ

ヒトシくんが、戸をガタガタッと引っ張って、それからガツンと蹴飛ばして開けた。
ヒトシくんの家に入るの二回目。

この前よりは少し日が入ってきている部屋の中。
壁も天井が汚れてあちこち剥がれてるの見てたら、

「ジャージ脱げよ」

ヒトシくんが押し入れから箱を出してきた。

「うん」

下に短パン履いてるから、スルッて脱ぐと、あっ、

「やだあ、ひざ、擦りむいちゃってるう」

ヒトシくんがかがんで私のひざを見た。

「あ、ほんとだ」

そう言うと、また押し入れから箱を出してきた。

「赤チン塗ってやるよ」

「あっ、ねえ、ハートにしてくれる？」

「え？」

「赤いハート！ 可愛いでしょ？ だからハートにしてね」

「う、うん」

ヒトシくんは真剣な顔で、ゆ〜っくりと赤チンの綿でハートを描いた。

「クフッ、くすぐった〜い」

「も、も少しだから... い、いいよ」

ひざの上に左まがりの赤いハート！

「カッフユーイ！」

「ま、曲がっちまったけど」

「ううん、可愛い！ ありがとう！」

赤チンをしまおうと、ヒトシくんは今度は針と黒い糸を取り出した。

「黒？ ジャージは青だよ？」

「黒と白っきゃねえんだ」

「ふうん」

ヒトシくんは真剣な顔して針にスッと糸を通して、クルッと玉結びを作った。

「すごーい」

パチパチパチなんて拍手したら、ヒトシくんは照れくさそうに下向いて私のジャージを縫い始めた。

「ヒトシくん、家庭科、5？」

「うん」

「いいなあ、私は3。体育も3。ヒトシくんは 体育もぜったい5でしょ？」

「うん」

「すごーい！ いいなあ、私なんて一個も5がないの。ぜ～んぶ4！」

「す、すげえ」

ヒトシくんが顔を上げた。

「すごくないよお、何一つとってもいちばんってものがないって、いつもママに叱られるんだよ？」

「バレエだって幼稚園からやってるけど、コンクールもいつも予選落ちだしさあ」

「コ、コンクール？」

「うん、バレエのコンクール、今年の春は眠りの森をやったけど落ちちゃった。

先生は、ミラちゃんはバレエ向きなのよって言うんだけどさあ。

ヒトシくん、バレエ見たことある？」

「ね、ねえ」

「私が踊るの见たい？」

「う、うん」

「それじゃ秋に発表会があるから见に来てよ！」

「う、うん」

「ヒトシくんが見に来るならがんばっちゃお」

おしゃべりしてても、ヒトシくんはスイスイって穴をかがって、あっというまに縫っちゃった！

「すごーい、きれいに縫ってあるう！ ありがとう」

短パンの上からスルッと履いた。

「うちのママなんて穴があいたらすぐ捨てちゃうんだよ。

忙しくて縫ってるヒマないんだって、縫うくらいなら買った方が早いわよって言うの」

「す、すげえ」

「でもさあ、ほら、よくひざのところにアップリケしてる子いるでしょ？」

幼稚園のときとか、いいなあって思ったの。

そう言うとみんな、ミラちゃんってヘンって笑うんだけど、

好きな服も穴があいたらすぐ捨てられちゃうんだもん、悲しくなっちゃうよ」

「お、俺、縫ってやるよ」

「ほんと？」

「うん」

「うれしい！」

ニコッと笑うと、ヒトシくんもニコッと笑った。

「あ、ねえ、これ」

ポケットからヒトシくんのメダルを出した。

「ありがとう」

ヒトシくんは照れたように微笑んだ。

「ヒトシくん、どんどん抜いて一番になるんだもん、すごいかっこよかったよ」

ヒトシくんは下向いてポリポリ頭を掻いた。

「あのヒトシくんの前のあいつ、いつもヒトシくんいじめてるやつ」

「鈴木？」

「えっらそうにしてるくせにさあ、抜かれちゃってカッコ悪るうい！ アハハ！」

「ア...ハハ」

「でも、またいじめられないかなあ」

「な、なんともねえよ」

「だ～ってさあ、な～んかまたいじめてきそう」

「いいんだ、慣れてっから」

「でも、またヒトシくんと会えなくなったらやだなあ」

ヒトシくんがチラッと私を見た。

「もう... んなこと言わねえ」

「なんで会わないって言ったの？ 私と会うといじめられるの？」

「ち、ちがう、お、俺といると、ミラが...」

「私？」

「きっとミラもいじめられっから...って、思って... クラスでも... そうなんだ、俺と口きくと、いじめられっから、みんな、口きいてくんねえし」

「ひど～い」

「い、いいんだ、慣れてっから」

ヒトシくんはそう言ってちょっと淋しそうに笑った。

「私はいじめられたって平気！ いじめられたってヒトシくんと口きくからね！」

「ミラがいじめられそうになったら、俺、助ける」

ヒトシくんがチラッと私を見た。

「お、思ったんだ、俺、ミラと、会えなくなるよか、あいつらにいじめられた方がマシだって、だから、もし、ミラがいじめられたら、俺が助ければいいんだって、俺は慣れてっから、あいつらに何されてもなんともねえからさ」

「ヒトシく～ん、かっこいいいいいいっ！」

「え、あ、んな」

「私たち、ず～っと友だちでいようね」

「う、うん」

「一生ね！」

「うん」

「指きりしよ！」

私が小指を出すと、ヒトシくんも照れくさそうに小指を出した。

「指きりげんまん、ウソついたら...ハリセンボンって、針を千本飲むってこと？」

「さ、さあ」

「そんなことできないよねえ？」

「う、うん」

「ま、いいや、ぜったいないから！ 針千本飲～ます！ 指切った！」

ウフツて笑うとヒトシくんもニコツと笑った。

なんか、すごー——いシアワセ♪

曜日の朝が来て、七時四十分に家を飛び出した。

今日からまたヒトシくんと一緒に学校行ける！

ルンル〜ン♪ってヒトシくんの家に走ると、ヒトシくんは、もう家の前で待っていてくれた。

「ヒトシく〜ん、おはよう」

手をふると私の方を見てニッコリ笑った。

「月曜日になるのが待ち遠しかったよお、早くヒトシくんと会いたかったんだもん」

「う、うん... お、俺も」

ヒトシくんが照れくさそうに頭を掻くと、前髪が少し上がってヒトシくんの目がチラッと見えた。

青い...やっぱり青いよ？

「ヒトシくんの目、青いの？」

「えっ」

ヒトシくんがギクツとした顔して、すぐに下向いた。

「青いよね？ 運動会のときもそう思ったもん、どうして青いの？」

ヒトシくんは黙って下向いたまま。

なんか悪いこと言っちゃったのかなあ。

「あ、あの、い、行こ」

ヒトシくんが下向いたまま言った。

「あ、うん」

なんかわかんないけど、いいや！

せっかく仲直りできたんだもん！

ゆ〜っくりゆ〜っくり歩いたのに、もう着いちゃった。

「ヒトシくん、今週はそうじ当番？」

「ううん」

「私もちがうから、一緒に帰れるね」

ヒトシくんが照れくさそうに微笑んだ。

「それじゃゲタ箱のところでね！」

ヒトシくんとバイバイして階段かけ上がった。

ルンル〜ン♪って教室に入ると、後ろからゆう子ちゃんとカナちゃんも入ってきた。

「ミラちゃん、さっき六年生と一緒にあったよね？」

「うん」

「やっぱり？ 私たち後ろにいたんだよ、ねえ？」

カナちゃんがそう言ってゆう子ちゃんの顔を見た。

「あの六年生って、リレーで一等になって、ミラちゃんにメダルくれた子でしょ？」

「そうだよ？」

「ミラちゃん、あの子のこと知ってるの？」

「うん！ 友だち！」

「ウッソーーーーッ」

カナちゃんとゆう子ちゃんが声をそろえて驚いた。

「なんで？」

「だ～ってさあ、あの六年生って、ねえ？」

カナちゃんがゆう子ちゃんと顔を見合わせた。

「うん、あの六年生は... ねえ」

今度はゆう子ちゃんがそう言って私の顔を見た。

「なに？ どしたの？」

「あのね」

カナちゃんが身を乗り出してヒソヒソ声で言った。

「あの六年生って、六年の中でハジキなんだよ」

「ハジキって、なあに？」

「仲間はずれ、だ～れも口聞かないんだって」

「な、なんで、カナちゃんがそんなこと知ってるの？」

「だ～って、ねえ？ 有名だよ、ねえ？」

カナちゃんはそう言ってゆう子ちゃんと顔を見合わせる。

「それにね、あの六年生ってさあ、いつもすっごい汚いかっこうで、そばにいくとクッサイ
んだって」

「ミラちゃん、くさくなかった？」

「く、くさくないよ！」

「ミラちゃん、鼻悪いんじゃないのお？」

「そ、そんなことないよ！」

「それにさあ」

カナちゃんが私とゆう子ちゃんの首に手を回して小さな円を作った。

「あの六年生、アイノコのシセイジなんだよ」

「なにそれ？」

「半分外人！」

「エッ？」

「だから髪の毛、茶っぼいでしょ？」

「そ、そうなの？」

「そうだよ、目だって青くて気持ち悪って、みんな言ってるよ」

だから目が青かったんだ...でも...気持ち悪くなかったよ？

すごいきれいな目で...

「それにね、お父さんいないんだって、あの子のお母さんがキャバクラで外人と知り合ったんだって」

「キャバクラって？」

ゆう子ちゃんがカナちゃんに聞いた。

「男の人がお酒飲んで女の人にエッチするところ」

「ゲーッ！ キモチ悪るううい！」

ゆう子ちゃんがそう言って口を押さえた。

「だ、だれがそんなこと言ったの？」

「み～んな知ってるよ、この近所じゃ有名だったんだってえ、うちのお母さんが言ってたもん」

「ミラちゃん、やめた方がいいよ」

「そ、そんなの、関係ないよ！」

「あんなのとつき合ったらミラちゃんもハジキにされちゃうよ、

あの六年生と口きくだけで六年の男子にいじめられちゃうんだってよ」

「い、いいよ、そんなの、バカみたい！」

「ミラちゃん、もう目つけられてるんだよ」

「え？」

「だって、ほら、運動会の帰りに、あの六年生におんぶされて帰ったでしょ？

あれって、みんな見てたんだよ、六年の男子たちなんてゲタ箱んところで、

すごい怒っててさあ、あいつと口聞いたらパンチだぞ！って言ってたもん」

「え、う、うそ...」

「ほんとほんと、すごいこわかったよお」

ど...どうしよう... ヒトシくんはへいきだって言ってたけど... やっぱり、怒ってたんだ...

カラーンコローンって、始業のベルが鳴った。

「それじゃね、ぜったいやめなよね」

「うんうん、ぜったいやめた方がいいよ」

カナちゃんとゆう子ちゃんはそう言いながら自分の席に走っていった。

なんでよ... みんな、ヒトシくんのこと... なんで、そんなふうにするの...

ひどいよ... ヒトシくんは、すごい優しく、すごいカッコいいのに...

私は... やめない、ぜったいに友だちやめないもん！

授業が終わって教室を飛び出した。ヒトシくんと待ち合わせしてるんだも〜ん。

私はカナちゃんたちが言ったことなんか気にしないも〜んだ。

「ミラ」

階段下りると、二階の踊り場でヒトシくんが待っていた。

「あ、ヒトシくん」

急いで階段駆け下りた。

「ウフフ、待っててくれたの？」

「あ、うん、あ、あの、俺、一緒に帰れねえんだ」

「え？ どうして？」

「い、居残り…」

「えっ？」

「さ、算数… 0点…だったから」

ヒトシくんは恥ずかしそうに下向いた。

「そっかあ」

「ご、ごめん」

「いいよいいよ、それじゃ、また明日ね」

ヒトシくんはコクンてうなずくと、頭を掻きながら教室に戻っていった。

なんだあ、つまんないのお、しかたないけど。

校門を出て表通りの方に曲がろうとすると、ゲッ！

六年のあいつらだ！ や、やだな、なんか言われそう。

クルッて裏通りの方に向きを変えてスタスタスタ。

「おい！」

ギクッ！ スタスタスタって、もっと早足で歩いたのに、あっという間に追いつかれた。

な、な、なに…？

「おまえ、コジキと仲いいじゃんよ」

む、無視して、さっさと帰ろ…っと。

「おい、聞こえねえのかよ！」

鈴木ってボスがグイッと前に回ってきた。

「コジキと仲いいやつはそいつもコジキなんだぞ」

バッカじゃない！って言いたかった…けど…

「アハハ、そうだそうだ！ コジキ女だあ」

「コジキ女あ！」

ムカムカきて、カーッて顔が熱くなって、でも、ちょっと怖くなって、パーッと走って逃げた。

家の中に駆け込んで、ボタンってドアを閉めたら、ちょっとホッとした。

もう、やだあ、なによお、あいつら、アッタマくる！

ドスドススってリビングに入ると、吉田さんがキッチンから顔だけ覗かせた。

「あら、おかえんなさい」

「おやつ、なあに？」

「ルースのケーキですよ」

「またあ？ いらない！」

「またそんなこと言って！」

「きれいだって言ったじゃん！」

「何怒ってるんですよ、奥様が買ってきたってのに」

「ルースのはきれいだっていつも言ってるじゃん」

「そんなこと私に言われたって知りませんよ」

「いいよ、もう！」

私はイライラしながら棚から紅茶を出して、いつものミルクティーを作った。

「そうそう、これ、買ったときからね」

吉田さんがそう言って、包みを差し出した。

「なにこれ？」

「ジャージのズボンですよ、ひざのところが切れてたから」

吉田さんがそう言って見せたのは、ヒトシくんがツギしてくれたジャージ。

「奥様に見せたら買ってくるように言われたんですよ、だから、こっちはもう捨てますからね」

吉田さんがヒトシくんがツギしてくれたズボンをゴミ箱に捨てようとした。

「捨てちゃダメ！」

あわてて吉田さんの手から奪い取ると、吉田さんがビックリしたような怒ったような顔して見た

。

「友だちがツギしてくれたんだから！」

「そんなこと私に言ったって、奥様が捨てろって言ったんだから！」

「捨てないで！ ぜったい捨てないでよ！」

吉田さんがムッとした顔で私を見た。

「私は知りませんからね！」

そう言うとプイッと洗濯室に入ってしまった。

ヒトシくんがツギしてくれたんだから、ぜったい捨てないんだから、これだけはぜったい...！

ジャージのズボンをギュッと抱えて部屋に入った。

大切なのに...どうしてすぐ捨てろって言うの...大切な友だちなのに...

カナちゃんやゆう子ちゃん...あんなこと言うの...みんな知ってるよって...

みんな...みんな、ヒトシくんのこと、あんなふうに言ってるのかなあ。

“あんなのとつき合っているとミラちゃんもハジキにそれちゃうよ”

そんなことないよ、そんなこと...

“コジキと仲いいやつもコジキなんだぞ”

“コジキ女！”

か、関係ないよ、だって、私、五年生だもん。

それに... そうだよ、バカみたい、そんなこと、気にするなんて...

次の日の朝、ヒトシくんの家に走っていくと、いつもどおりヒトシくんが立って待っていてくれた。

「き、昨日、ごめん、あの、一緒に帰れなくて」

「うん、あのね、昨日の帰りにね...」

昨日の帰り道、六年生にイジワルされたこと...

ヒトシくんと言ったら、またヒトシくん気にして私と会わないって言うかも...

「き、昨日、どうしたの？」

「う、ううん、なんでもない、あ、ねえねえ、見て」

私は脚をグイッと上げてみせた。

「これ、ヒトシくんが縫ってくれたジャージだよ」

ヒトシくんが照れくさそうに頭を搔くと、前髪が少しだけ上がって、深い青い目が見えた。

“アイノコのシセイジなんだよ”

“あんなのとつき合っているとミラちゃんもハジキ...”

バ、バカみたい、そんなこと！

「私はヒトシくんのこと好きだからね！」

「えっ？」

ヒトシくんがビックリした顔して、それから真っ赤な顔になって、

「う、うん、俺も」って言って微笑んだ。

教室に入ると、ゆう子ちゃんとカナちゃんはもう来てて、二人で何かしゃべってた。

「ゆう子ちゃん、カナちゃん、おはよう」

二人がチラッと私を見てから顔を見合わせた。

「何話してたの？」

二人のそばに行くと、カナちゃんが私を横目でギロツて見て、それからツーンって横向いた。

「カ、カナちゃん、どうしたの？」

「私たち、もうミラちゃんと口聞かな〜い！ ねえ、ゆう子ちゃん」

「う、うん」

「な、なんで？」

「ミラちゃんのせいで私たち昨日、六年生にいじめられたんだからね！」

「えっ？」

「ミラちゃんと口聞いたらパンチだからなって言われたんだよ、私たちな〜んにも関係ないのに！」

「ウ、ウソ…」

「ミラちゃんのせいだからね！」

「エッ？」

「あんなやつと仲よくするから、私たちまでひどい目にあったんだからね！」

反省してよね！ もう絶交！ ゆう子ちゃん、行こっ」

カナちゃんはツンとしてゆう子ちゃんの腕を引っ張った。

「う、うん」

ゆう子ちゃんはチラッと私を見て、カナちゃんに腕を引っ張られたまま二人で行っちゃった。

どうして？ どうして私と口きいたらダメなの？

なんでゆう子ちゃんやカナちゃんまでいじめられるの？

私、何もしてないよ？ どうして絶交なの？

中休みも昼休みも、カナちゃんたちは私と口もきいてくれなかった。

いつもは三人で校庭で遊ぶのに、私、ポツーンと教室の中に残された。

教室の中にはゲームやって遊んでる男子が何人かいるだけ。

ガラッて戸が開いて、ドッチボールしてた男子が戻ってきた。

「おーい、すげえこと聞いたぞ」

そう言って、ボール持ったままゲームやってた男子たちのそばに走っていった。

「吉崎ってさ、六年のコジキとつき合ってたってさ！」

えっ？

「ゲーッ！ マジ〜ッ？」

「だよな、吉崎」

「ヒ、ヒトシくんはコジキじゃないわよ！」

「ヒトシく〜んだってさ、コジキとラブラブじゃ〜ん」

「コジキじゃないったら！」

「あいつ、六年の仲じゃハジキなんだぜ？ くっさくてきったねえコジキだもんな！」

「ちがうもん！」

「あっ、見ろよ、吉崎のひざんところ、ツギしてあんぞ」

あっ…。

「ホントだ！ 貧乏くせえ！」

「コジキみてえ！ 吉崎もコジキだ！ アハハハ」

ひざのそこ... ギュッて手で押さえて...

「きったねえ！ くせえくせえ！」

「吉崎、くっせえ！ 吉崎、コジキ〜！」

悔しくて... 泣きそうで... くちびる噛んで...

ガラッと戸が開いてカナちゃんたちが入ってきた。

私のこと、チラッと見ると、またフンて顔をそむけた。

「今井、吉崎はコジキだぞ、そばに寄るとコジキ菌うつるぞ」

「寄らな〜い、私とゆう子ちゃん、ミラちゃんのせいで六年生にいじめられたんだから！」

「ひっでえなあ、吉崎、あやまれよ」

「そうだそうだ、あやまれ！」

涙が出てきて、止まらなくなっちゃって...

「わーい、吉崎泣いたあ、コジキが泣いたあ」

ひどい...みんな...ひどい...

教室飛び出して、トイレに駆け込んで、バタンてドア閉めてワンワン泣いた。

なんで、なんでこんなことされなきゃならないの？ 私が何したの？

なんでヒトシくんと仲よくしちゃいけないの？

なんでヒトシくんと仲よくするとコジキなの？

ヒトシくんと仲よくすると、ずっとこんなことされちゃうの...？

教室にいる時間...すごく長かった。早く終わってほしかった。

帰りの会が終わって、いちばん先に教室を飛び出した。

ヒトシくん...きっと玄関で待ってるんだよね....。

ゲタ箱のところには、まだヒトシくんはいなかった。

どうしよう...待ってた方がいいよね...でも...

「ミラ」

声の方に振り向くとヒトシくんが階段駆け下りてきた。

ヒトシくんの顔見たら、なんかちょっとホッとして、ヒトシくんに言いたくて、

全部、今日のこと、全部、ヒトシくんに言って、泣きたくなった。

「あ、あのね」

そのとき、ヒトシくんの後ろの方からカナちゃんとゆう子ちゃんがこっち見てた。

「あ、あの、わ、私、今日、バレエが、あって、だから、い、急いで帰らないと、だから、ご、ごめんね」

そう言って駆け出しちゃった。

だって、ヒトシくんと一緒にいるとこ見られたら、一緒に帰ったら、またいじめられる、
だって、すごく怖くて、だから、ごめんね、ヒトシくん、ごめんね、でも、怖いので、
すごく、すごく悲しくて... 泣きながら家まで走った。

家に帰って、ヒトシくんにつきしてもらったジャージを捨てた。

ごめんね...でもね...これ履いてるといじめられるの...怖い...すごく...だから...ごめんね....

ゴミ箱の前で、ずっとずっと泣いてた。

次の日の朝、いつもの時間に家を出た。

だけど、表通りの方から、一人で学校に行った。

大切なもの

あれから一週間、私はずっと表通りを歩いて学校に行ってる。

全校朝会するときとか廊下でたまにヒトシくんを見かけるけど、ヒトシくんがこっちを見ると、私、パッと顔をそむけちゃう。だって、カナちゃんとゆう子ちゃんはいきいきしてくれないし、クラスの男子はコジキってからかうし、もうイヤなの。

それに...それに、なんだか、ヒトシくんの顔が見れない。ヒトシくんが悪いことしてるみたいで...ううん...悪いことしたから...。あんなに優しくしてもらったのに、あんなに一緒にいるのが楽しかったのに、全部私がメチャメチャにしちゃったみたいな気がする。

私...裏切ったんだ、ヒトシくんのこと。いじめられても平気って言って、平気じゃなかった。他のみんなみたいにヒトシくんと口きかないで、他のみんなと同じことしてるから...もう...ヒトシくんと会えないよ、ヒトシくんのこと好きなのに、ヒトシくんのこといじめてる子たちと同じことしてるんだもん...会えないよ...もう...。きっとヒトシくんも怒ってる。あんなこと言ってたくせに、いじめられてもヒトシくんのそばにいるって言ってたくせに、ヒトシくんが好きって言ってたくせに、みんなと同じじゃないかって。きっと、もう...私のことキライになってるよね...。すごく悲しくて、すごく苦しくて、学校に来たくないよ。

帰りの会が終わって、一人で階段下りて、一人でゲタ箱行って靴はいて、一人で校門を出た。

表通りと裏通りの分かれ道、こっち行くとヒトシくんの家なんだよねって思いながら、表通りの方に行こうとしたとき、

「おい、コジキ女！」

後ろから声がして、怖くて振り向けない。

「コジキ女、コジキと一緒にじゃないのかよ」

ボスの鈴木と他の六年が私を取り囲んだ。

「ど... どいて」

「なまいきじゃんよ、コジキ女のくせに！」

「お...おねがい...通して...」

「通してくださいだろっ」

「と...通して...くだ...さい」

「やーだね！　ブアッハハハ」

「行きたいんなら行ってみろよ」

鈴木が私のランドセルをつかんだ。

「や、やめて、離して」

「おらおら、行ってみろっつってんじゃん」

「は、離してよおっ」

やだ...だれか...たすけて...こわいよ...

「やめろ！」

誰かが私と鈴木の間に走りこんできた。

背中...汚れたトレーナー...ヒトシ...くん？

「なんだよ、コジキ！　うっせえんだよ！」

鈴木がドンとヒトシくんを押した。

「やめろっつってんだろ！」

ヒトシくんはまた私と鈴木の間に入ってきた。

「コジキがコジキ女助けに来たのかよ」

「コジキの夫婦！　くせえぞ！　あっちいけ！」

ヒトシくんが、私のランドセルをつかんでた鈴木の手をグイッと引きはがした。

「イデッ！　なんだテメエ！」

鈴木がヒトシくんに殴りかかって、他の男子もみんなヒトシくんにかかっていった。

「や、やめて、やめてよ」

「ミラ、逃げろ！」

ヒトシくんは殴られながら私に言った。

「で、でも...」

「いいから逃げろ！」

「で、でも...」

足がプルプル震えて、逃げられないよお。

「早く！　逃げろ！」

「う、うん」

後ずさりしたその瞬間、後ろからグイッと引っ張られてそのまま倒れてしまった。

「逃げたら承知しねえぞ！」

鈴木が怖い顔で私の上からゲンコツを振り下ろした。

「キャッ」

思わず目を閉じると、何かが私の上に覆い被さった。

な、な、なに？

「コジキ！ どけ！」

こわごわ目を開けると、ヒトシくんが私をかばうように上に乗っていた。

「どけっつってんだろっ！」

「コジキ！ どけよ！」

鈴木や他の男子たちがヒトシくんを蹴ったり引っ張ったりして、ビリッとかドスッて音がする。

「どかないとどうなるかわかってんのかよっ！」

「コジキ！ クズ！ どけ！」

「ど、どかねえ！ ぜってえ、どかねえ！」

ヒトシくんは私を守るように抱きかかえながら怒鳴った。

「いい気になんなよーっ！」

みんながヒトシくんの背中や頭を殴ったり蹴ったりして、

ヒトシくんはそのたび私に当たらないように、腕や体で必死に避けて、

私は怖くて、死ぬほど怖くて、

「こわい...もう...イヤ...こわいよお...」

ヒトシくんの腕の中で泣き出した。

「ミラ、大丈夫だよ、ミラ」

ヒトシくんが私の耳元でささやいた。

「どけっ・つってんだ・ろっ！」

誰かが後ろからグイッてヒトシくんを引っ張って、ベリッて音が聞こえて、

それでもヒトシくんは私から離れなかった。

「よーしっ、これでもかよっ！」

ザザッ、カターンって何かを蹴ったような音がして、

ガツッ！ 鈍い音が頭の近くで聞こえてビクツとした。

「ウッ...」

ヒトシくんが低く呻いて、な、なに、ど、どうしたの？

「あっ、ヤ、ヤベ、鈴木、こいつ、血い出てるぞ」

「あっ、お、おい、行くぞ」

ザザザザッて走ってく音がして、急に静かになった。

な、なに、どうしたの？

ヒトシくんが少しだけ顔を上げてあたりを見た。

「いねえや」

私はまだ身体が震えて、涙が止まらなくて...

「ミラ、もう大丈夫だよ」

ヒトシくんが身体を起こして私の手を引っ張ってくれた。

ホッとして、ガク～ッて力が抜けて、そのままヒトシくんの腕の中に寄りかかると、ヒトシくんが頭をなでてくれた。なんか、もっとホッとして、もっと力が抜けちゃって...

「ミラ、痛てえとこねえ？」

ううんって、ヒトシくんに抱っこされながら首ふった。

「立てるか？」

「う...うん」

ヒトシくんに手を引っ張ってもらって立ち上がると、

「あっ！」

ヒトシくんのおでこ...！

「ヒ、ヒトシくん、血、血が、血が出てる！」

「え？」

ヒトシくんがおでこに手を当てると、ベツトリ手に血がついた。

「たいしたことねえよ」

そう言って笑うヒトシくんのおでこの血は筋になって、鼻の方まで流れ落ちてきてる。

「ミラは？ どっかケガしてねえか？」

心配そうに私の顔を覗き込むヒトシくんの顔も泥だらけで、

口元も切れて血が出てて、顔中アザだらけになってて、

トレーナーも泥だらけで、袖のつけ根や襟のところやあちこちボロボロに破れてて、

こ、こんな、こんなのって、ひどい...

「ミラ、歩けるか？」

なのに、ヒトシくんは私の心配ばっかしてて...

私の服についた泥をパンパンで払ってくれて...

「ランドセル持ってやるよ」

そう言って私の背中からランドセル外して...

地面に落ちてる自分のランドセルも... あっ！

ヒトシくんのランドセル、ベルトがちぎれて、

まわりにグシャグシャにされた教科書やノートが散らばって、

「うそ...なんで...こんな...」

筆箱は踏まれて中の鉛筆が全部折れてて...

「な...なんで...なんでこんなことするの...」

涙が出てきて... 悲しくて... 悔しくて...

「ひ、ひどいよ、ヒトシくんが何したのよ、こんな、ひどいよ、ヒック、ウツ...ウウウ...
ウワーッ」

私は地面にペタンって座り込んで大声で泣いた。

「ミ、ミラ、大丈夫だから、泣くなよ」

ヒトシくんがそう言って私の肩を抱いてくれると、私はもっともっと悲しくなって泣いた。

「ヒ...ヒトシ...くん...ご...ごめん...ね...ごめんね...」

「ミラがやったんじゃないだろ」

「ち...ちが...ちがう...わ...私...ヒ...ヒトシくんに...ひどい...ひどいこと...して...

口きかなくて...迎えにも...私...いじめられるの...こわくて...ごめんね...

ごめんね...ヒトシくん...ごめんね...ごめ...ヒック」

「いって、ミラ、いいんだって」

ヒトシくんが優しい声で言うしてくれるから、私、もっと悲しくなって、もっといっぱい泣いた。

「ミラ、もう泣くなよ、なあ、泣くなよ」

ヒトシくんは優しい声で言いながら私の頭をなでてくれた。

「俺、なんにも気にしてねえからさ、泣くなよ」

「ヒ、ヒトシく～ん」

私はヒトシくんに抱きついてワンワン泣いた。

「いいんだよ、俺、ミラが口きいてくんなくても、俺のそばに寄ってくんなくても、

ミラがいじめられるよか、ずっといいんだ」

ヒトシくんはそう言って私をギュッと抱きしめた。

「これからも、俺と口きかなくていいよ、ムシしていいからな、ぜんぜんいいよ、

ミラがいじめられたら、俺、すげえイヤだからよ、それでも、もし、またいじめられたら、

俺、ぜってえ助けるからよ、だから、なんも気にすんなよ、な？」

「ヒトシく～ん！」

私はヒトシくんの首にギュッと抱きついた。

「わ、私、もうヒトシくんと離れない！ いじめられたってヒトシくんと離れない！」

「ミラ...」

「ヒトシくんと離れてる方が苦しいんだもん、すごく苦しくて、悲しくて、

こんなのイヤだもん、ヒトシくんが好きなのに、離れてるなんてイヤだもん」

「で、でも、俺のそばにいと、またいじめられっから」

「いいよ、いじめられても、口きいてもらえなくたって、ヒトシくんと口きけないよりずっといいよ！

私、ヒトシくんがいれば他の友だちなんていない！」

「ミラ... サンキュ...」

ヒトシくんが私の首のところに顔をうずめた。あ...首のところに熱いのが流れて... 血だ！

「ヒ、ヒトシくん、まだ血が出てるよ？」

「え？ あっ！」

ヒトシくんがあわてて顔を離した。

「ご、ごめん、ミラの服についちゃった」

「そんなこといいから病院行こうよ」

「大丈夫だよ」

「大丈夫くないよお！ 行こ！」

私はヒトシくんの腕を引っ張って立ち上がった。

「えっと、こういうときって、どこの病院なんだろ」

「ほんとにこんくらい平気だって」

「あっ、そうだ！ 保健室行こ！ まだ養護の先生いるよ、きっと」

私は、ヒトシくんの散らばった教科書やノートをかき集めて、

ヒトシくんの手を引っ張って学校に戻った。

保健室の山野先生が顔をしかめてヒトシくんの傷を見てる。

「これは縫わないとダメかもしれないわ」

山野先生はそう言って、脱脂綿に消毒液を浸すと、ヒトシくんの傷にそっと当てた。

「ツッ...」

ヒトシくんの身体がビクッと動いた。

山野先生はヒトシくんの頭に包帯を巻いて、今度は顔中の傷に消毒液をつけた。

「あの、あんなに血が出て、大丈夫ですか？」

私は心配になっちゃって山野先生に聞いた。

「頭の傷は出血が多いのよ、内出血するよりはいいんだけど、それにしてもこんなことひどいわね。」

あとで担任の先生に連絡しておくわ」

「え... あ... こ、こんくらい、なんともねえから」

「桜井くん、これはいじめの度を超してるのよ」

ヒトシくんは黙って下向いた。

「桜井くん、今までだってこういうこと何回もあったでしょ？」

ここに来たことはなかったけど、ときどき殴られた痕があったわよね」

ヒトシくんはギクツとした顔で山野先生を見た。

「佐藤先生には注意して見てくださいってお願いしたことあるんだけど、

こういうことって、なかなかねえ」

山野先生はそう言ってため息ついた。

「とにかく校医の外科の先生のところに行きましょう」

山野先生は白衣を脱いで出かけるしたくを始めた。

「吉崎さんもいちおう見てもらいましょうね」

「え？ 私も？」

「まあ吉崎さんはひざの擦傷だけだとは思うけど、診断書があった方がいいからね」
山野先生はそう言って微笑むと、私とヒトシくんを車に乗せて、病院へと急いだ。

ヒトシくんは三針縫ったんだって、廊下で待ってた私に山野先生がおしえてくれた。

治療室のドアが開いて、頭に真っ白な包帯グルグル巻いて顔中ばんそう膏だらけのヒトシくんが出てきた。

「ヒ、ヒトシく～ん」

半べそかいてヒトシくんのそばにいくと、

ヒトシくんがムリして笑おうとするから、口元のばんそう膏がギュッてねじれた。

「桜井くん、これ痛み止めですって」

山野先生が薬局の方から薬をもらってきた。

「麻酔が切れると痛むからね」

「あ... は、はい」

「二人の担任の先生には連絡しておいたからね。」

桜井くんのところも吉崎さんのところも、どなたもいらっしやらないみたいなのよ。

またあとでそれぞれの先生から連絡行くと思うけど」

「は、はい」

帰りも、山野先生が、私たちを乗せて送ってくれた。

ヒトシくんの家の近くで先生の車を下りて、二人っきりになると、何を話していいのかわからなかった。

私のせいでこんなことになっちゃったんだよ。

私がヒトシくんを裏切ってひどいことして、なのに、ヒトシくんは私を助けてくれて...

こんなひどいケガして、全部私のせいだよ。

「ご... ごめんね...」

「え？」

「わ、私のせいで... こんな... ごめんね」

「ミラのせいじゃねえよ」

「だって...」

「俺... すげえ... 嬉しいんだ」

「え？」

「俺... ミラのこと、守ってやれたから」

ヒトシくんはそう言って照れくさそうに微笑んだ。

「俺... 口きいてもらったのって、ミラがはじめてで、すげえ嬉しくて、

お、俺のこと、友だちだって言ってくれて、俺、すげえ嬉しくて、
だから、俺、ぜってえミラのこと守りてえって、思ったた、だから、俺、すげえ嬉しいんだ」

なのに... 私... ヒトシくんのこと裏切った...友だちだって言ってたくせに... それなのに...

「ヒ... ヒトシ...くん... ご、ごめんね、ごめんね」

涙がボロボロ出て止まらなくなった。

「ミラは悪くねえよ、なんも悪くねえよ、いじめられたらさ、怖えよ、俺、すげえわかるからさ

、

だから、もう口きいてくんなくても、ムシしても、ぜんぜんいいからさ、俺、わかってっからさ、

俺も、もうミラのそばにいかねえから、だから、安心しろよ」

私はすごく悲しくなって、胸がギュッとして、

「イ...イヤ... そんなの、イヤ！」

ヒトシくんに抱きついた。

「私、やっぱりヒトシくんのそばにいたいよ、みんなに 口きいてもらえなくてもいいよ、

ヒトシくんと仲よくするだけでいじわるする人たちなんて友だちなんかじゃないよ！

私の友だちはヒトシくんだけだよ！」

「お、俺も、俺の友だちはミラだけだよ」

ヒトシくんも私をギュッと抱いてくれた。

「すげえ大切なんだ、ミラのこと、すげえ大切に、だから、俺、ミラのためならなんでもする、

ミラが俺のこと友だちだって思っててくれるだけで、すげえ嬉しくて、

だから、ミラがもう口きいてくんなくなつたって、それでも、

もし、ミラが俺のこと友だちだって思っててくれたら、

そんだけで、俺... だから...俺のこと... 友だちだって... 思っててくれる？」

「友だちだよ！ いちばん大切な友だちだよ！」

「サンキュー、そんだけで、いいんだ」

ヒトシくんが私の顔を覗き込んでニッコリ笑った。

ばんそう膏だらけのその笑顔を見たら、私、もっと悲しくなっちゃったよ。

その夜、お風呂から上がるとママが帰ってきてた。

「三上先生から電話があったわよ、何やってるのよ、気をつけなさいよ、まったく」

それだけ言って二階に上がっていった。そんだけ？

私、すごい怖かったんだよ？ ヒトシくんが守ってくれたんだよ？ 三針も縫ったんだよ？

ハァ...。ため息ついて部屋に入った。

ベッドに入って電気消した。

ヒトシくん...あんなにいっぱいケガして大丈夫かなあ？

ひざのそこ、ヒリヒリする。

でも、ヒトシくんはこんなもんじゃないんだよね、

いっぱい血が出て、傷だらけで、服も泥だらけでビリビリに破れちゃってて...

なのに...

“ミラのこと守れたから、俺、嬉しいんだ”

そう言ってニッコリ笑った。

“口きいてくんなくていいから...友だちだって思っててくれる？”

友だちだよ、とっても大切な、大好きな友だち...

なのに...私...

口きかなかった、ムシした、いじめられるのが怖いから、大切な友だちなのに...

“俺、わかってっからさ”

ヒトシくんは、わかってくれた、私の気持ち、どんなに怖かったかわかってくれる。

カナちゃんもゆう子ちゃんもクラスみんなも誰もわかってくれないのに...

ヒトシくんは、ヒトシくんだけが、ほんとの友だちだよ。

私のことわかってくれるほんとの友だち！

決めた！ 私、決めた！ ぜったい離れない！

いじめられたっていい！ いじめられたってヒトシくんがいるもん！

私はもう二度とヒトシくんと離れない！

ベッドの中でギュッと手を握りしめた。

すごい早起きして家を出た。

私、決めたんだから！ ヒトシくんと離れない！

ヒトシくんと友だちだから、一緒にいたいから、迎えに行くよ！

ランドセル、ガタンガタンいわせて走った。

ヒトシくんの家の前。フーッと深呼吸して、

「ヒトシくーん！」

シーン。あれ？ もう一回、

「ヒトシくーん！」

バタバタって、中から音がして、ガタガタッガツン！

ガラッと戸が開いて、ヒトシくんがビックリした顔で私を見た。

「ミ、ミラ、ど、どうしたの？」

「迎えにきたの」

「え？」

「だって、ヒトシくんは大切な友だちだから、やっぱ、友だちと口きかないなんてヘンだよ」

「ミ...ラ...」

「いじめられたって平気、ていうか、いじめられたら、ヒトシくんが助けてくれるから、だから、いいの」

ヒトシくんが照れくさそうな泣きそうな顔で微笑んだ。

「だから、一緒に行こっ！ていうか、行ってくれる？」

「う、うん、うん！」

ヒトシくんは嬉しそうにうなずくと、バタバタと奥に走って行って、紙袋持って出てきた。

「それ、なあに？」

「ランドセルぶっ壊れたから...」

「あっ、そう...だよな」

昨日の光景が浮かんだ。ランドセルも教科書もノートもボロボロにされてた...

あのときのこと...思い出すと、なんだかまた怖くなって...ヒトシくんの手をにぎった。

「ヒ...ヒトシくん...ミラのこと...守ってね」

ヒトシくんはニッコリ笑って私の手をにぎり返した。

ヒトシくんの前髪が包帯で上にあがってて、きれいな青い目がハッキリ見える。

だけど、目のまわりが赤黒く腫れてて口元もぼっこり腫れてて、ほんとに痛そう。

私のこと守って、こんなになっちゃったんだよね。

「ごめんね」

ヒトシくんの頭の包帯にそっと触れると、ヒトシくんが

「ミラがなぐったんじゃないやねえよ」

そう言って笑った。

「私のせい...だもん」

「ちがう、これは、なんつうか、男の勲章なんだ」

「え？」

「じっちゃんが言ったんだ」

ヒトシくんがチラッと私を見て、

「す、好きな子を守ってケガしたんなら、それは男の勲章だって、だから、堂々と胸張ってろって」

ヒトシくんはそう言って照れくさそうに笑った。

「ヒトシく〜ん！」

思いっきり抱きついたらゴツン！

「イデッ！」

「あっ、ご、ごめ〜ん！」

「う、うん、へ、平気」

ヒトシくんは私がぶつかった口もとの傷を押さえながらそう言って笑った。

一緒に並んで学校に行くと、みんながヒトシくんの頭の包帯や顔をビックリして見てたけど、ヒトシくんは堂々と胸はって歩いてた。

私はまだちょっとドキドキしてたけど、でも大丈夫、ヒトシくんがいるもん。

“好きな子を守って...”って、ウフッ、私、お姫さまみたい。

そしてヒトシくんは王子さまだよ、うん、私のこと守ってくれる王子さま！

夏休みの計画

あれから私とヒトシくんはいつも一緒にいるようになった。
六年の男子たちは、あれ以来あんなイジメはしなくなった。
山野先生が、私とヒトシくんの担任の先生と校長先生に言ってくれたの。
ヒトシくんをいじめてた六年の男子たちは校長先生に呼ばれたんだって。
「それじゃ、みんな口きいてくれるようになった？」

「ううん」

ヒトシくんがちょっとだけ淋しそうに微笑んだ。

「うそお、なんでよお？」

「や、やっぱ、俺、嫌われてっから」

ヒトシくんはそう言ってボリボリ頭搔いた。

「ヒトシくんにはミラがいるからね！」

そう言ってヒトシくんの腕にギュッてしがみつくと、

「う、うん」

ヒトシくんは照れくさそうに、もっともっとボリボリ頭搔いて笑った。

うちのクラスでも、いつのまにか私のこといじめなくなってた。
ホッとしたけど、でも、もうカナちゃんやゆう子ちゃんとは前みたいに仲よくしてない。
いいんだ！ 他の友だちができたし、それに、私にはヒトシくんがいるもん！

夏が来て、もうすぐ夏休み。

夏休みってさあ、みんな倦みプールや旅行に連れてってもらってるけど、

私はそんなところに連れてってもらったこと一回もないよお。

ママは仕事で忙しいって言うし、パパもずーっと東京で、

帰ってきてても一日とか二日で戻っちゃうから、どこにも行けない。

だから、夏休みって、すんごーい退屈。

あと一週間で夏休みっていう日、ひさしぶりに一緒に晩ごはん食べてたママが言った。

「ミラ、来週から一ヶ月、ママはニューヨークに行くことになったわ」

「ニューヨークって？」

「アメリカよ」

「うわあ！ アメリカ？ すごーい！ ミラも行けるの？」

「あんたはダメよ」

「うっそお、なんでえ？ ミラも行きた〜い」

「連れていけるわけないでしょ！ 仕事なのよ！」

「は...い...」

なんだあ、つまんないのお。

「留守の間、昼間は吉田さんが来るからいいでしょ」

「夜は？ 夜は一人だけ？」

「もう五年生なんだから大丈夫よ」

「そんなあ」

「わがまま言わないでよ！ ママだって仕事で行くんだから！」

「は〜い... あっ！ ねえねえ、パパのところ行っちゃダメ？」

「え？」

「東京行きたーい！ パパのところに泊まるの、ダメ？」

ママはチラッと横目で私を見た。

「聞いてみないとわからないわ」

「聞く聞く！ 今電話してもいい？」

私は受話器に飛びついた。

ピッピッピッ

プルル... プルル...

「もしもし吉崎です」

パパの声！

「パパ？ ミラだよ！」

「おう、ミラ、珍しいな、どうした？」

「あのね、夏休みにね、パパのところに泊まってもいい？」

「え？」

「ママがね、ニューヨークに行くんだって、だから、その間パパのところにいきたいの」

受話器の向こうのパパは黙ったまま。

「パパ？」

「ミラ、ちょっとママと代わりなさい」

「うん、ママ」

ママに受話器を差し出した。

「パパが代わりなさいって」

ママは黙って私を見て、受話器を受け取った。

東京だよ？ 東京！ ディズニーランドも行きたいなあ！

パパ連れてってくれるかなあ？ 休みの日なら連れてってくれるかも！

「だから仕事なのよ！」

ママのキンキンした声。 ど、どうしたの？

「しかたないでしょ！ 大切な仕事なんだから！

それじゃ、あなたはどうかの？ ずっと放りっぱなしで全部私にやらせて！

そっちが仕事って言うなら、こっちだって仕事なのよ！」

ママの顔が真っ赤になってる。

な...なんで怒ってるの...？

「だいたいあなたの仕事だってどういうものかしら？

本当は横にどなたかいらっしゃるんじゃないの？ あら、凶星かしら？

バカなこと？ バカなことしてるのはあなたでしょ！」

な...なんの話してるの...？

「わかったわ！ もうあなたになんかたのまないわよ！」

ガチャン！と、叩きつけるように受話器を置いて、怒った顔のママが私の方を見た。

「あんたの父親は、あんたなんか預かりたくないってよ！」

「え？」

「何が父親よ！ 父親らしいことなんて何もしてないくせに！」

私は...なんか...怖くて...何があったのかわかんなくて...

身動きしないようにして...黙って座ってた。

終業式

今日は終業式。

ママは今日からニューヨークに行っちゃう。

結局私は、パパのところにも行けなくなっちゃって、一人で留守番。

あ〜あ、つまないのお。

昼間は吉田さんがいるだけで、夜は一人ぽっちなんだよ？

学活終わって、ゲタ箱の前でヒトシくんと待ち合わせ。

「ヒトシくん、通信簿どうだった？」

「え、あ、か、変わんねえ」

「私もお、見て〜」

ヒトシくんの前に通信簿を広げて見せた。

「ほらあ、4、4、4、4、4、3、3」

「す、すげえ」

「すごくないよお、国語がんばったのにさあ、4だよ？」

5が一個もないんだもん、またママに叱られちゃうよ」

「お、俺なんて、4なんかねえもん」

「でも体育と家庭科は5なんでしょ？」

「う、うん、そ、そうだけど...」

「見せて」

「え？ あ、で、でも...」

「見せてよお、私だって見せたんだからあ」

ヒトシくんは困った顔してチラッと私を見ると、紙袋から通信簿を出した。

「えーっと... エ？」

1 1 1 1 1 5 5

「すごーい、1と5だけ！」

私、ポッカーンって口開けて、

「私、1って初めて見るう」

ヒトシくんは真っ赤な顔して通信簿を袋にしまった。

「おじいさんに叱られたりする？」

「う、ううん」

「いいなあ、私なんて終業式は叱られてばっかだよお。

今日なんてサイテー。きっと叱られるし、ママはニューヨーク行っちゃうし、今夜から一人だしさあ」

「そ、そっか」

「やっぱ怖いよお、一人なんてさあ」

ヒトシくんが私の顔チラッと見た。

「ママが遅く帰ってくる時だって怖いのにさあ、帰ってこないんだよ？」

ヒトシくんは黙って下向してる。

「泥棒とか入ってきちゃったらどうしたらいいのお？ 怖いよお」

「あ、あのさ」

ヒトシくんが上目遣いでチロッと私を見て言った。

「お、俺ん家、と、泊まる？」

「エッ？」

「お、俺ん家なら、じっちゃんもいるし、こ、怖くねえ...か...なって」

「ウッソーーー！」

「あ、や、あの、イ、イヤならいんだけどよ、や、やっぱ、き、汚ねえし」

「ウ・レ・シーーーーーッ！」

ヒトシくんを抱きついちゃったよおお！

「ほんと？ほんとにいいの？」

「う、うん、き、きつと、じっちゃんも、い、いいって言うよ」

「夏休みの間ずっと？」

「う、うん、ミラが、いんなら...」

ヒトシくんが微笑んだ。

「嬉しい！ 嬉しい！ 嬉しい！」

私、あんまり嬉しくてピョンピョン跳ねちゃった。

「あっ！ ママに言わなきゃ！ まだいるかな？」

夕方の飛行機って言ってたよね？

「ヒトシくん、私、急いで帰ってママに言うね！」

「う、うん」

ヒトシくんに手を振って、ランドセル、ガタンガタンいわせて家まで走った。

「ママー！」

家の中に駆け込んで大声でママを呼んだ。

「ママー！ ママったらー！ ねえ！」

「奥さまなら、もう出かけましたよ」

奥から吉田さんが出てきた。

「エ〜〜、どうしよおお」

「まったくさあ、子ども一人置いて行っちまうんだものね」

吉田さんがブツブツ言いながら奥に入っていった。

どうしよう、ママにヒトシくんの家に泊まること言えなくなっちゃったよお。

「ミラちゃん！ 今日バレエでしょ？ 早くしたくしてくださいよ！」

奥から吉田さんの声。

わかってるよお、わかってるけど、あ～あ。

ブス～ッとしてキッチンに行くと、吉田さんもブスッとして洗い物してた。

「まったく奥さまもどうかと思うね」

ひとりごとみたいにブツブツ言ってる。

「あのねえ、やっぱママに言わないとダメだよねえ？」

「なんですか？」

吉田さんが不機嫌そうな声で言った。

「友だちの家に泊まるって」

「え？」

「夜一人でいるの怖いって言ったらね、友だちが泊まっていいよって言ったの」

「あら、そうなの？」

吉田さんが目を真ん丸くして私の方を見た。

「夏休みの間ずっといいよって言ってくれたんだけどさあ」

「あらあらあら、へえ、そうなの」

吉田さんが目をギラギラさせてそばに寄ってきた。

「でも、ママに言えなくなっちゃったから、ダメだよね？」

「いいよお！」

「え？」

「せっかくの夏休みだもの、友だちの家に泊まった方が楽しいじゃないさ」

「そ、そうだけど…」

「どうせ奥さまはいらっしゃらないんだからさ、いいよいいよ」

「そ、そうかな」

「ちょうどよかったよ、いえね、私もさ、娘のところに孫が生まれてね」

「マゴ？」

「初孫なんだよ、それで世話しに来てくれって言われてたのにさ、

奥さまが急に出てくれって言うもんだからさ、困ってたんだよ」

吉田さんがすんご～く困ったあって顔して言った。

「それじゃ、泊まってもいいと思う？」

「いいさいいさ！ 奥さまには内緒にしといてあげるから！」

「ほんと？」

「その代わりに、ミラちゃんも内緒にしとくんだよ？」

「うんうんうん！」

「私もその間娘んところ行けるし、奥さまが帰ってくる前には掃除しにくるからさ、

ミラちゃん、友だちのところに泊まってきなさいよお」

「ヤッター！」

吉田さんて、たまには話わかるううっ！ ヤッター——！

カレーライス

「ヒトシくん」

夏休みの宿題と着替えとか、いっぱい詰めてパンパンになったカバン持って、ヒトシくんの家の前。

ガタン、ガツッ、ガタガタって戸が開いて、

「ミラ」

ヒトシくんが嬉しそうな顔して出てきた。

「エへへ、来ちゃった」

ヒトシくんも照れくさそうに笑って、私を中に入れてくれた。

「じっちゃん、来たよ」

ヒトシくんが私のカバン持って部屋に上がると、おじいさんが畳の部屋から顔出した。

「おお、こりゃまあ、よく来たなあ」

ニコニコ笑ってそう言った。

「えっと、吉崎ミラです、お世話になります...と、よろしく願いしまーす！」

ペコッと頭下げると、

「ハハハ、こ～んなむさくるしいところによく来てくれたなあ」

おじいさんは笑いながらそう言ってペコペコ頭下げた。

「ミラ、メシ食った？」

「ううん、バレエが終わって、急いで家に帰って荷物詰めてすぐ来たの」

「よ、よかった」

ヒトシくんがホッとしたみたいに微笑んだ。

「え？」

「ヒトシがな」

おじいさんがニコニコして言った。

「今日はお嬢ちゃん来るからって、ご馳走作るんだってはりきってなあ」

「わあ、ほんと？」

ヒトシくんは真っ赤な顔して下向いて、「うん」ってうなづいた。

「嬉しい！ なになに？」

「カ、カレー」

「エッ...」

ガーーーーン...！

「ど、どした？」

「エ、ア、ント、な、なんでも...ない」

ど・ど・ど・どうしよおおおおっ！

カレーライス大キライなんだよおおおお！

で、でも、ヒトシくんが、せっかく作ってくれて、それで、食べられなかったら、どうしよおおおおっ！

ドーーーーーンと重たい気持ちになっちゃったよお。

バラバラのお皿に盛り付けられたカレーが三個、小さいテーブルの上に並んでる。

匂いは... やっぱり... カレー...

でも、ゴロゴロのお肉がない。ゴロゴロのお野菜も。

薄っすーいタマネギとかニンジンとかが入ってるだけ。

あれ？ このピンクのって、なあに？

ジーーーーー。 わかんない。なんだろ？

「ど、どした？」

ヒトシくんが心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「このピンクのって、なあに？」

「え？ ピ、ピンクって、ああ、あの、魚肉ソーセージだけど」

「ギョニクソーセージ？ これ、ソーセージなの？」

「う、うん」

「ピンクのソーセージって、はじめて見たあ！」

「マ、マジ？」

「うん、可愛いね」

「そ、そっか？」

「ねえ、お肉は入ってないの？」

ヒトシくんがチラッと私を見て、

「う、うん、に、肉、高けえから」

困った顔して下向いた。

「よかったあ！」

「え？」

「私、お肉キライなのお」

「マ、マジ？」

「うん、うちのカレーなんかこーんな大きいお肉がゴロツゴロ入ってるんだよお」

ヒトシくんの顔の前に指で丸作ってみせた。

「す、すごえ...！ んなデッカイ肉、食ってみてえ」

ヒトシくんは目を丸くして私の指を見て言った。

「やめた方がいいよお、マズイからあ」

「マ、マジ？」

私は顔をギューッてしかめて「うんうん」ってうなづいてみせた。

畳の上で、ヒトシくんとおじいさんと私と三人。

私は目の前のカレーとにらめっこ。

よ、よし、が、がんばるっ！

「いただきまーす」

目をつぶって、パクッ。

え？

辛くない...！ 甘い！

「おいしい！」

「マ、マジ？」

「うん！ほんとにおいしい！ビックリ！私ね、ほんとはね、カレーってキライなの」

「え？」

「うちのカレーって、すごい辛くて、お肉やお野菜がゴロゴロしてまずいんだもん、

でも、このカレーなら好き！甘くて、お野菜小さいから食べられるよ、ほら」

パクッて薄いニンジンをお口にに入れてみせた。

「ね？ ぜんぜんニンジンくさくないんだもん」

ヒトシくんが嬉しそうな顔して私を見てた。

「ヒトシ、よかったなあ」

おじいさんもニコニコしてた。

私の方こそ、よかったあ！カレー食べられたあ！

ヒトシくんのカレー、ほんとにおいしい！

私、ぜーんぶ食べたよ！ すっごーい！

後片づけ。

「私も手伝う！」

流しの前のヒトシくんのそばに行った。

蛇口が一個だけ。

「ねえ、お湯はどこから出るの？」

「出、出ねえよ？」

「え？ お水だけ？」

「うん」

「冷たくない？」

「そ、そうでもねえよ、冬はちょっと冷てえけど、慣れてっから」

「顔洗うときも？」

「う、うん」

お湯が出ない家ってあるんだあ。

ヒトシくんが洗ったお皿を、私が拭くことにした。

「ねえ、どれで拭けばいいの？」

「こ、これ」

ヒトシくんが窓の前にかかっている大森漁業組合って書いてるタオルを渡してくれた。

「このお皿欠けてるよ？」

ヒトシくんは私の手元をチラッと見た。

「ああ、古いかんな」

「捨てないの？」

「え？」

「ママならすぐ捨てちゃうよ」

「お、俺ん家、あ、あんま皿ねえから」

ヒトシくんがそう言って笑いながら、ボコボコになってるお鍋を洗ってる。

すごーい、取っ手のところが片方取れてるよ？

「それって、魔法のお鍋みたい」

「え？」

「だって魔法使いのおばあさんが大昔から使ってるお鍋みたい」

「え？ あ、ハ... ハハハ」

ヒトシくんが笑いながら泡だらけの手で鼻をこするから、

「あっ、ヒトシくん、泡がついちゃったよお」

そう言ってタオルで拭いてあげると、ヒトシくんが真っ赤な顔になった。

「どうしたの？」

「う、ううん」

ヒトシくんは真っ赤な顔でうつむいて、ジャーっってお鍋の泡を流してた。

お布団

畳の部屋にお布団が二枚ピタッとくっついて...で、部屋がいっぱいになっちゃった。
このお布団、すごいい薄いよ？ タオルケットもあちこち穴が開いてて、
この大きな穴なんて、ここから足出ちゃうかも。

「ミラ、あ、あのさ、布団二枚っきゃねえから、俺が真ん中に寝っからよ、い、いい？」

「みんなで一緒に寝るの？」

「う、うん」

「わあ！ 嬉しい！」

「え？」

「私、ずーっと一人で寝てるの。慣れたけどさあ、夜中に雷鳴ったりすると
すごいい怖いんだよ？ そういうときはママのベッドと一緒に寝たいなあって
思うんだけど、ママはダメって言うの、みんなで寝るなんて楽しそう！」

ヒトシくんは嬉しそうな照れくさそうな顔して微笑んだ。

「それじゃ、ワシは先に寝るからなあ」

おじいさんがそう言っていちばん左端に入った。

「あれ？ おじいさんお風呂入らないの？」

「ワシはおっとい行ったばかりだからなあ」

おじいさんはそう言って笑った。

「行くって、どこに行くの？」

「銭湯だよ、ほれ、その裏どおりにある長生湯」

おじいさんは布団に横になりながら指で右側を指して言った。

「わあ、銭湯に行くの？」

「お嬢ちゃん行ったとこないんかい？」

「ないないない、行きたーい！」

「そうかい、日曜にヒトシが行くから一緒に行くといいわ」

「え？ 日曜日まで行かないの？」

ヒトシくんの方を見ると、ヒトシくんが「うん」ってうなづいた。

「毎日入らないの？」

「う、うん、お、俺は日曜で、じっちゃんは火曜」

「エッ？ 一週間に一回だけ？」

「う、うん」

「汗かいたら気持ち悪くない？」

「な、慣れてっから」

「どうしよう、私、バレエやった後って、いーっぱい汗かくからさあ、

「今日もバレエだったから汗いっぱいかったの」

「あ、そ、そっか、ミラは... えっと、ちょ、ちょっと待ってて」
ヒトシくんが押し入れの中をゴソゴソやって、丸い缶を出してきた。

ヒトシくんがパカッとフタを開けると、中に10円とか5円とか1円が入ってた。

「えっ...と」

ヒトシくんが10円を数え始めた。

「なに？ どうしたの？」

「あ、や、あの、せ、銭湯代...」

「え？」

「ヒトシ、ワシの作業袋の中に財布が入ってっから、そこから出せや」

「あ、う、うん」

「あ、ねえ、ま、待って」

玄関に行こうとしたヒトシくんの腕を引っ張った。

「銭湯代って、私の？」

「う、うん、12時までやってっから、まだ間に合うよ」

「え？ あ、いいよいいよ」

「で、でも、風呂入んねえと気持ち悪りいだろ？」

「そうだけどお、いいよ、私、お小遣い持ってきたし、それに」

ヒトシくんの前に腕出した。

「汗くさくない？」

「え？」

「かいでみて」

「え、あ、う、うん」

ヒトシくんが真っ赤な顔になって私の腕に顔近づけた。

「どう？ 汗くさい？」

「う、ううん」

「だったら、いいや」

「マ、マジ？」

「うん、めんどくさいし」

そう言って笑うと、ヒトシくんもホッとしたみたいな顔で笑った。

顔だけ洗って、ピンクのパジャマに着替えて、お布団の中。

左端におじいさん、真ん中にヒトシくん、右側に私。

「あれ？ ヒトシくん、パジャマ着ないの？」

ヒトシくんは学校の短パンとさっきまで来てたTシャツのまま。

「う、うん」

「男の子ってパジャマ着ないの？」

「わ、わかんねえけど、俺は、いつもここで寝ただけど」

ヒトシくんが電気消して私のとなりに寝た。

「あれ？ ヒトシくん、枕は？」

ヒトシくんの頭の下に手をやると、な〜んにもないよ？

「ま、枕、ふたつっきゃねえんだ」

「あっ、ごめんね、私が取っちゃってたんだね」

「い、いいんだ、俺、なくてもへいきだからよ」

「半分こで使う？」

「え？ あ、い、いいよ、ミラ使えよ」

「半分こしようよ」

グイッと枕をヒトシくんの方に押して、私は片側に頭をつけた。

「早く早く、ヒトシくん、こっちに頭やってよ」

「う、うん」

ヒトシくんが、もう片方に頭を乗せると、私とヒトシくんの身体がピタッとくっついて、

「ウフフ、あったか〜い」

「う、うん」

「なんか、すっご〜いホッとするう」

「う、うん」

目を閉じると、フワワンで気持ちになって...

このお布団、ちょっとヘンな匂いがするけど...気持ちよくて...

いつのまにか眠ってた。

ジリリ...ジリリ... ガチャン！

な...なに...？

まぶた半分開けると、ヒトシくんが布団から腕伸ばして目覚まし止めてた。

「ヒトシくん...今...何時？」

「5時半」

ヒトシくんは眠そうに目をこすって身体を起こした。

「ラジオ体操？ え？ でも、ラジオ体操6時半だよな？」

「仕事なんだ」

ヒトシくんは大きなあくびして立ち上がった。

「え？ 仕事？」

「ミラ、まだ寝てろよ、早えからさ」

そういうと台所の流しでシャブジャブ顔洗ってた。

「仕事って、なあに？」

「ヒトシくんは濡れた顔のままこっち向いた。

「魚屋」

「え？」

私も布団から立ち上がってヒトシくんのそばに行った。

「魚屋の仕事って？」

「んっと、魚入ってた箱洗ったり、いろいろ」

「小学生なのに仕事してるの？」

「うん」

ヒトシくんがちょっと恥ずかしそうな顔でうなづいた。

「ここの大家さんなんじゃよ」

おじいさんが布団からこっちを見てた。

「あ、おじいさん、おはよう」

「ああ、おはよう」

おじいさんはニコニコして布団の上にあぐらをかいた。

「魚清さんって言ってな、そこの通り真っ直ぐ行った角の、知ってるかい？」

「うん、見たことあるけど」

「この家の大家さんでなあ、わしら、このとおりの貧乏暮らしでなあ、

少しでも足しになるだろうって、ヒトシに手伝わせてくれてのう、

ほんとに助かってんだわ、ありがたいこったよ」

「そうなんだあ」

すごーい、小学生なのに、夏休みなのに働くんだあ。

朝ごはんは昨日の残りのカレー。

朝にカレー食べるなんて初めてだよお。

ごはんが冷たいけど、おいしい！

「私、朝ごはん、こんなにいっぱい食べたのはじめて！」

そう言うと、ヒトシくんとおじいさんがニコニコ笑って私を見てた。

「そんじゃ行ってくる」

ヒトシくんは昨日から着てるTシャツの下にジャージ履いて立ち上がった。

「あ、ねえ、何時ごろ帰ってくるの？」

「んっと、夕方...6時に店閉まっから、そのあと」

「えっ？ そんな遅く？」

「う、うん、あの、ご、ごめんな」

「え？ あ、う、ううん、いいよ」

でも...ほんとは...淋しいなあ。

「ヒトシ、奥さんに今月の家賃、もう少し待ってくれるように言っといてくれや」

ヒトシくんがチラッと私の方見てから、

「う、うん」

ゴム長履いて、ガツンッガタガタって戸を開けて出かけてっちゃった。

あ～あ、つまんな～い、ヒトシくんいないんだも～ん。

ゴロンってお布団に寝転がると、おじいさんが笑った。

「ミラちゃん...だっけかい？」

「うん」

「まだ眠いじゃろ、ゆっくり寝るといいわい」

「眠くないけど...」

ラジオ体操でも行こうかなあ？

行ったことないよ、ラジオ体操、いつも寝てるもん。

「ヒトシはな」

おじいさんが自分の布団たたみながら言った。

「5年のときから休みってえと魚清さんで働いててのう」

「えっ、私と同じ年から？」

「ああ、学校あるときは日曜の朝だけ掃除しに行ってたなあ」

「えっ、日曜日も？ いつも？ 今までも？」

「ああ、そんで500円もらって、それで風呂行って、残りがあの子の小遣いになるからのう」

す...ごい... 自分で働いて、それでお風呂に行って、それがお小遣いで...

「わしら、見てのと通りの貧乏だからなあ、わしの稼ぎだけじゃ、あの子に小遣いもやれんわ」おじいさんが淋しそうに笑って言った。

あっ...！ だから一週間に一度しかお風呂に入れなかったんだ...

なのに、みんな、ヒトシくんのこと臭いとか、だってお金ないんだもん、

自分で働いてお風呂に行くんだもん、それなのに、私、ゆうべ、一週間に一度じゃ困るって、ヒトシくんとおじいさん、私のためにお風呂のお金出してくれようとして、私、私...

なんかすごく恥ずかしくなった。

なんか、わかんないけど、ヒトシくんが遠くに感じて、なんか、淋しくなって、

「おじいさん、私、行っちゃダメかなあ？」

「え？」

「ヒトシくんのところ、行ったらダメ？」

おじいさんがニッコリ笑った。

「ああ行っといで」

「ジャマじゃない？」

「大丈夫さあ、雑用やっとするだけじゃから」

「それじゃ行く！」

大急ぎで顔洗って、着替えて、魚屋さんに走った。

「魚清」って大きな看板。

でも、シャッター閉まってるよ？

ヒトシくん、どこにいるのかなあ？

お店のまわりをウロウロしてたら、裏の方から音がしてた。

狭い通路を歩いて行くと、ウッ！ 魚くさーい！

鼻押さえてキョロキョロ見ると、あっ！ いた！

いっっぱい箱が積んである中にしゃがんで、木の箱をゴシゴシたわしでこすってる。

「ヒトシくん！」

ヒトシくんがビクッとして顔上げた。

「ミ、ミラ？」

ビックリした顔してる、ウフッ。

「ど、どした？」

「なんかヒトシくんのそばに行きたくなっちゃったの」

「え、あ、そ、そっか」

ヒトシくんが真っ赤な顔して下向いて、またゴシゴシこすった。

「なんか手伝うことある？」

「え、あ、い、いいよ、汚れっから、えっと、あ、そこ座ってろよ」

ヒトシくんがお店の裏の一段高くなってるコンクリートのところを指さした。

膝抱えて座りながら、ヒトシくんのことを見て...

ヒトシくんは汗ビッシヨリになりながら、いっぱいある箱をひとつひとつ洗ってる。

洗い終わった箱を5個ずつくらいに積んで、脇の方に運ぶ。

ヒトシくんのTシャツは汗と汚れとホースの水でドロドロになっちゃって、顔も汗と汚れでドロドロになっちゃって、でも、なんか、すごくかっこいい。

「ヒトシくーん」

「え？」

「かっこいい！」

「えっ」

ヒトシくんはパーッと真っ赤になっちゃった、ウフッ♪

でもさあ、黙って座ってるのって、な〜んか退屈になってきちゃって、

「ヒトシく〜ん、やっぱ手伝う！」

ヒトシくんの横にしゃがんだ。

「い、いいよ、汚れちまうからよ」

「だって退屈なんだもん」

「そ、そっか、えっと、そ、そんじゃ、俺が洗ったヤツにホースで水かけてくれっか？」

「うん！」

ジャージャーって水かけながら、

「ヒトシくんさあ」

「ン？」

ヒトシくんは顔だけ上げて私の方を見た。

「夏休みの自由研究、何やるか決めた？」

「う、ううん」

ヒトシくんはタワシでゴシゴシこすりながら返事した。

「何にしようかなあ、去年は紙粘土と貝殻で花ビン作ったんだけど、

同じモノ作ってきた子が5人もいたの、だってさあ、それってデパート売ってたキットだからそれ買ったら、み〜んな同じものになっちゃうよねえ」

「ハハハ」

「ヒトシくんは去年何やったの？」

「お、俺は... な、なんもやってねえ」

「どうして？」

「な、何やっていいかわかんねえし...」

ヒトシくんは洗った木箱を積み上げながら、

「絵とか... そういうのもヘタだから...」

そう言って、また脇の方に積んだ。

「先生に叱られなかった？」

「せ、先生も、俺はしょうがねえって...思ってたから...」

ヒトシくんはそう言いながら、濡れた手でボリボリ頭搔いた。

「ねえ、だったらさあ、一緒にやらない？」

「え？」

「ヒトシくんと私と二人で一個のなんかやるの、去年うちのクラスの坂本くん、

2個上のおにいちゃんと二人で、川の生き物って自由研究やってきたよ？

金賞取ってたもん、すごいよねえ」

「う、うん」

「だから、私たちも一緒に何かやろうよ！」

「あ、う、うん、でも、俺、な、なんもできねえから...」

「ヒトシくん、なんでもできるじゃーん！ カレーだって作れるし、縫い物だってできるし、

な〜んにもできないのは私の方だよおお、あ〜あ、何にしたらいいんだろう」

ヒトシくんが困った顔して、私も困っちゃって、どうしようかなあ？

ガラッて戸が開いて、

「ヒトシちゃん」

ビックリして顔上げると、太ったおばさんが立ってた。

「あれ？」

おばさんもビックリした顔して私を見た。

「こ、こんにちは」

立ち上がってペコッと挨拶すると、おばさんは驚いた顔のまま、

「ヒトシちゃん、友だちかい？」

「あ、は、はい」

「あらあ、ヒトシちゃんたらガールフレンド連れてきちゃってさあ、ガハハ」

ガールフレンドだってえ、ムフッ♪

「あ、や、あ、あの」

ヒトシくんったら、また真っ赤になっちゃった。ムフッ♪

「あらあ、えらいねえ、手伝ってくれてんのかい？」

「え...あ...ちょっとだけ」

ヒトシくんの方をチラッと見ると、ヒトシくんが照れくさそうに微笑んだ。

「あんた、この近所の子かい？」

「はい、大通り渡ってすぐの...」

「なんてえ家？」

「吉崎です」

「ヘッ？ あんた、吉崎さんのお嬢さんかい？」

「え？ は、はい」

「ありゃりゃ、こりゃまあ、いつもお世話になってますよお」

「え？」

「あれれえ、吉崎さんのお嬢さんがそんなことしちゃダメですよお」

おばさんが私の手からグイッとホースを取り上げた。

「お嬢さんに手伝わせてるなんて知れたら、奥さんに叱られちゃうよお」

「あ、だ、大丈夫です、あの、ママは今留守だし」

「それでもさあ、こ～んなむさくるしいところに来ちゃダメですよお、

ほらほら、早くお帰んなさいな」

おばさんがグイグイ私の背中を押した。

え——っ、やだあ、ヒトシくんといれなくなっちゃうよおお。

「あ、あのお！」

私はクルッとおばさんの方を向いた。

「えっと、これは、あの、だから、あっ！」

いいこと考えた！

「自由研究！」

「ハ？」

「夏休みの自由研究なんです！ 魚屋さんの仕事っていう、ヒトシくんと私の！」

ヒトシくんがポッカーンと口開けて私を見てた。

「だから、あの、夏休み中、私もヒトシくんと一緒にお手伝いさせてくださいーい！」

ペコッて頭下げた。

「あららあ、そうだったのかい、さすが吉崎さんのお嬢さんだねえ、勉強かい」

おばさんが目をクリクリさせて言った。

「そ、そうです！」

「そりゃ感心だねえ、そうだね、勉強ならさ、おばさんも協力するよ！」

「ほ、ほんと？」

「ああ、吉崎さんには、いつもお世話になってるもんねえ」

「それじゃ、お手伝いしてもいいですか？」

「いいよお、勉強だもんねえ、えらいねえ」

おばさんはニッコニコして言った。

ヤッター——！

「でも、その靴じゃ濡れちゃうよ、ちょっと待ってなよ、おばさんの長靴貸してやるからさ」
おばさんはそう言うと、家の中に入っていった。

「ヤッター」

小さい声でそう言ってヒトシくんの方を見ると、ヒトシくんは、まだポカーンって顔してた。

「ヒトシくん、自由研究決まったよ！」

「う、うん」

「一緒にできるよ！」

「う、うん」

「夏休み中ずーっと一緒にいれるね！」

「う、うん！」

ヒトシくんが嬉しそうに笑った。

「ミラって、すげえ！」

「私もそう思うううう、ムフツ」

「アハハ、うん、すげえ」

なんか、またワクワクしてきちゃった～♪

なんにもしないお仕事

朝の魚屋さんって忙しいんだなあ。

魚を箱から出して冷蔵庫に入れたり、お刺身作って並べたり、電話がジャンジャンかかってきて、おばさんが注文取って、おじさんがお魚さばいて、バケツいっぱいになったハラワタ（ゲロツ...）をヒトシくんが裏に捨てにいった、そして私は... ボーッと立ったまま。

どうしよう？ 何すればいいの？ 聞いてみる？

「えっと... あのお、おじさん」

お魚さばいてるおじさんの顔を覗き込んだ。

「ん？ お嬢ちゃん、どうした？」

「あのお、私、何かお手伝いしたいんですけどお」

「んーっと、そうだなあ、そんじゃ、そのイワシを5本ずつ皿に載せてくれや」

「イ、イワシ？」

イワシってどれ？ お魚って全部同じに見えちゃう、どれだろおお？

「ちょーっと、あんたあ、ダメだよお、お嬢さんにそんなことさせちゃあさあ」
おばさんが飛んできた。

「んなこと言ったって、お嬢ちゃんが手伝ってえつつったんだぞ」

「お嬢さんは勉強しに来たんだからさ、仕事させなくていいんだよ」

「あ...でも...私...」

「いいからいいから！ お嬢さんはここに座っといで」

おばさんが丸い椅子を私の前にズリズリッと出した。

「ヒトシちゃん、イワシ5本ずつ分けとくれ」

「は、はい」

ヒトシくんが裏から走ってきた。

私のことチラッて見て、ちょっとだけニコッてして箱の前にしゃがんだ。

へえ、あれがイワシなんだあ。ヒトシくん、よくわかるなあ、すご〜い。

ヒトシくんがイワシをガバッとつかんで、発泡スチロールのお皿に載せていく。

「ヒトシくん、私も手伝う」

そう言ってヒトシくんの横にしゃがんだ...けど、こ、これ、つかむ...の...

ウッ... ヌルッて... キ、キモチ悪い...

親指と人差し指でシッポつかんで、お皿の上にポイツ。

ゼーゼーゼー...

ヒトシくんが笑いたそうな顔で見てるよお。

「なによお」

口とがらせて言うと、もっとニタニタしたから私も可笑しくなって笑っちゃった。

「あららら、ちょーっと、ヒトシちゃん、ダメだよお、お嬢さんにそんなことさせちゃ」
おばさんがあわててそばにきた。

「あ、でも、私、お手伝いしたいから」

「ダメダメ、いいんだよお、そんなことしなくてもさあ」

おばさんは私の腕をつかんで、

「お嬢さんは見てりゃいいんだからさ」

ニコニコしてそう言うと、またさっきの椅子に座らせた。

ポツツーーーーン。

「ハマチちょうだいな」

あ、お客さんだ。

「はいはい、何切れにしますかね？」

おばさんがお客さんのそばに走っていった。

「そうねえ、5切れもらおうかしらね」

「イワシもいいの入ってますよ」

奥からおじさんが大声で言った。

「あらそう？ それじゃイワシも」

って、お客さんが言ったら、ヒトシくんがイワシを乗せたお皿をおばさんに渡した。

すごーい、ヒトシくん、言われないうちにパツてやれて、すごーい。

「あらあ、魚清さん、いつの間に娘ができたのさ？」

お客さんが私の方を見て目を丸くした。

「いえね、ほら、吉崎さんのお嬢さんなんですよ」

「ああ、一丁目の吉崎さん？」

「夏休みの宿題で魚屋の仕事を勉強するんですってさ」

「あっらあ、えらいねえ」

「さすが吉崎さんのお嬢さんだよねえ」

「ほんとにねえ」

ほ、ほめられても... 私... なんにもしてないんだけどなあ...

ジーッと座っていると、なんか冷えてきちゃって、オシッコしたくなっちゃった。

「あのお」

おばさんの背中トントンって叩いて、

「トイレ行ってきていいですか？」

「いいよいいよ、奥の階段上って左にあるからね」

「はい」

トントントンって階段上って、トイレに入った。

ハ〜〜〜....

トイレに座ってため息ついちゃったよお。

な〜んかさあ、いいのかなあ、私な〜んにもしなくていいのかなあ。

トイレから出ると、ヒトシくんが階段上ってきた。

「ヒトシくんもトイレ？」

「う、うん、昼メシ作りにきた」

「え？ ヒトシくんが作るの？」

「う、うん、おかみさん忙しいから」

「ねえ、私も一緒にいてもいい？」

「あ、うん」

だ〜ってさあ、座ってるのもあきてきちゃったんだもん。

ヒトシくんが、イワシのお腹に親指をブスッ！

「キャー！」

「ミ、ミラ、ど、どした？」

「だ、だって、ウツ... 血、血があああ」

「ハハハ」

ヒトシくんは笑いながらイワシのお腹をグイグイって、ウツ... ハラワタが...

「キ...キモチ悪い...」

私はヒトシくんの背中に隠れながら、ヒトシくんの手元を見ていた。

ヒトシくんは次々イワシに指突っ込んで、一枚一枚水道の水でジャーッと洗ってる。

「すごいねえ」

「え？」

ヒトシくんが振り向いた。

「ヒトシくんて、お魚も料理できるんだね」

「あ、ああ、親方に教わったんだ」

「親方って、あのおじさん？」

「うん、魚のさばき方は親方が教えてくれて、味つけんのはおかみさんが教えてくれた」
ヒトシくんはしゃべりながら、どんどん作っていく。

「ヒトシくん、すごいなあ、なんかさあ、ちゃんと仕事してるってカンジだよな」

「え？」

「私なんてさあ、ただ座ってるだけでさあ、な～んにもできないもん、

ていうかさあ、おばさんが座ってる座ってるって、な～んにもさせてくれないんだもん」
口とんがらせて言っていると、ドタバタって誰かが階段上ってくる音がして、
おばさんが台所に入ってきた。

「あらあら、お嬢さん、こ～んなむさくるしいところ来ちゃダメですよお」

「え？ あ、あの」

「ヒトシちゃん、お嬢さんに手伝わせちゃダメだよお」

「ち、ちがいます、私は...」

「お嬢さん、もうすぐ昼だからさ、お家帰っといで」

「え？」

「お家でお昼食べて、ゆっくりしてから戻ってくるといいよ」

「あの...」

ヒトシくんの方をチラッと見ると、ヒトシくんも困った顔してた。

「あの、私、今、ヒトシくんの家にいるんです」

「ハ？」

「ママがニューヨークに行っちゃってて、夏休み中ずっとヒトシくんの家に
泊まらせてもらえることになってるから...」

「ヘッ？ あのボロ家に、泊まってんのかい？」

おばさんが目をまん丸くして聞いた。

「え？」

「あ、いや、ウホホホ、あらあら、まあ、へえ、そうなの、ヒトシちゃんのところにねえ」

「はい」

「それじゃ、うちで昼食べるかい？」

「いいんですか？」

「いいけどさあ、お嬢さんの口に合うかねえ」

「だ、大丈夫です、ヒトシくんが作ってくれるのなら...」

チラッと流しのイワシを見ると... ウッ... じ、自信ない...けど...

「そうと決まったら、お嬢さん、ほら、ここに座ってテレビでも見てなよ」

おばさんが台所の横の畳の部屋の座布団指差した。

「ほらほら早く」

私の肩をつかんで、グイッと座布団の上に座らせて、パチンとテレビつけた。

「それじゃ、ヒトシちゃん、早く作ってお嬢さんに食べさせてやんなよな」

「は、はい」

おばさんは、またドタバタと階段下りていった。

「なんでよお」

私はふくれっつらして言った。

「なんでおばさんたら、いつも私のこと座らせてばっかなのお？」

「気い使ってんだよ」

ヒトシくんがイワシを油で揚げながら言った。

「なんで気を使うの？」

「ミラが、お得意様のお嬢さんだから」

「そんなの知らないよお、私はヒトシくんと一緒にお手伝いしたいのにい」

「言われたんだ、俺」

ヒトシくんはガスの火を調節しながら言った。

「あんたとお嬢さんはちがうんだから、あんたと同じだと思っちゃいけねえよって」

「え？」

「友だちになってもらってるだけでもありがてえんだからって」

「なにそれえっ？」

「でも、ほんとのことだからさ」

ヒトシくんはそう言って笑った。

なんかさあ... なんかなんかだよおお。

ヒトシくんの作ったイワシのフライはおいしかった。

イワシが食べられたなんて、すごい！と思った。

でも...

結局、私は一日中座ってて、ヒトシくんはずっと働いてて、な～んかヘンなお。

おにいちゃんと妹

夕方になって、おじさんがお店のシャッター閉めた。

「二人とも、もう帰っていいぞ」

おじさんがそう言うと、おばさんが私とヒトシくんの前に来た。

「ヒトシちゃん、これ、今日の分ね」

そう言ってヒトシくんに500円玉を渡した。

ヒトシくんはペコッお辞儀して500円をポケットに入れた。

「それから、これはお嬢さんに」

おばさんはそう言って私の前に100円玉を差し出した。

「え？」

「お嬢さんにお金あげるなんて失礼だって言ったんだけどさあ、

親方がね、働いて金もらうのも社会勉強だって言ってさあ」

「でも...」

私... な〜んにもしてないんだけどなあ。

「ジュースでも買いなよ、ね？」

おばさんはそう言って私の手に100円をにぎらせた。

いいのかなあ？ いっぱい働いてるヒトシくんが500円で、な〜んにもしてない私が100円。

家に帰ると、ヒトシくんは押し入れの奥から箱を出して、さっきもらった500円玉を入れた。

「その箱って、ヒトシくんの貯金箱？」

「ううん、こん中の金は、家賃とか電気代とかそういうのに使うんだ」

「え？ それじゃ、その500円、ヒトシくんのお小遣いじゃないの？」

「俺の小遣いは日曜にもらうヤツ」

ヒトシくんはそう言いながら、また押し入れに手を突っ込んで小さな缶を取り出した。

「俺の小遣いはここに入れてんだ」

缶の中には10円玉や5円玉や1円玉が入ってた。

「こんでジュースとかエンピツ買うんだ」

ヒトシくんは嬉しそうに言った。

「でも、今はあんま使わねえようにしてんだ、これ貯めてチャリ買ってえから」

「自転車？」

「うん、新品はムリだけど、中古なら買えっからさ」

「自転車って高いの？」

「いろいろだけど、表通りの自転車屋で2900円のがあるんだ」

ヒトシくんはニコニコしながら言った。

「すげえポロだけど、直せば使えっからよ」

ヒトシくんが1円や5円を一枚ずつ数えていった。

「えっと...今... 700...80... 780円だから...」

私...なんか...胸のそこ...ギュウッて...なんか...

「まだまだだけど、来年の春くれえには」

ヒトシくんが顔上げて私を見たときには、私、涙ポロポロこぼれてた。

「ミ、ミラ、ど、どした？」

ヒトシくんがビックリしてるけど...

「ウ...ウ...ウエ〜ン」

「ミ、ミラ？」

「ウック...ヒッ...ヒック...ヒトシくんて...ヒック...すごいよお、ウエ〜ン」

「え？」

「ヒック...ヒ...ヒトシくんは...一日中...いっぱい働いて...ヒック...もらったお金...ヒック...

電気代とかそういうのに...ヒック...して...私なんて...なんにもしないのに...ヒック...

お金もらって...ヒック...座ってただけなのに...ヒック」

「そ、それは、だから、おかみさんが...」

「お小遣い...貯めて...ヒック...自分で自転車...ヒック...買うって...ヒック...

私なんて...パパが来たときに...ヒック...おねだりして買ってもらって...」

なんか...すごくすごくすごーく悲しくなってきたら、涙がいっぱい出て止まらない。

「おばさんが...ヒック...私とヒトシくんはちがうって...ヒック...言ったけど...

やっぱ...ちがう...ヒトシくんは...すごいけど...私はな〜んにもできなくて...ヒック...」

「ミ、ミラ、んなことねえよ」

「あるよお！ ウエ〜ン」

「ミ、ミラ」

ヒトシくんが泣いてる私のこと抱っこしてくれた。

「な、泣くなよ... ミラ...」

「だってえ...私...お魚の名前だってわかんないし...」

「お、おしえてやっからよ、俺、ちゃんとおしえてやっからよ」

「ほんと？」

顔を上げると、ヒトシくんがうんうんってうなづいた。

「私、ヒトシくんとおんなじになりたい」

「え？」

「ヒトシくんみたいに、ちゃんと働けて、ヒトシくんみたいに役に立ちたいよお」

ヒトシくんがちょっと驚いた顔で、私の顔を覗き込んだ。

「私...できると思う？」

「うん、うん、できるよ、ぜってえ」

「ほんと？」

「うん、お、俺がついてっからよ」

ヒトシくんは真剣な顔してそう言った。

「うれしい！」

ヒトシくんにギュッと抱きつくと、ヒトシくんもギュッと抱っこしてくれた。

「ヒトシくん、私が泣いてると、いつも抱っこしてくれるね」

ヒトシくんの腕の中で、なんかホッとしながらしゃべってる。

「じっちゃんが...俺が小せえとき、泣いてっと...抱っこしてくれたんだ」

ヒトシくんはそう言いながらボリボリ頭を掻いた。

「いいなあ、私なんかさあ、泣いてても抱っこしてもらったことないよ、パパはいないし、

小さいときだって仕事でほとんどいなかったしさあ、ママもいつも忙しいんだもん」

私はヒトシくんを抱っこされながら口を尖らせた。

「泣きたいときってさあ、抱っこしてもらおうとホッとするよね」

「うん」

「私もヒトシくんみたいなおじいさん欲しかったなあ」

「ミ、ミ、ミラが、な、泣きてえときは、お、俺が、だ、抱っこしてやるよ」

「ほんと？」

顔を上げると、ヒトシくんが真っ赤な顔してうなづいた。

「うれしい！」

私はまたペタ〜ッてヒトシくんにくっついた。

「ヒトシくんて、おにいちゃんみた〜い」

「え？」

「私、一人っ子だからさあ、おにいちゃんほしかったんだよね、ヒトシくんは？」

「え？」

「妹ほしい？」

「え、あ、う、うん」

「ねえねえ、私がヒトシくんの妹になってもいい？」

「え？」

「ヒトシくんが私のおにいちゃんて、私がヒトシくんの妹！」

「あ、う、うん」

「じゃ、決まり！ 今日から私はヒトシくんの妹で、ヒトシくんは私のおにいちゃん！」

「うん」

ヒトシくんが照れくさそうに微笑んだ。

「それにさ、夏休みはずっとヒトシくんの家にいるじゃない？」

「うん」

「なんかほんとのきょうだいみたいだね、ウフッ」

「うん」

「あっ！ そうだ！」

私はポケットから、おばさんにもらった100円を取り出した。

「これ、電気代の箱に入れて」

「え？」

「今日はなんにもしなかったけどさあ、私がもらったお金も入れて」

「で、でも」

「そしたらさあ、ヒトシくんとおんなじになれるしさあ、ほんとにきょうだいみたいになれるじゃん」

ヒトシくんがポカンと口開けて私を見ていた。

「明日からはヒトシくんにおしえてもらって、ちゃんと働いたお金になるから！　ね？」

「ヒトシくんは黙って私のこと見てた。」

「どうしたの？」

「す...　すげえ...」

「え？」

ヒトシくんは下向いてゴシゴシ目をこすった。

「どうしたの？」

ヒトシくんは下向いたまま首を振った。

「ねえ、私、なんか悪いこと言った？」

顔を覗き込むと、また目をゴシゴシこすって首を振った。

「なによお、どうしたの？」

ヒトシくんはチラッと私の顔を見て、

「お...俺...ミラのこと...」

「え？」

「すげえ...」

ヒトシくんはそう言って、私の手をギュッてにぎって、また黙っちゃった。

でも、ヒトシくんと手をつないでるとホッとすると、私も黙ってヒトシくんの手をにぎった。

「おばさん！ 今日から私もヒトシくんと同じに仕事させてください」

また私のことを座らせようとしたおばさんはキョトンとして私を見てる。

「だって、魚屋さんの仕事を勉強しにきたのに、座ってるだけじゃわかんないんだもん」

「わ、わかんないことはさ、おばさんがおしえてあげるよお」

「わからないことはヒトシくんがおしえてくれるから大丈夫」

「そういうこっちゃなくてさあ」

「私もちゃんと働いてみたいの、座ってるだけでお金もらうのってイヤなんだもん」

「おっし！ えれえぞ！」

おばさんの後ろから、おじさんがニッコニコして言った。

「お嬢ちゃん、いい心がけだなあ！」

「あんた～、何言ってんのさ！」

「いいじゃねえか、魚屋の仕事覚えてえなんて、嬉しいじゃねえか！」

「でもさあ」

「お嬢ちゃん、魚屋の仕事は大変だぞ？ がんばれっか？」

「ハイ！」

「ヒトシ、おまえ、お嬢ちゃんにいろいろおしえてやれ」

「は、はい」

ヒトシくんの方を見ると、ヒトシくんが照れくさそうに笑った。

「お嬢ちゃん、早速ヒトシと一緒に裏から魚持ってこいや」

「はい！ あ... そうだ、あのね、私のことミラって呼んでください」

「え？」

「お嬢ちゃんじゃなくて、ヒトシくんのこと呼ぶみたいにミラって名前呼んでください」

「そうかそうか、おしおし、わかった」

「私も親方とおかみさんって呼んでいい？」

「おっし、今日から俺はミラちゃんの親方だ」

おじさんがニッコニコして言った。

「ちょ、ちょっとお、あんた～、お嬢さんにそんなこと言ってさあ」

おばさん、じゃなくて、おかみさんは戸惑った顔して私と親方の顔をチラチラ見てた。

「おかみさんもミラって呼んでね」

「え...あ...う...うん...」

わーい！ これでヒトシくんと一緒に働けるう♪

裏に積んであるお魚が入ってる箱を、ウンショッ、お、重たい...

「ミラって...」

ヒトシくんが重たい箱二つも持って言った。

「す、すげえ」

「なんで？」

「お、親方やおかみさんに、あんなこと言えるなんて... すげえ...」

ヒトシくんはそう言ってニッコリ笑った。

「だってヒトシくんと一緒に働きたかったんだも〜ん、それに、ヒトシくんの方がすごいよ、こんな重たいの二つも持ちちゃうんだもん」

ヒトシくんは照れくさそうに笑うと箱を持って店の中に入っていった。

私もヨロヨロツとしながらヒトシくんの後ろをついていった。

「いらっしゃいませー！」

「おお、ミラちゃん、元気いなあ」

おじさんが魚おろしながらニッコニコしてる。

だってさあ、お魚の名前、まだぜんぜんわかんないからさあ、いらっしゃいませと
ありがとうございますくらいしか言えないんだもん。

さっきだって、「イサキあるかしら？」なんて聞かれて、「ハア??」だったもんね。
ヒトシくんが、「今日はイサキ入ってないんです」って言ってくれたからよかったけど。

ヒトシくんてすごいよねえ、お魚の名前、全部知ってるんだもん。

チラッチラッてヒトシくんを見るの。だって働いてるヒトシくん、かっこいいんだも〜ん。
ふつうのヒトシくんもかっこいいけどさあ、もっとかっこいいの〜♪ ウフッ♪

あっ！というまに夕方になっちゃった。

いっそがしかったあ！...って、私はたいしたことしてないんだけどさあ。

でも、黙って座ってるだけよりずっと時間がたつのが早かったよお。

「はい、ご苦労さん」

おかみさんがヒトシくんに500円を渡した。

「お嬢、じゃなくて、ミラちゃんも、はい」

おかみさんが100円を私に差し出した。

なんか、なんか、カンゲキー——！

ちゃんと働いてもらったお金だよ————！

「ありがとうございますーす！」

嬉しくて、膝に顔がつくくらいペコッてお辞儀しちゃったよ。

ヒトシくんの家に帰って、ヒトシくんが箱の中に500円を入れる。

「私のもね」

ポトンって箱の中に100円入れて、ヒトシくんを見ると、照れくさそうに微笑んだ。

おじいさんが帰ってきて、おかみさんにもらったアラをヒトシくんが煮たおかずで晩ごはん。

「これってさあ、食べられるなんて知らなかったあ」

私は骨のいっぱいついた身をつまんでみせた。

「捨てるんだと思ってたよ」

「す、捨てる人もいっけど、ほんとはいちばんうめえんだ」

「そうなの？」

「お嬢ちゃんの家じゃアラなんて食わねえじゃろ」

おじいさんがそう言って笑った。

「あ、おじいさん、おじいさんも私のことお嬢ちゃんって呼ばないでね」

「え？」

「昨日ヒトシくんと決めたの、ヒトシくんが私のおにいちゃん、私が妹！

だから、おじいさんは私のおじいさんだよ！ ね？」

「ありゃりゃ、そうかいそうかい、よしよし、ミラちゃんだ」

おじいさんが目を細そ〜くして笑った。

「じ、じっちゃん、ミラ、魚清でもらった金、あの箱に入れてくれてんだ」

「え？」

おじいさんがビックリした顔で私を見た。

「だって、私、ヒトシくんの妹になったから、夏休みの間はここの家族でしょ？」

私を見ていたおじいさんの目が真っ赤になって、涙がブワッて出てきた。

「お、おじいさん、どうしたの？」

「い、いやあ」

おじいさんが目をゴシゴシこすりながら言った。

「ミラちゃんはほんとにいい子だなあ」

「え？」

「ヒトシ、ほんとにいい友だちできてよかったなあ」

「う、うん」

「やだあ！ 友だちじゃないよ！ 妹だよ！」

「そ、そっか」

ヒトシくんが照れくさそうに笑った。

「おじいさん、だから、私は、えっと、おじいさんの孫ね！」

「ウグッ...」

おじいさんはもっと泣いちゃった。

「やだあ、泣かないで」

えっと、あっ！ そうだ！

私はおじいさんの身体を抱っこした。

「ほら、ヒトシくんもやって」

「え？ あ、ああ」

ヒトシくんは戸惑った顔しながら、反対側からおじいさんを抱っこした。

「昨日ね、私が泣いたらヒトシくんが抱っこしてくれたの」

私はおじいさんのこと抱っこしながら言った。

「ヒトシくん、私が泣くといつも抱っこしてくれるの、そしたらね、小さいとき、泣くと、おじいさんが抱っこしてくれたんだって」

そう言ってヒトシくんの顔を見ると、ヒトシくんは照れくさそうな顔した。

「だから、おじいさんが泣いたら私とヒトシくんが抱っこするね」

私とヒトシくんの腕の中のおじいさんの身体は震えて...

「わ...わしゃ...こ...こんな...いい...孫...二人もいて...シアワセだあ」

泣きながらそう言った。

「私もシアワセ～、かっこいいおにいちゃんと優しいおじいさんができたんだもん」

そう言ってヒトシくんの顔見ると、ヒトシくんは照れくさそうに微笑んだ。

おじいさんが泣きやむまで、いつまでもいつまでも抱っこしあってたよ。

お布団に入って、ヒトシくんと半分こずつ枕使って寝た。

「ヒトシくんの家ってさあ、シアワセがいっぱいだね」

「え？」

「だって、ヒトシくんの家にいると、私、シアワセ～って感じることはっかなんだもん」

「マ...マジ？」

「うん、もしかして、青い鳥がいるのかなあ」

「と、鳥は飼ってねえけど」

「ちがうよお、アハハ！ おとぎ話の青い鳥だよお、知らない？」

「し、知んねえ」

「チルチルとミチルってきょうだいだね、あっ、この二人もおにいちゃんと妹なんだけどね」

「うん」

「シアワセの青い鳥を見つけに行くの、いろんなところに、けどね、どこにもいなくて、そして、家に帰ってきたら、青い鳥がいたの、自分の家に、その鳥がいるとね、シアワセになれるんだって」

ヒトシくんは黙って聞いていた。

「バレエにもあるんだよ？ 青い鳥の踊り、私はまだやらせてもらえないけど、
いつかやりたいなあ、青い鳥」

「ミラは... 青い鳥...みてえだよ」

「え？」

「ミラといると...俺...すげえ...シアワセだもん...」

「ほんと？」

「うん」

「嬉しい！」

ヒトシくんにごゅって抱きついちゃった。

「ずっと一緒にいたいなあ」

「うん」

「いれるよね？ 私、ヒトシくんの妹だもん！」

「うん」

「ずーーーーっと一緒にいようね」

「うん」

ヒトシくんと私、ごゅって抱っこしあったまま寝た。

銭湯

フア～～...

眠い目こすって顔洗って、ヒトシくんと一緒に魚清に向かった。

「今日はそうじだけなんだよね？」

「うん、日曜は店は休みなんだ」

「ねえねえ、今日は銭湯に行けるんだよね？」

「うん、おかみさんから金もらったら銭湯行けっからよ」

「わーい！ 銭湯～♪ 楽しみ～♪」

私はルンルンしながらお掃除しちゃった。

おかみさんから、ヒトシくんは500円、私は100円もらって、二人でヒトシくんの家まで走った。

カバンを開けて、えっと、シャンプーとリンスと、ボディソープと...

「ねえ、他に何持っていけばいいの？」

「ん...っと、タ、タオルと...」

「あっ！ バスタオル持ってくるの忘れちゃった！」

「お、俺の貸すよ」

「でも、ヒトシくんはどうするの？」

「じっちゃんの使うから」

ヒトシくんはそう言うのと押し入れからバスタオルを出して、ひとつを私に渡した。

「あ、あとは...」

ヒトシくんは流しの下を開けて、煤けた洗面器を出した。

「これ、俺のだから」

「ありがとう」

ヒトシくんはもう一個煤けた洗面器を出して、セッケン箱をポンと入れた。

「ヒトシくんのシャンプーとリンスは？」

「ね、ねえよ？」

「髪洗わないの？」

「あ、洗うけど」

「何で洗うの？」

「こ、これ」

ヒトシくんは洗面器の中のセッケン箱を指差した。

「セッケンで洗うの？」

「う、うん」

「ダメだよお、髪の毛ガッサガサになっちゃうよお」

「え、あ、で、でも、いつもこれで...」

「私の貸してあげる！ 一緒に使おうよ、ね？」

「えっ？ あ、で、でも、男湯と女湯、分かれてっから...」

「あ... そっかあ、なあんだあ、そうだよねえ」

「う、うん」

「あっ、銭湯っていくら？」

「こ、子どもは250円」

「えっと、お財布...」

カバンの方に行こうとすると、ヒトシくんが腕を引っ張った。

「え？ なに？」

「あ、あの、い、いいから」

「え？」

「せ、銭湯代、お、俺が出すから」

「え？」

「い、行こ」

「でも、その500円はヒトシくんのお小遣いでしょ？」

「う、うん、だ、だから、お、俺が、ミラの分も、出す」

「え〜、悪いよお、だってそれで自転車買うって」

「ミ、ミラは...」

ヒトシくんがボリボリ頭搔いて、

「い、妹だから」

「え？」

「お、俺、に、にいちゃんだから、俺が出す」

「えっ!？」

私、なんか、すっごく、感激しちゃって、

「ヒトシく——ん！」

ヒトシくんを抱きついちゃったあ。

「ヒトシくんて、かっこいい——っ！」

「え、あ、い、行こ」

ヒトシくんは真っ赤になって私の手を引っ張った。

男湯と女湯って書いてる戸の前でバイバイして、ガラガラって中に入った。

高い台の上におばさんが座ってた。

向こう側でヒトシくんが、「ふ、二人分」って500円を出した。

おばさんの陰から手を振ると、ヒトシくんが真っ赤になって奥に入っちゃった。

だ～れもない脱衣室でハダカになって、湯気で真っ白になってる大きな戸を開けると、わあ、ここもだ～れもない。すごーい！ 広ろーい！

向こうの方でカターン、ジャーッて音がするから、見ると、壁の上のところが開いてる。

「ヒトシくーん！」

私の声がお風呂場に響いてオッモシローイ！

「ヒトシくーん！」

「な、なに？」

ヒトシくんの声も響いてる。

「ヒトシくんも一人？」

「う、うん」

「アハハ、二人で入ってるみたいだね」

「う、うん」

えっと、この青いレバーが多分お水だよね、そんでこっちの赤いのがお湯？

グイッ、ジャー――！

「キャー――！」

「ミ、ミラ！ 大丈夫？」

「う、うん、急にお湯が出てきたからビックリしちゃったよ、アハハ」

えっと、最初に髪の毛洗っちゃお！

ずーっと洗ってなかったからベトベトしてたんだもん。

シャンプー2回して、あ――、サ――ッパリ！

それから、リンスで、フフッ、スベスベ～♪

あっ、そうだ！

「ヒトシくーん！」

「な、なに？」

「シャンプーしちゃった？」

「ま、まだ」

「ねえねえ、この開いてるところからシャンプー投げるからさあ」

「えっ？」

「ヒトシくん受け取ってね」

「え、あ、う、うん」

「行くよ？」

「う、うん」

「1、2、のさ――ん！」

ポイッて投げたらシャンプーが向こう側に飛んでった。

バシッてつかむ音がした。

「次はリンスね！」

「え、あ、う、うん」

リンスもポーンって向こう側に飛んでった。

「それで洗ってね！」

「う、うん」

「ママの美容院で使ってるやつなの、フランス製なんだって！」

「す、すげえ」

「髪の毛サラッサラになるからね！」

「う、うん」

ボディークリームで身体をゴシゴシ。

ハァ〜、サーッパリするう。

ずーっとお風呂入ってなかったから身体ベトベトだったんだもん。

顔も洗って湯気で曇った鏡をキュッキュッとこすって見ると、

ウフッ♪ツヤツヤお肌〜♪

「ヒトシくん！」

「な、なに？」

「私、お風呂に入るね！」

「う、うん」

大きなお風呂に足を入れた...ら、

「アツツー〜イ！」

「ミ、ミラ！ だ、大丈夫？」

「なんかすごい熱いよ、これ？」

「そ、そこんところに蛇口ある？」

「え？ あ、うん、ある」

「それ水だから」

「うん、わかった！」

ジャーッとお水出してたら、今度は入れそう。

となりでジャボンってヒトシくんがお風呂に入る音がする。

ポコポコ出てくる泡で身体がユラユラ揺れるよ。

広いお風呂の中を、な〜んとなく歩いてみたり、ちょっと泳いでみちゃお！

楽し〜い！

「ミ、ミラ？」

「なあに？」

「お、俺、もう上がっから」

「うん、わかったあ」

目をつぶってユラユラして... フウ～... 気持ちいいなあ。
なんかポッポッしてきちゃった。私も上がるっと。

お風呂から上がって、横の大きな鏡を見ると、全身真っ赤で、アハハ、湯気が出てるう。
ロッカーの中からヒトシくんが貸してくれたバスタオルを出して、
このバスタオル、すりきれて、ところどころ向こうが透けて見えるよ？
これでいっつもヒトシくんが身体拭いてるのね、エヘヘ、私ってエッチかなあ、ウフッ。

着替えのジャージ素材のワンピース着て、髪の毛どうしよう、帰ってから乾かせばいいね。
ドライヤー持ってきたし。濡れたままの髪をポニーテールにして、
「さようなら！」
番台のおばさんに声かけて外に出た。

ゲタ箱で靴を履いてると、玄関の外にヒトシくんの後姿が見えた。

「ヒトシく〜ん」

駆け寄るとヒトシくんが振り向いた。

ドッキー————ン！

まだ濡れてる髪が後ろに流れて...顔がハッキリ見えた。

いつも汚れてた顔が...今は白くて...ハッキリ見えて...すっごいきれいな顔！

こ、こ、こんなにきれいな男の子って見たことないよお！

かっ...こ...いい————っ！

あんましかっこよくて、私、ポッカーンって口開けて見ちゃった。

「ど、どしたの？」

私の顔覗き込むヒトシくんの目...

青い... すごく深いきれいな青... お日様の光でキラキラ透明に輝く青...

「ヒトシくんの目... ほんとにきれいな青...」

「えっ」

ヒトシくんはギョツとした顔して下向いた。

「ねえ、見せて」

ヒトシくんの顔覗き込むと、ヒトシくんはくちびる嚙んで目を伏せた。

「ねえ、見せてよお」

「や...やなんだ...俺...この目...」

「どうして？」

ヒトシくんは上目遣いにチラッとだけ私を見ると、また目を伏せた。

「この...目...小せえときから...キモチ悪りいって...いじめられて...」

「ウッソー！ キモチ悪くなんかないよお！」

ヒトシくんが「え？」ってカンジで顔あげた。

「すっごいすっごーいきれいだよ？」

ヒトシくんは戸惑った顔してるけど、

「私、好き、すっごい好き、ほんとにきれいなんだもん」

「キ、キモチ...悪く...ねえ？」

「ないよお！ ねえ、ちゃんと見せて」

ヒトシくんはちょっと困った顔して、それでもちょっとだけこっち向いた。

私はヒトシくんの顔に顔を近づけて、ジッとヒトシくんの目を覗き込んだ。

「ほらあ、きれい、すごい深く青で、お日様の光でキラキラしてるの」

ヒトシくんは恥ずかしそうにまた目を伏せた。

「やだあ、ちゃんとこっち見てよ」

ヒトシくんがゆっくりと目を上げる。

吸い込まれちゃいそうなほどきれいな青い瞳が私を見てる。

「あ... ヒトシくんの目の中に...私が映ってる...」

私は深い青い瞳の中に映る自分の顔を見つめた。

「なんか...私がヒトシくんの青い目の中に入ってるみたい、フフツ」

ヒトシくんが照れくさそうにちょっとだけ微笑んだ。

「私...今...ヒトシくんの目の中にいるんだね...」

私はウツリって青い瞳の中に映る自分の顔を見て...

「きれいな青い目の中に...この中にずっといれたらいいなあ」

ヒトシくんがちょっと驚いた顔で私を見てた。

「ヒトシくんが私のこと見てるときは、私、このきれいな青の中にいれるね」

「え？」

「だから、いつも私のこと見ててね」

「あ... う、うん」

ヒトシくんは照れくさそうに微笑んだ。

「あっ」

前髪が上がってるヒトシくんのオデコに傷痕。

「あのときの傷だよね」

指でそっと傷痕をなぞると、あのときのこと思い出して胸がギュツとした。

「ごめんね」

「お、俺の勲章なんだ」

ヒトシくんはそう言って、ちょっと照れくさそうに笑った。

「私、ヒトシくん、大好き」

ヒトシくんの手をギュツてにぎった。

「ヒトシくんの青い目も大好き、ヒトシくんのぜーんぶ大好き」

そう言ってヒトシくんの顔を見ると、ヒトシくんは真っ赤になって、

「お、俺も、ミ、ミラが、す、好き、すげえ、好き」

そう言うと、私の手をギュツてにぎりかえした。

ヒトシくんの家に帰って、ドライヤーで髪の毛を乾かした。

濡れてた髪がサラッサラに変わってく。

ン？ ヒトシくんがジューッとこっち見てるよ？

ドライヤーのスイッチ切って、

「なあに？」

「え、あ、な、なんでもねえ」

ヒトシくんは真っ赤になって下向いた。

「ヒトシくんも使う？」

ドライヤー差し出すと、

「あ、う、ううん」

「乾かさないの？」

「う、うん、そ、そのうち乾くから」

「ダメだよお、そのままにしてたらピンピンはねちゃうよ」

私はヒトシくんの手を引っ張ってドライヤーのそばに座らせた。

「私が乾かしてあげるう」

「え、あ、い、いいよ」

「大丈夫だよお、私、上手なんだから、友だちのシニョンだってやってあげるんだよ」

「し、しによ？」

「おだんご、バレエやるときにこうやってやるの」

乾きたての髪の毛を後ろで丸めてみせた。

「だから大丈夫！」

ドライヤーのスイッチ入れて、濡れてるヒトシくんの髪に指を入れと、ドライヤーの熱で、フワ〜ッとリンスの香りがしてきた。

「ウフフ、私とおなじ匂い」

「え？」

「ほら、私のおなじ匂いだよ」

ヒトシくんの顔の前に頭を出した。

「す...すげえ...いい匂い...」

「ヒトシくんもおなじ！ おなじシャンプーとリンス使ったもんね」

ヒトシくんが照れくさそうに微笑んだ。

ブラシを使いながらヒトシくんの髪を乾かしてくと、先っぽがクルンって可愛いっ！

「ヒトシくんの髪ってクセ毛だよね」

「う、うん」

「この茶色いのははじめから？」

ヒトシくんはチラッと私の顔見て下向いた。

「ち...小せえときは...もっと...茶っぽかった...」

「え？ 色が変わったの？」

「う、うん」

「いいなあ、私なんて、ずーっと黒だもん」

「ミ、ミラの髪... すげえ... きれいだよ」

「え？ や〜ん、ヒトシくんたら〜ん♪」

パシッとヒトシくんの肩叩いたら、ヒトシくんも照れくさそうに微笑んだ。

「はい、で〜きた！」ってヒトシくんの顔覗いたら、

わっ... す...すごい... カッコいい...

いつもモッテリしてグシャクジャだった髪がサラサラって後ろに流れてて、

先っぽだけクルンっはねてるのが可愛くて、いつも顔にかかっている前髪も後ろに

流したから、きれいな青い目が見えて...

「ヒトシくん... モデルみたい...！」

「え？」

「すごいきれいな顔！」

首から下は、いつものポロっちいTシャツだけど、首から上だけ見たら雑誌のモデルみたい！

「いつもこうしてたら、ぜったいモテるよお？」

ヒトシくんは困ったみたいな顔して下向いた。

「大きくなったらモデルになればいいのに！ ママのお店に飾ってるモデルの写真より、

ヒトシくんの方がぜったいカッコいいもん！」

ヒトシくんきボリボリ頭を掻きながら、

「お...俺... さ、魚屋になりてえてんだ」

「え？ 魚屋さん？」

「う、うん」

「すごーい！ なれるよ、ぜったい！ ヒトシくん、魚の名前なんでも知ってるし、

魚だっておろせちゃうし、ぜったいなれるよ！」

ヒトシくんは嬉しそうに微笑んだ。

「そしたら、私も手伝う！」

「え？」

「だって、私、ヒトシくんの妹だもん！」

ヒトシくんはちょっと照れくさそうに微笑んだ。

「私はね、バレエの先生になりたいの」

「す、すげえ」

「なれるかわかんないけどさあ、でも、なりたいんだあ、だから、ヒトシくんの魚屋さんを手伝

って、

そのあとバレエ教えるの！ いいと思わない？」

「う、うん」

「ウフッ、楽しみ〜♪」

ヒトシくんもニッコリ笑った。

「あっ、そうだ！」

私は銭湯に行く前に着てた短パンのポケットから100円を出した。

「ねえねえ、ヒトシくんの自転車の缶出して」

「え？ あ、う、うん」

ヒトシくんが押し入れから缶を取り出した。

私は朝おばさんにもらった100円をカチャンで中に入れた。

「え？ な、なんで...」

ヒトシくんはわけわかんないって顔で私を見た。

「ヒトシくん、私の銭湯代払ってくれたでしょ？ だから、これは自転車の貯金に入れるの」

「えっ、んな、い、いいよ」

「私も乗りたいもん」

「え？」

「私も自転車持ってないの、ママがダメって」

「マ、マジ？」

「うん、だから、ヒトシくんが自転車買ったら私も乗せてくれる？」

「う、うん」

「だから、二人で貯金しようね」

私を見ていたヒトシくんの目のまわりが真っ赤になった。

「どうしたの？」

ヒトシくんは首を振りながら目をゴシゴシこすった。

「私、なんか悪いこと言っちゃった？」

ヒトシくんは首を振りながら、まだゴシゴシ目をこすってる。

「目が痛いの？」

ヒトシくんは黙って首振った。

「大丈夫？ 見せて？」

私はヒトシくんの手をむりやり外して顔を覗き込んだ。

「え...？」

長いまつ毛が濡れてる。

「ヒトシくん... 泣いてたの？」

「こ、こすったから...」

「なんだあ、アハハ」

私が笑うと、ヒトシくんも濡れたまつ毛のままでちょっと微笑んだ。

「ねえ、ヒトシくんの目... 見せて」

私はヒトシくんの顔を覗き込んだ。

「きれい」

にっこり笑ってる私が映ってる。

「ほらあ、また私が中に入ってるよ」

ヒトシくんも照れくさそうに笑った。

「ミ、ミラの目ん中にも、お、俺が映ってる」

「ほんと？」

「う、うん」

「じゃあ、ヒトシくんの中に私がいて、私の中にヒトシくんがいるんだね」

「う、うん」

「なんかシアワセ〜♪」

「う、うん」

二人で、私はヒトシくんの、ヒトシくんは私の目の中を見つめあっていた。

招来の夢

8月も半分過ぎて、私はヒトシくんの家が自分の家みたいに思えてきたよ。

魚清の仕事もすっかり慣れて、お魚の名前もだいぶ覚えたし、

ほら、お魚だって触れるよ？ シッポつかむだけだけど…。

お風呂が一週間に一度しか入れないのにも慣れた。

でもね、掃除が終わった後、ヒトシくんとホースで頭から水浴びするの。

二人で水かけっこしてビッチャビチャになって笑っていると、

おかみさんが「あれれえ、何やってんのさあ」って呆れてるけど、

プールで遊ぶより楽しいよ。

お日様に向かってホースの水シャーッと流すときれいな虹ができて、

二人でずーっと見てるの。

こんな楽しい夏休みって初めてだよお！

あ…

夏休みの自由研究があったんだあ！

てことで、吉崎ミラ、自由研究やりまーす！

お魚は季節によって違うものが入ってくるんだって。知らなかったあ。

春のお魚、夏のお魚、秋、冬って、親方が教えてくれたよ。

ヒトシくんたらね、全部知ってたの！　すごいよね！

あとは魚屋さんの一日の仕事の紹介。

「字だけじゃなくてさあ、やっぱ絵も描いた方がいいよね」

「え？　あ、お、俺、絵はあんま…」

「私もお、どうしよう」

あっ！

「写真は？」

「しゃ、写真？」

「うん、写真貼って、その横に説明書くの！」

「あ、う、うん」

「でも、カメラないよ、ヒトシくん持ってる？」

「ね、ねえよ」

なんて、お店で話してたら、

「なんだ、写真撮りてえのか？」って、親方がお刺身作りながら言った。

「うん、だけどカメラがないから」

「使い捨てならうちにあるんじゃないか？」

親方が、横で刺身をお皿に並べてたおかみさんに言った。

「あるある、あるよ、ほら、あんたがカラオケ大会の残念賞でもらったやつがさ」

「残念賞は余計だろがっ」

おかみさんが二階から使い捨てのカメラを二つ持ってきてくれた。

「どうせうちじゃ使わないからさ」

そう言って二つとも私にくれた。

わーい！

私はカメラマンみたいにバチバチ撮りまくった。

お客さんに買ったお魚包みを渡してるおかみさん。 カシャッ。

「あ、ミラちゃん、いやだよお、おばさん化粧してないんだからさあ」

「平気だってば、おかみさんきれいだよ」

「ウホホホ、ミラちゃんたら、やだよお、ウホホホホ」

魚をさばいてる親方。

「あ、親方ったらあ、ピースしちゃダメだよお、お魚さばいてるところ撮りたいんだからあ」

「そ、そっか、そんじゃあ、こうか？」

「こっち見ないでお魚見てってば」

「なんだよなあ、おじさんの顔もちゃんと写してくれよお」

店の奥で残飯の入ったバケツ運んでるヒトシくん。

「ヒトシくーん、こっち向いて」

ヒトシくんはギョツとした顔して、すぐ下向いちゃった。

「やだあ、ちゃんとかっち見てよお」

「お...俺...写真... き、嫌れえなんだ」

ヒトシくんは下向いたまま言った。

「そんなこと言わないでよお、私たちの自由研究のためなんだからあ」

「え... あ... あの... フラッシュ...やなんだ...」

「でも、ここだとフラッシュやらないと暗くて映んないよ」

「フ、フラッシュやると...目え赤く映って...キモチ悪りいから...」

「え？　なんで赤くなるの？」

ヒトシくんがチラッと目を上げた。

「お、俺... 目の色...薄いから... そ、そうなるみてえで...」

「そっかあ」

てことで、ヒトシくんの写真は裏でバケツ洗ってるよ。

「ヒトシくんたらあ。下ばっか見ないでよお」

ヒトシくんは真っ赤になって下向いてば〜っか。

実はね、ムフツ、私、自由研究ってこともあるけど、ヒトシくんの写真が欲しいの。

だって、ほら、カメラから見るヒトシくん、雑誌のモデルみたいなんだもん。

カメラから見なくてもかっこいいけどさ、横顔とか、絵になってるよお。

「ヒトシくんがアルブレヒトだったらなあ」

ヒトシくんをカシャッて撮りながら思わず言っちゃった。

「な、なに？」

「秋にね、コンクールがあるの、私はジゼルの第一幕のバリエーションやるの」

ヒトシくんはキョトンとした顔でこっちを見た。

「ジゼルって村娘がいてね、アルブレヒトって男の人に恋をするのね、

その第一幕のバリエーションは恋してるジゼルの踊りなんだって」

「へ、へえ」

「先生がさあ、ミラちゃん、もっと感情出さなきゃダメよ、恋してるんだからねって、

いーっつも叱られるんだけどさあ、アルブレヒトなんて知らないもん」

ヒトシくんは掃除しながら笑ってた。

「でも、ヒトシくんがアルブレヒトならウツトリ〜って踊れるかも！」

「えっ？」

ヒトシくんが真っ赤になって私の方を見た。

「あっ、でも、ダメだあ、私、ヒトシくんの妹だもんねえ」

「え、あ、う、うん」

「妹はおにいちゃんに恋しないもんねえ」

「う...うん...」

ヒトシくんは真っ赤な顔のままチラチラ私を見ると、また下向いて掃除してた。

そっかあ、妹って...いいけどお、よくないかもお。

「ほれ、ヒトシ、これつける」

親方が自分のゴムのエプロンをヒトシくんの首からスポッてかぶせた。

「ほれ、おめえのミラちゃんに貸してやれ」

親方はおかみさんにそう言って、大きく股を広げてカメラをかまえた。

「な〜にやってんのさあ、プロのカメラマンみたいにさあ」

おかみさんは笑いながら私の首におかみさんのゴムのエプロンかけてくれた。

「やっぱ写真は構図が大事だからな」

「な～にが構図だよ、知りもしないくせにさ」

「うっせえな、おまえは黙ってる」

魚清の看板の前で私とヒトシくんの写真を撮ってって頼んだら、親方はりきっちゃったの！

「ヒトシ、ミラちゃんの肩に腕まわせ」

「え、あ、は、はい」

「二人とも片方の手はこうやって腰に当てて、もっと胸はって！」

「あなた、いったい何が撮りたいのさ？」

「タイトルは小さな魚屋さんだ！」

「ブツ」

おかみさんが吹きだすから、私もヒトシくんも笑っちゃった。

「おお！ いい顔だ！」 カシャッ！

次の日には写真ができてきて、模造紙のいちばん上に「魚屋の仕事」って書いた。

写真を朝から夕方まで順番に並べて、その横に説明を書いていく。

「え～っと、これって、親方がどこから帰ってきたとこだっけ？」

「河岸」

ヒトシくんは聞くとなんでもスラスラ答えてくれた。すごいよお。

2枚目には「季節の代表的なお魚」を書いて、親方の「魚清のこだわり」の話と、おかみさんの「魚屋の苦労話」、あとはヒトシくんと私の感想を書けば終わり！

「か、感想...って」

ヒトシくんが戸惑った顔で私を見た。

「だから、そうだなあ、魚屋さんで働いてる感想？」

「べ、べつに、なんも...ねえよ」

「それじゃ自由研究にならないよお」

ヒトシくんは困った顔してチラチラ私を見た。

「あっ！ そうだ！ ヒトシくん、魚屋さんになりたいんでしょ？」

「う、うん」

「それ書けばいいよ！」

『おれは、おとなになったら魚屋になりたいです。』

「次は私ね！」

『私は夏休みの間、ヒトシくんと一緒に魚清で魚屋の仕事をしました。』

最初はお魚の名前もわからないし、お魚にさわれませんでした。

でも、ヒトシくんや親方やおかみさんに教えてもらいました。

はたらいてお金をもらうのは大変だけど、うれしいってこともわかりました。
ヒトシくんは、自分が働いたお金を電気代とかそういうのに入れてます。
ヒトシくんはえらいなあと思います。
魚清で働いて、ヒトシくんと一緒に働いてよかったなと思いました。
いつかヒトシくんが魚屋さんになったら、みんな買いに来てください！』

「な、なんだ、こ、これ？」
ヒトシくんが真っ赤になった。
「CM！ 今から宣伝しとけばお客さんがいっぱい入るよ！」
そうそう、親方とおかみさんにも見せなきゃ！

「おお、立派なもんだな、こりゃすげえや」
親方がニコニコしながらほめてくれた。
「まあまあ、こんな立派に書いてくれるなんてねえ」
おかみさんもニコニコしてる。
「おい、見ろよ、俺の撮った写真、小さな魚屋さん、いい写真じゃねえか」
「あらあら、ほんとだ、二人ともいい顔して笑ってるよ」
「やっぱ俺の腕がいいんだなあ」
「な～に言ってんだよ、バカでも写せるからバカチョンってんだろ？」
「ったく、口がへらねえ女だな」
オヤジさんはチエツて顔しておかみさんを見て、また写真を見てニコニコ顔に戻った。
「そうか、ヒトシは魚屋になりてえのか」
「は、はい」
「おめえならなれっかもしれねえぞ」
「ほ、ほんとっスか？」
「おう、なんなら俺の跡継ぎになるか？ ワッハッハッ」
「え？」
「また、あんたったら安請け合いちゃってさ」
おかみさんが呆れた顔して言った。
「いいじゃねえか、どうせ俺たちにや後継ぎがいねえんだからよ」
「そりゃそりうだけどさあ」
「ヒトシなら、このまま魚清の仕事してりゃいい魚屋になれっかもしんねえよ」
ヒトシくんがポカンと口開けて親方を見てた。
「だ～れが本気で魚屋なんかになりたいもんかね」
おかみさんがそう言って笑った。
「中学くらいになったら、もっとカッコいい仕事したくなるにきまってんだからさ」

「お、俺、マ、マジで魚屋になりたいっス」

真剣な顔で言うヒトシくんを、親方とおかみさんがビックリして見てた。

「こ、ここで、は、働いて、お、俺、すげえ、さ、魚屋になりたいくて、あの...」

ヒトシくんはそこまで言うと急に真っ赤になって下向いた。

「そうか」

親方がニッコ笑った。

「そんじゃ、中学卒業して、そのときも本気で魚屋になりたかったら、俺んどこに来い」

「マ、マジっスか？」

「ああ、ただし、そんなときゃ、もっと厳しくすっからな、覚悟しとけよ」

「は、はい！」

ヒトシくんは泣きそうな顔してうなづいた。

すごーい！ ヒトシくん、ほんとに魚屋さんになれるんだあ！

「ミラちゃんは大きくなったら何になりたいんだい？」

おかみさんが私の方を向いて言った。

「ミラちゃんならいいお家のお嫁さんかね？」

「ううん、私、バレエの先生になりたい」

「あらあ、すごいねえ、バレエなんてさあ、女の子だねえ」

「それでね、昼はヒトシくんの魚屋を手伝うの」

「え？」

「ヒトシくんと約束したの、昼はヒトシくんの魚屋を手伝って、夕方はバレエの先生」

「そりゃいいや！」

親方がニッコニコして言った。

「将来ヒトシとミラちゃんが結婚して魚清やってくれたら言うことねえや」

ケッコン？

ビックリしてヒトシくんの顔見たら、ヒトシくんは真っ赤な顔してチラッと私を見た。

「あんた、何言ってんのさ！吉崎さんのお嬢さんなんだよ！」

「いいじゃねえか、本人がやりてえつつってんだからよ」

「そりゃ子どもだからさあ」

「ほれ、この写真なんざ小さな魚屋の夫婦みてえじゃねえか、なあ」

「バカ言ってんじゃないよ、まったくさ」

そうかあ！ ずーっと一緒にいれるのは妹じゃなくてもいいんだあ！

ケッコンすればいいんだあ！

チラッとヒトシくんの顔見ると、ヒトシくんは真っ赤になって下向いたまま。

ヒトシくん、私とケッコンしてくれるかなあ？

ケッコンてさあ、すごい好きな人とするんでしょ？

私はヒトシくんのこと、すごい好きだけど、ヒトシくんはどれくらい好きなのかなあ？

ケッコンより、やっぱ妹の方がほしいのかなあ？

真っ赤なヒトシくんの横顔見ながら...

私... 妹より... ヒトシくんとケッコンしたくなっちゃったよ。

ドドーンと花火が上がる音。

「おお、今日は宵宮か」

親方が魚さばきながら言った。

「早いもんだねえ、もうすぐお盆だよ」

お刺身のお皿並べながらおかみさんが言った。

「ガキの頃は縁日ってえとすっ飛んでったなあ」

「そうそう、私なんてさあ、ハツカ飴が好きでさあ」

親方とおかみさんったら二人で盛り上がってるよ。

「ミラちゃんも縁日には毎年行ってんだろ？」

「ううん」

「行ったことねえのかい？」

「うん、ママがダメって言うの」

『あんなとこ、ガラクタと不潔な食べ物しかないわよ！』

いっつもそう言って行かせてもらえないんだよお。

「そりゃかわいそうになあ」

親方がそう言って顔をしかめた。

「やっぱり金持ちん家はちがうのかねえ」

おかみさんは感心したように言った。

「んなこと言ってもよ、子どもは縁日好きだろうによ」

「そりゃそうだけどさあ、やっぱり私たちとはちがうんだよ」

「でもよ、ミラちゃん、縁日行きたくねえのかい？」

「行ってみた〜い」

「だよなあ」

親方はニッコリ笑うと、

「ヒトシ！」

裏にいるヒトシくんを呼んだ。

「は、はい」

ヒトシくんが奥から走ってきた。

「裏の掃除終わったら、今日はもういいから、ミラちゃんと縁日行ってこい」

「え？」

ヒトシくんがポッカーンとした顔で親方を見た。

「おまえもずっと行ってねえだろ、二人で行ってこいや」

私とヒトシくんは顔見合わせた。

ヤッター——！

私はもう早く行きたくてウズウズして、ヒトシくんの掃除手伝った。

「私、縁日行くのって始めて～♪」

ルンルンしながらデッキブラシ動かした。

「ヒトシくんは？」

「お、俺は、小せえ頃じっちゃんに連れてってもらったことあるけど」

「いいなあ、私なんて一回もないよ、すごく行きたかったの、

去年ゆう子ちゃんが縁日で買ったって指輪を見せてくれたの、

キラキラしてて、すごくきれいで私もほしいなあって思ってたんだあ」

私ったら興奮しちゃってペラペラおしゃべりになってるよ。

「縁日ってさあ、いろんなものが売ってるんだって、綿アメとか、おもちゃとか、花火、

ヒトシくん、花火やったことある？」

「ね、ねえよ」

「私もお、ママが火なんか使ったら火事になるって言うの、

だったら一緒にやってって言ったら忙しいからダメって」

「は、花火、やりてえ？」

「やりたいけどお、子どもだけでやっちゃダメって夏休みの注意に書いてたもんね」

「じっちゃんいるからできるよ」

「あっ、そっか！ やろやる！」

「う、うん」

嬉しくて、いつもの百倍早く掃除が終わっちゃった。

「お、親方、掃除終わりました」

二人で親方のところに行くと、親方がニコニコしながらおかみさんに言った。

「おい、二人に200円ずつ持たせてやんな」

「でも、いいのかねえ、奥さんがダメって言ってんのにさあ」

「だまってりゃいいじゃねえか」

おかみさんが困った顔でチラッと私を見た。

「大丈夫！ 私、ぜーったい内緒にするから！」

「そうかい？ まあ、いいけどさあ、危ないところ行くんじゃないよ？」

「はい！」

「ほれ、さっさと200円やんな」

「けど、あんた、今どき200円じゃ何も買えないよ？」

「アンズ飴くれえ買えっだろ」

「アンズ飴なんて今は売ってないよ、あんたも古いねえ」

おかみさんは笑いながら、お金の入ったザルに手をつっこんだ。

「まあ、今日のお駄賃もあれば足りるね」

おかみさんはそう言って、ヒトシくんいつもの500円と200円、

私にいつもの100円と200円を渡した。

「す、すみません」

ヒトシくんがペコペコ頭下げて、

「ありがとう！」

私が飛び上がって喜んで、

「ほら、早く行ってきな、終わっちゃうぞ」

親方に言われて店を飛び出した。

途中でヒトシくんの家の前に来たとき、

「ミ、ミラ、ちょっと待ってて」

ヒトシくんはそう言って家の中に入っていった。

「どうしたの？ 忘れ物？」

「え、あ、う、うん、いつもの金、置いてきたんだ」

「あっ、私も置いてこよう！」

中に入ろうとする私の腕をヒトシくんがつかんだ。

「い、いいから、早く行こう」

「え？ あ、うん」

あとでいっか！

それより早く縁日～♪

すっごーい！

沿道の両脇にちょうちんがいっぱいぶら下がってて、わあ、きれ～い！

神社の中からピ～ヒャララって聞こえて、人がいーっばいいて、

屋台もズラーッと並んで、目がチカチカしちゃう。

「あ・あ・あ」

ま、前に行こうと思っても人に押されて、う、後ろに下がっちゃううううう。

「ミラ！」

ヒトシくんがあわてて私の手を引っ張ってくれた。

離れないように手をつないで歩いてると、私たちの前のおにいさんとおねえさんも手をつないでた。

耳元でコシヨコシヨ話したり、突っつき合ったり、あっ、キ、キスしたあ！

「ヒトシくん」

私はヒトシくんの耳に小さいな声で言った。

「前の人たち、キスしたよ」

「え？」

二人で見ていると、またチュッてキスした。

ヒトシくんと二人で顔を見合わせてクスクス笑った。

「恋人かなあ？」

またヒトシくんの耳元で小さな声で言うと、

「さ、さあ」

ヒトシくんは首をかしげるけど、

「恋人だよお、じゃなきゃキスしないでしょ？」

「あ、ああ」

ヒトシくんはちょっと赤くなってうなづいた。

「私たちってさあ、何に見えるのかなあ？」

「え？」

「こうやって手をつないで歩いてるとさあ、何に見えるのかなあ？」

「さ、さあ」

「きょうだいに見えるかなあ？ でも、顔似てないから見えないよねえ」

「う、うん」

「友だちかなあ？」

「う、うん」

「そう...だよねえ」

なんか... つまんない... ただの友だちじゃないのさあ、私はヒトシくんの妹で、ヒトシくんは私のおにいさんで、そういう約束して、でも、ほんとはちがって、だから、やっぱ、ただの友だちにしか見えないのかなあ。

「ミ、ミラ、こっち」

ヒトシくんが私の手を引っ張って、おもちゃ屋さんの前で立ち止まった。

「ほ、ほら」

ヒトシくんが指差した先に、

「あっ！ 指輪！」

赤やピンクや緑やいろんな色や形の指輪がいーっばいあるう！

「うわあ、きれい」

私はしゃがんで指輪を見た。

「あ、これ、ゆう子ちゃんが持ってたのと同じだあ」

ピンクの石のついた指輪を手にとってみたけど、う〜ん、ちょっとなあ。

一個一個見ていたら、透きとおってキラキラしてる青い石の指輪があった。

「これ！ これがいいなあ、すごいきれい！」

指にはめてお店の電灯にかざして見るとキラキラ光ってる。

「これにしよっと！」

立ち上がって店の奥に座ってるおじさんに差し出した。

「これくださ〜い」

「あいよ、500円ね」

「え？」

どうしよう、300円しか持ってないよお。

あ〜あ、ダメだあ。

「やっぱりいいです」

シュンとして指輪を箱に戻そうとすると、ヒトシくんが私の手から指輪を取った。

「おじさん、これ買う」

え？

「あいよ」

「ヒ、ヒトシくん、これ500円だよ？」

ヒトシくんはチラッと横目で私を見ると、ポケットから100円玉2枚と、10円や5円や1円をいっぱい出して数え始めた。

「200...15...50...75...97...8、9、10で300で... 500円」

手にいっぱいのお金をおじさんに差し出した。

「こりゃまた細けえなあ」

おじさんは渋い顔してそう言いながら、ヒトシくんからお金を受け取って数えなおした。

「500と、あいよ」

そう言ってジャラジャラッと箱の中に入れた。

ポッカーンとしてヒトシくんの顔見てると、

「はい」

ヒトシくんが指輪を私にくれた。

「え...あ...うん...あの...」

ボーッとしてる私の手をにぎって、ヒトシくんは店を離れた。

「ヒトシくん... さっきのお金って、どうしたの？」

ヒトシくんはチラッと私を見て、

「俺の小遣い」

「え？」

「ミラが... 指輪ほしいつってたから... 家から持ってきた」

ヒトシくんはそう言いながら照れくさそうに頭を掻いた。

「でも、あのお金、自転車買うお金でしょ？」

「また貯めっから」

ヒトシくんはそう言ってニッコリ笑った。

「でも、えっと、あっ、そ、そうだ、これ」

私はヒトシくんにおかみさんからもらった300円を差し出した。

「今これしかないから、お家に帰ったらあと200円返すね」

「いらねえよ」

「でも、自転車...」

「お、俺、ミラに指輪買いたかったんだ」

ヒトシくんはチラッと私を見ると恥ずかしそうに下向いた。

私... なんか... すごく... カンゲキしちゃって... だって... だから...

「私、ヒトシくんの妹やめる！」

「えっ？」

ヒトシくんがビックリした顔で私を見たけど、

「私、ヒトシくんの妹じゃなくて、お嫁さんになりたい！」

「えっ？」

「だって妹だったらケッコンできないもん！ 私、ヒトシくんとケッコンしたい！」

ヒトシくんはビックリした顔のまま、パーーッと真っ赤になった。

「ヒトシくんとケッコンして、魚屋さん手伝う！」

「マ、マジ？」

「うん！」

ヒトシくんは真っ赤な顔のまま、チラチラ私を見て...

「ヒトシくんはイヤ？」

「俺...あの...俺...」

ヒトシくんはボリボリ頭掻いて、

「す、すげえ...すげえ...俺...う、嬉しい」

「ほんと？」

「うん」

ヒトシくんは真っ赤な顔のまま照れくさそうに笑った。

「それじゃ約束ね！」

小指を出すと、ヒトシくんも小指を出した。

「指きりげんまん、ウソついたら... えっと、絶交！」

「え？」

「だから、ウソついちゃダメだよ」

「うん」

「あっ！ これ！ 婚約指輪にしようよ！」

「え？」

「ケッコンの約束したら男の人が女の人に指輪をあげるんだって」

「そ、そっか」

「ねえねえ、はめて」

「う、うん」

「ここだよ、左の薬指」

「う、うん」

ヒトシくんがゆっくりと私の指に指輪をはめてくれた。

「ウフフ」

私は指輪を街灯にかざして見た。

「これね、ヒトシくんの目の色に似てるの」

「え？」

「だからほしいなあって思ったんだ」

そう言って笑うと、ヒトシくんは照れくさそうに私を見てた。

「ほんとはヒトシくんの目の方がずっときれいだけど、外して指輪にできないもんね」

「アハハ」

「だから、これはヒトシくんの目のかわり！ それと婚約指輪！ 大切にするね」

「う、うん」

「ありがとう！」

「う、うん」

ヒトシくんは照れくさそうに横向いて、私の手をギュッてにぎった。

私の300円で花火を買って、手をつないで家に帰った。

コンクール

夏休みが終わった。

こんなに楽しかった夏休みって始めて！
だから、終わっちゃって、すごく悲しかったよ。
おじいさんは「冬休みも泊まりにおいで」って言ってくれた。
うん、絶対そうする！
それに... ウフフッ、大きくなったらずっと泊まれるんだよね。
だって、ヒトシくんと私は婚約したんだも〜ん。

ママはニューヨークから帰ってきた。
吉田さんも、また毎日来てる。
私がヒトシくんの家に泊まったことはママには内緒だから、
楽しかったこととか言えなくてウズウズしちゃうよ。

そうそう、夏休みの自由研究！
なんと金賞取ったんだよ！　すごいでしょ！
朝会するとき、ヒトシくんと私、校長先生に賞状もらったの。
ヒトシくんたら真っ赤な顔してちょっと震えてた、ウフッ。
魚清の親方とおかみさんにも見せたら、すごい喜んでたよ。
おかみさんなんか涙流しちゃったもん。

な〜んて、ひたってばっかいられないんだ。
もうすぐバレエのコンクールがあるの。
先生はね、「今回は賞を取れるかもよ」って言ってくれてるの。
取れたらいいなあ。
あのコンクールで賞を取ると、小さくて可愛いペンダントのメダルがもらえるの。
先輩たちの見てて、いつか欲しいなあって思ってたんだ。
それにね、もし賞を取れたら...　ウフフ、まだ内緒♪

コンクールの一週間前の日曜日の夕方。
私はヒトシくんを引っ張ってレッスン場に連れてきた。
「い、いいの？　お、俺、こんなとこ来て...」

ヒトシくんはおどおどしながら教室に入った。

「いいのいいの、先生に頼んで使わせてもらえることになったから」
私は教室の大きな鏡のまん前に椅子を出してヒトシくんを座らせた。

「ちょっと待っててね」

更衣室に入って、いちばんいいレオタードとシフォンのスカートに着替えた。

更衣室から出てくると、ヒトシくんが目を丸くして私を見た。

「ほんとはね、衣装着てやりたかったんだけど、まだ渡ってないからさあ」

「な、なに、やるの？」

「ウフフ、ジゼル」

「え？」

「コンクールでやるバリエーション、ヒトシくんに見せたかったの」

私はストレッチしながら言った。

「だって当日は見せられないから、見てほしかったんだ」

ヒトシくんの方を見ると、ヒトシくんはまだわけわかんないって顔してた。

「私の踊り、見たい？」

「う、うん、見てえ」

「私、今度のはぜったい賞を取りたいの、だから、けっこうがんばったし、
ヒトシくんにはぜったい見てほしかったの」

ヒトシくんは照れくさそうに微笑んだ。

音楽が流れて...

私は、ジゼルはアルブレヒトに、はにかみながらお辞儀して、
恋するウキウキワクワク、喜び、シアワセを踊る。

私、今ならジゼルの気持ちがわかる！

だってヒトシくんが大好きだもん！

こんなにシアワセなら踊りたくなっちゃうよ！

音楽が終わって、私はヒトシくんにゆっくりとお辞儀した。

ヒトシくんはボーッと口を開けたまま座ってる。

「どうだった？」

ヒトシくんは口開けたまま立ち上がって、

「す...すげえ...」

そして、パチパチパチっていっぱい拍手してくれた。

「ミ、ミラ、すげえ、すげえ」

「ほんと？」

私は、ハアハア言いながらヒトシくんのそばに駆け寄った。

「うん、お、俺、なんか、すげえ感動した」

「ほんと？ 嬉しい！」

ヒトシくんに抱きつくと、ヒトシくんも私をギュッと抱っこしてくれた。

ぜったい賞取りたい！ 賞を取って...取るまではヒミツ。

コンクールの本番。

予選は通過した。ホッ。

本選はうまい子ばかりで、なんかだんだん自信がなくなってきちゃった。

どうしよう... 脚が震えてきたよ...

あっ、そうだ！

私はポーチからヒトシくんにもらった指輪を出してはめた。

指輪の青い色を見てたら、ヒトシくんの目を思い出した。

そうだよ、私、ぜったい賞を取りたいもん。

舞台の袖で出番を待つ。

ああ、ドキドキするううう。心臓が口から出そうだよおお。

で、でも、大丈夫、ヒトシくんの指輪してるもん。

先生だって、今回は賞が取れるかもって言ってたもん。

「エントリーナンバー73、ジゼル第一幕よりバリエーション」

アナウンスが流れて、私は舞台に飛び出した。

うちの近くのバス停で降りて、真っ直ぐヒトシくんの家に走った。

「ヒトシくーん！」

ゴンゴンって戸を叩くと、ガツンガタガタガタッって戸が開いてヒトシくんが顔出した。

「ミラ！」

「ほら！」

私はヒトシくんの顔の前に銀色のペンダントをぶら下げて見せた。

ヒトシくんが目を見開いてペンダントと私の顔を交互に見た。

「一位だよ！」

「えっ？」

「小学生の部で一位になったの！」

「や、やった...！」

「キャー！ 一位だよ！ 賞取れたよ！」

私はヒトシくんに抱きついてピョンピョン跳ねた。

「お、おめでとう！ す、すげえ！ ミラ、すげえ！」

ヒトシくんの声も嬉しそうだった。

「あのね、これ、ヒトシくんにあげる！」

私は入賞のペンダントをヒトシくんに差し出した。

「え？」

ヒトシくんは驚いた顔で私を見た。

「で、でも、これ、ミラが賞取った大切な...」

「だからヒトシくんにあげたいの！ あげたかったの！ だから賞取りたかったの！」

私はペンダントをヒトシくんの首にかけた。

ヒトシくんはペンダントについてるバレエを踊る女の子の絵をジッと見た。

「裏に日付と一位と私の名前が書いてるよ」

「ほ、ほんとだ」

「ヒトシくん、運動会のとぎりレーの一等のメダルくれたでしょ？」

だから、私もこのコンクールで賞を取ってヒトシくんペンダントあげたかったの」

ヒトシくんが驚いた目でジッと私を見つめてた。

「それにね、私はヒトシくんから婚約指輪もらったでしょ？」

だからそれは、んっと、婚約ペンダント！」

ヒトシくんが照れくさそうに笑いながらペンダントを指でなでた。

「サ、サンキュー、お、俺、一生、大切にする」

「うん、私もこの指輪一生大切にする！」

そう言って左手の指輪を見せた。

「この指輪のおかげで一位になれたんだもん」

「え？」

「この指輪はめて踊ったの、そしたらヒトシくんの前で踊ったときの気持ちになれたの」

「そ、そっか」

ヒトシくんは照れくさそうにボリボリ頭を掻いた。

「一生大切にする、だって、私とヒトシくん、一生そばにいるもんね」

「うん」

「ケッコンするんだもんね」

「うん」

ヒトシくんが私の手をギュッとにぎって、私もギュツてにぎって、

二人でずっと笑いあった。

突然のできごと

11月に入ると、クリスマスの発表会の配役が決まった。

私ね、「くるみ割り人形」のクララになったの！ 主役だよ？ 嬉しい！
ほんとの主役はこんぺい糖の精だけど、それは高校生の先輩がやるからさあ。
ヒトシくんも見に来てくれるって言ったし！ ぜったいがんばる！ ウフッ♪

白い息を吐いて、ランドセルカタカタさせながらヒトシくんの家に走る。

「おはよう！」

って私が言うと、ヒトシくんはニッコリ笑って手を上げた。

ヒトシくんの毛玉だらけのセーターは、ヒジのところに穴が開いてるから、

私、指を入れてコチョコココチョコ。

「わ、や、やめろ、く、くすぐってえ」

「ウフフ、私、ヒトシくんのボロい格好好き！」

「え？」

「ヒトシくんっぼくて好き！」

ヒトシくんは照れくさそうにボリボリ頭を掻いた。

私とヒトシくんは、ずーっと一緒にいる。

ヒトシくんがいれば他の誰もいないよ！ だって、すんごく楽しいんだもん！

でも、ここんところ毎日バレエだから一緒に遊べないのがねえ。

でも、しょうがないよね！

バレエが終わって家に帰ると、珍しくママが早く帰ってた。

「ミラ、ニューヨークに行くわよ」

「え？ また？」

でも、またヒトシくんの家に泊まれるかもお♪ ヤッター！

「私、大丈夫だよ、一人で留守番できるから！」

ほんとはヒトシくんの家に行っちゃうんだけど～♪

「ちがうわよ、あんたも行くのよ」

「え？ ウッソー！」

ニューヨークに行けるのお？ すごーい！

「ねえねえ、冬休みに行くの？」

「12月の初めには発つわ」

「え？ でも、まだ学校あるし...」

「引っ越すのよ」

「エ？」

「こっちの店は店長にまかせて、ニューヨークに拠点を置くことにしたの」

「え...でも...あの...バレエの発表会...」

「先生にはママが断っておくわ」

「え...だって...私...クララで...」

「そんなこと言ってる場合じゃないわよ」

「だって...あの...えっと...パパ...パパも一緒？」

ママがジロツと私を見て、ドカッとソファに座った。

「パパは来ないわ」

ママはチラッと私を横目で見te言った。

「ママとパパ、離婚するのよ」

「え？」

「別れることになったの、あんたは私が引き取ることになったけどね」

え...なに...なんのこと言ってるの...

「どっちみち、あの人なんていないも同じだったんだから」

リコン...って...どうということ...

「もちろん養育費は出すってことになってるし、あんたも会いたいときには...」

「リコン...って、なんで？ なんでリコンしちゃうの？ なんで？」

私は...なんだか怖くて...身体がプルプル震えてきた。

「おとなの話よ、あんたには関係ないわ」

「だ、だって、なんでパパと別れちゃうの？ なんで？」

「しょうがないでしょ！」

「だって、イヤだよお、パパと別れるなんて、ママ、そんなのイヤだよお」

「しょうがないって言ってるでしょ！」

ママはバンとテーブルを叩いた。

「パパはね、他の女の人と住んでるのよ！」

「え？」

「その女の人に子どもができたんですって！」

なに...わかんない...どうして...パパが...他の女の人と...子どもって...なに...

「ママだって、こんなところで終わるのはイヤよ、ニューヨークで自分の店を出すのが夢だったんだから」

私...なんだか...よくわかんない...なんか...ぜんぜん...わかんない...

「もうむこうで住むところも決まったし、あんたの学校も手配してあるわ」

頭がボーッとして...なんにも考えられないよ...

「向こうは12月からクリスマス休暇だから1月の後期から通えるわよ」

「や...だ...学校...変わるの...やだ...」

「しょうがないでしょ！」

「いや...いや...絶対イヤ！ イヤ！」

私は泣きながら家を飛び出した。

ヒトシくんは泣きながら立ってる私を見てビックリした顔した。

「ど、どうしたの？」

「ウ... ウエーン！」

ヒトシくんに抱きついてワンワン泣いた。

「ミ、ミラ、どうしたの？」

「ヒック...イヤ...ヒック...イヤだよお...ヒトシくん...たすけてよお...ヒック...」

「ミ、ミラ？」

「ミラちゃん、どうしたんだい？」

家の中からおじいさんが出てきた。

「寒いから、中に入れや」

私はヒトシくんに抱っこされたまま、ヒトシくんの家の中に入った。

ヒトシくんの家の中。

コタツと小さい石油ストーブが一個だけで、家の中にも息が白くなる。

私は泣きながらママが言ったことをヒトシくんとおじいさんに話した。

二人は黙って聞いていた。

「ヒック...イヤだよ...パパと別れるなんて...ヒック...」

「そりゃ悲しいこったなあ」

おじいさんが優しい目で私を見た。

「学校...ヒック...変わるなんて...ヒック...ヒトシくんと会えなくなっちゃう...」

ヒトシくんはチラッと私を見ると、そのまま下向いた。

「そうだなあ、ヒトシも淋しくなるなあ」

ヒトシくんは、ずっと下向いたままで...

「私、ずっとヒトシくんと一緒にいるって約束したのに...ヒック...」

「そうかい、でも、まあ、しかたないなあ」

おじいさんは淋しそうに微笑んだ。

「だってだって、私とヒトシくん、婚約したの」

「え？」

「ヒトシくんが縁日で指輪買ってきて、大きくなったらケツコンしようねって」

「ほう、そうかい」

おじいさんがニコニコ笑った。

「だけど...ニューヨークなんか行っちゃったら...もう会えなくなっちゃう...」

またボロボロ涙が出てきた。

「ミラちゃん」

おじいさんが優しい声で言った。

「悲しいことだがないあ、子どもにやどうにもできんこともあるんだよ」

おじいさんはそう言いながらヒトシくんの方を見た。

「ヒトシもな、この子の母親っちゅうのはワシの娘でな、中学んときには

グレちまってな、家おん出て戻ってこなくなっただな」

おじいさんが悲しそうな顔で言った。

「何年ぶりに戻ってきたと思ったら、まだ小さかったヒトシ連れててな、

子どもがいたら働けねえつつって、ワシにヒトシ預けてまた出てっちゃった」

ヒトシくんは上目遣いにおじいさんをチラッと見てた。

「かわいそうになあ、親の勝手にこんなジジイと貧乏暮らしさせられてなあ」

「お、俺、じっちゃんといれて、よ、よかったと、お、思ってる」

ヒトシくんがボリボリ頭搔きながら言った。

「か、かあちゃんのこと、ぜんぜん憶えてねえし、お、俺、じっちゃんといけるの、

イヤだと思ったことねえよ」

「そうかい」

おじいさんの目が真っ赤になった。

「私も！ おじいさんやヒトシくんといるとシアワセなの！

自分の家にいるより楽しいよ！ だから...ずっと...一緒に...いたいよお...」

ヒトシくんが黙って私の手をギュッてにぎってくれた。

「ヒトシも淋しくなるなあ、はじめて友だちができたのになあ」

ヒトシくんはくちびる嚙んで下向いた。

「離れても...私のこと...忘れないでいてくれる？」

「わ、忘れねえ、ぜってえ、俺、忘れねえ」

ヒトシくんはにぎった私の手をもっと強くギュッてにぎった。

「忘れるもんかい、ミラちゃんのことにはワシだって忘れねえよ」

おじいさんはそう言ってニッコリ笑った。

「いつかまた会えるさあ、なあ、おとになったら、また会えるかもしれないさ」

おとなになったら... それって、すごくすごく先のことで...

考えられないくらい遠く感じる...

「ほれ、お母さんが心配なすってるから早く帰いなや」

私はコクンてうなづいて立ち上がった。

「お、俺、送ってく」

ヒトシくんも立ち上がった。

暗い夜の道。

手をつなぎながら歩いた。

二人とも黙ったまま、ときどき顔見合わせても、何を言っているのかわかんない。

家の前に着いて、それでも私とヒトシくんは手をつないだまま黙って立ってた。

「俺...」

ヒトシくんが下向いたままボソッと行った。

「早くおとなになりてえ」

私は泣きべそかいてコクンてうなづいてヒトシくんを抱きついた。

ずっとずっと、二人で抱っこしあっていた。

ケッコン式

ほんとにニューヨークなんかに行くのか、ほんとにパパとママはリコンするのか、毎日学校に行って、毎日吉田さんの顔見るとウソみたいに思える。ずっとこのままみたいな気がしてくる。

学校の先生が、「吉崎さんはニューヨークに行くことになったそうです」って言って、クラスみんなが、「いいなあ！」とか「かっこいい！」とか言っても、私はぜんぜんピンとこない。

バレエで、私のやるはずだった役を他の子が練習してるのを見ると、私はクリスマスの発表会には出れないんだって思う。だけど、それだけで、クリスマスには私はもうここにはいないんだって思えない。

家の中にダンボールがいっぱいになって、ママが業者の人と、「これはいらないわ」なんて話してるのを聞いてても、頭がボーッとするだけで、やっぱりピンとこない。

毎日ヒトシくんと一緒にいる。もうバレエも行っていない。だって行く必要なくなっちゃったし... それに... できるだけずっと一緒にいたいから。だけど、何を話していいのかわかんないよ。「ニューヨーク行ったら手紙書くね」なんて言ったら、ほんとにヒトシくんと離れちゃうんだって気持ちになりそうでイヤだし、クリスマスの話や冬休みの話をしたって、そのときには私はいないから...。だから、この頃ヒトシくんと私は黙ったまま、ただ一緒にいる。

私とヒトシくん... このまま終わっちゃうのかなあ... 離れても忘れないって言ったけど、ほんとかなあ... だって転校してっただの子のことって、いつかみんな忘れてるよ？ クラスの子が私のこと忘れていいけど、ヒトシくんに忘れられるのはイヤ！ だって婚約したんだよ？ 私とヒトシくん、ケッコンするって約束したんだよ？なのに、どうして離れなきゃいけないの？

ガラーンとした家の中。

この家は売りに出さってママが言った。
ここはずっと私の家だったのに、私の家じゃなくなるんだ。
明日、東京に発って、それからニューヨークに行く。
でも、まだ信じられない…。

今日はクラスで私のお別れ会をした。
泣いてた子もいたけど、私、ボーッとして涙も出なかったよ。
明日持っていく私のカバン。
夏休みにヒトシくんの家に泊まったときに持っていったカバン。
ヒトシくんからもらった指輪やメダルやビー玉の入った宝石箱を入れた。
もう会えないんだ… 明日で会えなくなっちゃうんだ…
イヤ… そんなのイヤ… ぜったいイヤ！

私は宝石箱から指輪だけつかんで部屋を飛び出した。

ドンドンドンって戸を叩くと、ガツンガタガタって戸が開いてヒトシくんが顔出した。
「ミ、ミラ？」
「ヒトシくん、あのね、あのね」
私はドキドキする胸を手で押さえて言った。
「ケッコンしよう！」
「えっ？」
「ケッコンしたらずっと一緒でしょ？ 離れててもまた一緒になれるでしょ？」
ヒトシくんはポカンと口開けて私を見てた。
「クラスにもいるもん、お父さんが単身赴任で離れてる人、何人もいるもん、
でもケッコンしてるから、また戻ってこれるもん、でしょ？」
「う、うん」
「だから、ケッコンしよう！ そしたら絶対また一緒にいれるもん」
「で、でも、ケッコンって、お、おとなになんねえとできねえんじゃねえかなあ…」
「そ、そうだけど… でも、ケッコン式だけでもいいからしようよ」
「え？」
「おじいさんいる？」
「う、うん」
「そしたら、おじいさんの前でケッコン式しようよ」
ヒトシくんは私の顔ジーッと見つめて…
「し、しよう！ ケ、ケッコンしよう！」

そう言って私の手を引っ張って家の中に入れた。

ニコニコ笑いながら座ってるおじいさんの前に、私とヒトシくんは向かい合って座った。

「おじいさん、神父さまになってね」

「ど、どうすりゃいいんじゃ？」

「えっと、ほら、テレビとかで言うやつ、あなたはミラを妻にしますかって」

「そうかそうか、よしよし」

おじいさんは正座してゴホンって咳払いした。

「そんじゃあ、ヒトシ」

「は、はい」

ヒトシくんは緊張した顔で返事した。

「おまえはミラちゃんを妻にしますか？」

「は、はい！」

「そうかそうか、そんじゃあ、ミラちゃん、ヒトシを夫にしますか？」

「はい！」

「ええと、次はどうするんじゃ？」

「指輪の交換！」

「指輪っていってもなあ、代わりになるもんがねえなあ」

おじいさんがちょっと困った顔をした。

「大丈夫！ あるの！」

私はヒトシくんにもらった指輪を出した。

「お、俺のはこれ」

ヒトシくんは首につけてたペンダントを外した。

「ずっとつけててくれたの？」

「う、うん」

ヒトシくんが照れくさそうに頭を掻いた。

「よしよし、それじゃ、ええと、どうすりゃいいんだ？」

「んっと、ヒトシくんが私に指輪はめて、私がヒトシくんにペンダントつけるの」

「そうかそうか、それじゃ、ほれ」

おじいさんがヒトシくん指輪を渡した。

ヒトシくんは照れくさそうにチラッと私を見ると、私の指に指輪をはめてくれた。

私もヒトシくんの首にペンダントをつけた。

「おお、おめでとうおめでとう」

おじいさんがニコニコしながら拍手してくれた。

「ヒトシくん、私、今日から桜井ミラだよ」

「うん」

「まだホントじゃないけど、でも、ちゃんとケツコンしたもんね」

「うん」

「おじいさん、私、ほんとにおじいさんの孫になったよ」

「そうだなあ、ミラちゃんはヒトシのお嫁さんだもんなあ」

おじいさんがそう言ってニッコリ微笑んだ。

「だから、私、ぜったい帰ってくる、ここに、ぜったい、帰ってくるから...」

涙が出てきて...

「だから...ヒック...忘れないで...ヒック...待っててね...ウ...ウエーン！」

ヒトシくんに抱きつくとヒトシくんがギュッと抱っこしてくれた。

「忘れねえよ、ぜってえ...待ってる...ずっと...待ってる...」

ヒトシくんの声も震えてて...

私たちは抱き合いながら、ずっとずっと泣いた。

さよなら - Mirage in Blue ? 最終話

朝に...なっちゃった。

出発は1時だけど、ヒトシくんが学校に行く前に家に来てくれるって言ってたから、私は早く起きて待ってた。

窓から門の方を覗いてると、ヒトシくんが走ってくるのが見えた。
急いで玄関飛び出して門を開けた。

「おはよう」

「お、おはよう」

いつもの挨拶だけど、もういつもみたいに言えなくなっちゃうんだ。

「あ、あのさ」

ヒトシくんが真剣な顔をした。

「お、俺、ぜ、ぜってえ忘れねえ」

「うん、私も」

「お、俺、ぜ、ぜってえ、りっぱな魚屋になって、そんで金ためて、ミラを迎えに行く」

「ほんと？」

「うん」

「嬉しい！」

私はヒトシくんに抱きついた。

「ミ、ミラは...」

ヒトシくんは私を抱っこしたまま言った。

「お、俺のお嫁さんだから、俺、ぜってえ迎えに行くから、だから、待っててくれる？」

「うん！ 待ってる！ ぜったい待ってる！」

私はヒトシくんの身体にまわした腕にギュッと力を込めた。

「私...ヒトシくんに抱っこしてもらおうと、いつもホッとするの...ぜったい忘れないんだ...」

ヒトシくんの腕の中...ぜったい忘れない...」

「うん」

私はヒトシくんの顔を見上げた。

「ヒトシくんの目...見せてね...」

そう言ってヒトシくんの前髪をそっと上げると、きれいな深い青い目が見える。

「きれい...」

ヒトシくんの青い目が私を見つめてる。

「私が映ってる...」

深い青の中に私の顔が...

「このままヒトシくんの目の中にいたい...ヒトシくんの目の中に入っちゃえば...

ずっと一緒にいれるのに...」

涙が出てきちゃったよ...

ヒトシくんが震えるくちびるをギュッと噛んでた。

私はヒトシくんの青い瞳の中をずっと見つめた。

忘れないように...このきれいな青い瞳を忘れないように...

忘れないよ...ぜったい...忘れられないよ...

「ミラ」

ヒトシくんの声が震えて...

「大好きだよ」

青い瞳から涙がツーッと流れ落ちた。

「私も...ヒトシくんが大好き」

ヒトシくんの顔が近づいて...

そして...

ヒトシくんのくちびるが...

私のくちびるにそっと触れた...！

「あ...」

私はちょっとビックリして声出した。

「今のって... ファースト...キス...だよな」

「う、うん」

ヒトシくんは耳まで真っ赤になってうなづいた。

「私、ヒトシくん以外の人とぜったいキスしない」

「お、俺も、ミ、ミラだけ...だから」

「だってケッコンしたんだもんね」

「うん」

なんかすごくシアワセな気持ち。

ちょっとおとなになったみたい。

早くおとなになりたい。

そしたら...

大通りの交差点の方からにぎやかな音が聞こえる。

そろそろみんな学校に行く時間なんだ。

「あ、あの、それじゃ、俺...」

「うん」

そう言いながら、私もヒトシくんもつないだ手を離せなかった。

「手紙...書くね...向こうに着いたらすぐ書くね」

「うん、お、俺も、書く」

「あっ、毎日夜の8時にヒトシくんのこと考えるね、いつも考えるけど、

必ず8時には考えてるから、ヒトシくんも8時になったら私のこと考えてね」

「うん」

「えっと、それから... あっ、お月さまが出たら必ず見ようね、

そしたら、同じ時間に同じお月さま見てるってわかるから」

「うん」

「それから、えっと、それから...」

「俺、いつもミラのこと考えてるよ、月が出てなくても8時じゃなくても、いつも...」

「うん」

涙が止まらなくて...

ヒトシくんがセーターの下のTシャツの裾引っ張り出して拭いてくれた。

「ぜってえ迎えに行くから」

ヒトシくんはそう言うと大通りの方に走っていった。

私はヒトシくんの後姿を見ながら、ずっと泣いてた。

ニューヨーク行きの飛行機の中。

私は頭から毛布かぶって、ずっと目を閉じて、ヒトシくんの目を思い浮かべてた。

深い青の綺麗な目...

その中に映ってる私...

深い青の中にいる私...

あの青の中にいたい...ずっといたい...

早くおとなになりたい...

おとなになって...ヒトシくんとずっと一緒にいたい...

いつになったら、おとなになれるの？

ビデオみたいに早送りできたらいいのに...

この飛行機みたいに、13時間でおとなの時間に着けたらいいのに...

だけど...

飛行機は私を引き離していった。

ヒトシくんから...

何も知らずにシアワセだった時間（とき）から...

私は少女時代の終わりに向かって運ばれていた。

何も知らずに...

To be continued.....